鐘銘幷序

夫鐘者音之器也音法之輿也器以鍾音輿以通法所以楞嚴會上破阿難大衆之妄計戒場院內棐惡趣羣類之宿命至若喚醒永夜之眠啓開衆生之蒙者無不由此也蓋吾山自鼎建而降所宜有者殆備焉但闕鉅鐘一器耳余以之介意久矣適與一居士譚玄旨之次謂曰夫支那姑蘇之寒山寺因鳴鐘而聲重於禪林中吾寺亦同稱於彼刹而未及造鐘者豈不闕典乎居士莞爾曰師言實然某願欲造鐘輿樓以資父母及含靈之冥福可乎余曰吁善哉居士而今新鑄斯鐘復懸之高樓而晨鳴夕吼鏘鏘然則姑蘇與難波不礙方域而聳人天龍鬼聽之豈不愉然耶雖然大圓覺海無異同孰能分別支桑形相若區區致泥於名跡之間亦惑矣必也因聲而生悟因悟以入道庶幾無孤於斯鐘樓之建也與一居士稽首而退乃招鳧氏聚輸子樓鐘不日而潰干成矣居士爲誰也余檀信姓森本法號眞翁圓心者也山僧盍銘於其功哉迺銘曰

三界衆生兮　夢裡忽忽　警之以言兮　言必有窮
示之以默兮　默或不通　資汝考擊兮　克開其蒙

警昏策怠兮　匡吾□衆　姑蘇吼月兮　難波喚風
稱支唱桑兮　聲價是同　應宮應商兮　鏘徹蒼穹
攝津破眠兮　冥府摧鋒　聞所聞盡兮　眞心圓融
海無極壽兮　鎭吾松峰　皇風佛德兮　億年呼嵩

元祿十六歲舍癸未仲冬二十二天赦大祥日
臨濟正傳三十五世前住正法當山三世大熹圓定手書

如意輪堂

右寒山寺の東傍法界寺にあり本尊如意輪觀世音は惠心僧都作大坂順禮の札所なり

眼神八幡宮

法界寺の東傍にあり諸人眼病の平愈を祈るに土細工の鳩を備ふ靈驗いちじるしく平日參詣絶ることなし

祭神　應神天皇　末社

不動寺

右八幡宮の北にあり大聖山明王院と號す毎月三日　八日　十六日　十八日諸人羣參して大に賑わしすべて此邊を北野と號す

本尊　大聖不動明王　長凡貳尺許石像　弘法大師作　脇檀　降三世　軍荼利夜叉　金剛夜叉　大威德　阿遮羅　役行者

西天満寺街

大阪八幡宮
大鏡寺
西住寺
妙壽院
四天王寺

明神八幡
本住寺
觀音寺
法華寺
鐘楼
天王山寺

大師堂　本堂の西ニあり弘法大師を安す浪花大師めぐり第二番の札所なり左右毘沙門天觀世音等を安置す

聖天堂　本堂の傍ニあり歡喜天を安す

寺記云弘法大師諸國の佛宇に遍參して暫く爰に寓居す大師自ら不動明王の梵字を石に記し一夜に彫刻して側に置給ふ時の人其地を犯し或ハ此梵字の石を穢すに忽ち罰を蒙ること甚し因て亦祈り祭るに利益あらずといふことなし爾後大師再び來つて小室を造り石像を安置し不動堂と稱す元暦年中　後鳥羽院寶祚を祈り奉る所なりしが文治建久の亂戟の爲に堂宇燒亡す然れとも石像山野に飛で火も燒こと能わず文祿三年再び寺院を建營せり原來靈驗あらたなるにより諸人常に間斷なし

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　不動寺　ト題シアルモ構圖ナシ〕

誹師由平蹟　寶永中攝津國北野に沒すといふ其蹟詳ならず　初めハ本天滿町に住せしよし難波雀に見へたり前川由平といふ西山宗因の門子にして來山が師なり晩年釋に入て自入と改む當時名譽の俳師たり

蛤や　三日の月はく今日の海　由平

澤水に　月ゆりこほす　柳かな　同

山姥かいたらぬ　山や雲の峯　同

梶の葉の　裏にハ翌の　朝の事　同

白菊や　黄菊の中の　一ねふり　同

稲荷山古蹟　北野にあり不動寺の北の後なりいにしへ稲荷祠ありて風景の勝地なりしを後世圓頓寺といふ日蓮宗の寺院をうつして稲荷を以て鎭守とす境内に萩多く池に杜若ありて春秋ともに花の盛りにハ雅俗うち羣れて美景を賞す

かせぎの碑　本堂の前西の方ニあり桑原氏嘗て養ところの女夫の鹿ありしか二疋ともに日を隔てずして死せり主人ゑゑ〳〵是をあわれみ當寺に葬りて其ゑるしの石を建るところなり勒して曰

文政十まりひとゝせつちのへの子の秋のなかばとし頃飼なれしめをの鹿おの〳〵やめるさまにて日をつらねてぞゑゝぬいたましきものから偕老同穴ハいきとしいけるものゝ本意ならめと

津の國西成の郡北野いなり山とよべる圓頓精舍の庭なる眞萩がもとひとつ處に埋めやりて

幾秋もこゝにそひ寐の床しさに馴てもあかし萩が花妻　源梅龜

住木山太融寺　北野ニあり不動寺東北の方なり古義眞言宗　所謂浪花の古刹なり

本尊　千手觀世音　長貳尺七寸春日佛師の作脇士地藏尊毘沙門天兩尊を安すともニ弘法大師の作

護摩堂　本堂の西傍ニあり本尊不動明王座像長貳尺六寸智證大師作并ニ藥師佛弘法大師を安す大坂

稲荷山　萩花盛

序　志

あたりへもよられぬ萩の盛りかな

大　無

下掃て置直しけりの萩の花

梅　室

身をよけて通るはかりの萩見哉

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

圓頓寺

大師めぐり第三番の札所にして詣人平日に間斷なし別て毎月廿一日ハ參詣羣をなせり此尊像ハ大師の自作なりと云

聖天尊　本堂の傍ニあり

愛染堂　本堂の東にあり本尊愛染明王長丈六の大像なり肥州鍋島侯の寄附なり例年六月朔日殊更羣參す

巡禮觀音堂　本堂の東に鄰る西國廿三所の本尊を安す浪華北濱の住桑名屋何某新像を造り寄附す

釋迦堂　門内の南側釋尊文殊普賢及ひ十六羅漢を安す幷ニ青面金剛を安す庚申の日參詣羣集す

辨天堂　池の東傍ニあり辨財天女を安置す

辨天池　辨天堂の砌ニあり

表門　本堂正面ニあり金剛神を安す

夫當山ハ難波の古寺にして開基ハ弘法大師なり往昔弘仁年間大師諸國の靈場を尋ね給ふ折から此地に遍歷し給ふに松柏深く生繁り木下闇の甚暗きに靈光赫々として異香芳しき靈樹あり　卽大師これを伐て自ら地藏毘沙門の二軀を刻ミ佛院建營の意願を起し　嵯峨天皇に奏し　奉り草創の勅を請給ふ　帝叡感　斜ならず春日佛師の彫刻たる千手大悲の尊容を寄附し給ふ則ち是を本尊とし地藏毘沙門の兩尊を脇士として靈場となし給ふ爾後第八の皇子　源　融　公六條河原院を建て陸奥の千賀の鹽竈を模し難波の三津の浦よりして日毎に潮を汲せ御遊ありし折から此地に遊歷し給ひ當寺再營の志願を發し　淸和帝に奏して諸堂を修補し七堂伽藍の佛刹となし給ふ則彼靈木より成の地なるを以て住木山と號し融公の諱を以て太融寺と稱す然に星移物換りて兵亂の爲に伽藍ことゞ〳〵く荒廢し大門の跡ハ是より西北三町にありて今田圃の字となる其餘寶塔樓閣の廢趾も皆田圃の字に存り浴室の跡ハ風呂の小路と轉じおの〳〵耕作の地に猶然り後世快濟上人荒廢の地を惜ミて今の如く再興し繁榮の地とハなしけり且浪花三十三所觀音順禮の第一番とし大師巡りの第三番不動巡りの二番たりさる程に四時

ともに平日詣人閑斷なく庚申の日愛染祭等ニハ殊更摹參して賑わしき佛院なり

什寶　○世尊藕絲の袈裟○嵯峨天皇御守○弘法大師直作の彌陀三尊
○柏河の三尊佛○中將姫髪を以て縫給ふ四天王

後醍醐天皇建武三年二月朔日當國吹田莊を寺產として賜る綸旨あり又尊氏將軍寄附狀あり其文曰

當寺者河原左大臣融公之草創一天不二靈場也依有心願寄附攝州倉橋庄一分祈天下太平并欲遂二世安全之願依寄附狀如件

尊氏　在判

建武元年八月朔日

太融寺江

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ尙此餘靈寶等枚擧するに遑あらず且由來の詳なるハ寺記に見えたりとゝに略す〕

太融寺ト題シ　太融寺の茶みせの藤を見て　いにしへのおとゝのゆかり藤浪をくみてぞ茶屋の茶のしほとする　玉雲齋貞右ノ一首ヲ書入レアルモ構圖ナシ〕

北野天神社

同所にあり祭神天滿大自在天神此邊の生土神とす　例祭七月十五日

當社ハ寛正二年此地に於て一夜に松生て如も梢に靈光あり村民太融寺の別當僧に告て　後花園帝に奏し山城國北野社に　勅使を賜ひてこゝに菅公の神靈を勸請し北野天神社と稱す云々　攝陽羣談ニ出　按するに當北野の社あるを以て地名を北野といふか又ハ浪速の北の野なるを以て上古より北野といふか未詳ならず一說ニハ菅公左迁の時この地に休らひ給ふよし然れども此傳說ハ世にあバ〳〵あり浪花をはじめ九州までの海邊の菅神廟みな斯のごとし信じかたし

梅塚天神

右社地の南ニ鄰る常安寺境内ニあり古木の梅の傍に菅神の廟あり

攝陽羣談云　常安寺ハ行基大僧正の開基にして　聖武天皇の造營なり界内縱横二町餘一丈八尺の觀自在菩薩の像及び四大天王の像を安す四方に竹林ありて内に放池を構へ鄰里の民庶をして生るを放たしむ云々　然るに慶長年兵火の爲に燒失せられ荒蕪の地となる庭の乾に梅の枯木あり其本に時々光を放つ之を穿ち見るに石佛の藥師如來粲然として全きを損ぜず村民怪んで小堂に納めて姓社の　側に安す茲に元祿十二年春の頃播陽書寫山西城前院主體了偶然として此地に遊び里人の庵室に寓すること四五月村の古老了に告るに前の事を　詳に說く了歡悅こと窮りなし遂に公に　訴るに廳に日ならずして成る南にハ藥師堂を築き北にハ常安寺を營む中尊ハ書寫山より相傳の如意輪觀世音左右ニハ不動明王毘沙門天をよび元三大師を安置す梶井宮故を以て御紋を賜ふ又鄰地に一の森あり傳て梅塚と號す村輩相議して梅塚を常安寺に附して藥師の堂前に移す故に世の人亦呼で梅塚の藥師といふ云々　これを號くト云

一說此梅塚ハ菅公寓居の地を以て

按に天神の社ハ後世營むところにして梅塚の名あるに附會せしものならんか菅公寓居の古蹟といへるも信じがたし後人尙考ふべし

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ北野天神社　梅墳　ト題シアルモ構圖ナシ〕

鬼子母神堂

濱村ニあり顯正論云圓滿具足藥叉鬼子母天を安するなり靈驗あらたなりとて遠近より歩みを運ふこと大かたならすさる程に寶前の供物獻燈香花の甚しきハ言ふも更なり詣人牽て題目自我偈方便品などとなふる聲いとかしがまし參詣の道すじにハさやかなる茶店貨食家たてつらなり信者の支度遊參の休息をもてなす別て例月八日にハ殊更に牽參してすこぶる賑わし浪花北方の流行神といふべし

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ鬼子母神堂　ト題シアルモ構圖ナシ〕

清淨瑠璃山三昧院源光寺

南濱村ニあり淨土宗無本寺　俗ニ濱の寺といふ

本尊　天筆阿彌陀如來　長壹尺九寸法明上人感得し給ふ

寺記云　當院開闢ハ往古人王四十五代　聖武天皇の御宇天平勝寶年中大僧正行基菩所興隆火坎三昧を標すの始なり今濱の墓所といふ　其側に寺院を草創し僧尼を集め妙典を修し萬靈を弔わしむ木石土の三佛を彫刻して此に安す其火坎の中にハ經文書寫の碑および佛像等を深く埋めり爾後　清和天皇の御宇貞觀年中播磨國鹿兒郡野口村念佛堂の開山敎信沙彌億百萬遍の功德　稱名を積り沙彌生得貧窮にして本尊なき事を愁ふ諸佛これを憐み給ひ生身の彌陀尊來迎して告て曰我形容天筆の畫像在て和州吉野郡勝手社にあり神則汝に授んとなり時に貞觀七年秋七月七日告の如く勝手の神敎信にこれを授く故に卽ちこれを本尊として信仰す爾後多くの星霜を經て建武四年八月十日の夜融通念佛宗派の中祖法明上人勝手の神の靈告を蒙り加古の念佛堂に至り天筆の本尊を乞ふ寺僧もひとしく靈告によりて法明を濱邊に出むかひて終に天筆の畫像を附與す法明上人これを授り飯帆の砌難波の西に着て村里の道俗を結緣する事一七日日毎に三萬餘人なり其地に就て供養の塚を築き如來塚と號す今の塚本村　夫より此に來り行基開闢の古刹なれバとて堂塔を增建し融通大念佛の宗派を興しこゝに安置し本尊これなり

と奉じ今に至りて衰廢なく浪花北方の靈場たり　云々　尙本緣起に詳なり且什寶枚擧するに遑あらず事ゑげゝれバこれを略す

權現松

源光寺の近邊本庄村の田圃の中にあり頗る古松にして枝葉四面に繁茂し所謂名木なり樹下に熊野權現の小祠あり故に號くる歟

鹿嶋神祠

本庄村ニあり祭神武甕槌命　今天王と稱す寛永の初め諸國に疫病流行す時に常陸國鹿島の神輿を出し所々に渡し萬民の疫難を除くことを祈らしむ必らず靈驗いちじるしく因てこれをいさめて踊りを催す世俗これを鹿島踊といふ其砌此地にも神輿をわたせし由緣によつて勸請し生土神とす夏祭六月七日　秋祭九月廿五日神事賑わし

權現松

東西九閒餘　南北十閒餘　頗老樹の名松なり實其精變じて青牛と化し又ハ伏龜となるべく思ひせらる

前關白太政大臣

○

こととはん古木の松よなれのみや我忍ふ世の昔をも見し

堀川院百首

冬さむみ後に玄ぼむといふなれとかハらさりけり松のさかりは

隆源

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ樁圖ナシ〕

豐崎社

右本庄の森の南の口にあり松の枯木の株に注連を結まわし四面に玉垣をかこみ前に石の燈爐を建て是ニ豐崎社御神前と勒す土人の云此所今生土神祭禮の御旅所なりといふ按ずるに先板の畫圖にこの枯木を八本松と記せり其頃ハいまだ御旅所にハ用ひざりしと見ゆもしや此地長柄豐崎宮の古蹟なるを以て古松に垣結まわせしか又豐崎社と勒せしハ言傳へし事のあるよりして斯ハ為るせしならんか未詳後人尙考ふべし

觀音寺

右同村ニあり當時禪宗黃檗派龍門山と號す尤古刹を再興せしなり

本尊　千手觀音　孝德帝の御念持佛にして聖德太子の御作なり原此寺ハ古刹にして累年荒廢せしを近來正德六年永泰和尙再興して檗門とす　靈元法皇の勅詔ありて宸影をこゝに安す又御寄附の宸翰等あり額ハ林丘寺宮普明院の眞筆なり

姫嶋松原

北中嶋崇禪寺馬場の松原ならんといふ

夫木　姫嶋の小松かうへにいるたづハ千とせふれども年老ずけり　鎌倉右大臣

山川正宣云　姫島　松原其初　書紀に見えたるハ　安閑紀二年九月放牛於難波大隅島與媛島松原云々後に靈龜中此牧を止められし事も續紀に見へて攝津たる證灼然なるを一說に豐後なりといふハ敏達紀十二年召日羅眷屬賜德爾等任情決罪是時葦北君等受而皆殺投彌賣嶋〔注〕彌賣嶋蓋姫嶋也日羅移葬葦北云々此葦北ハ肥後の地にて害に遭し日羅が故鄉なれバ柩を皈葬せし文勢をもて其近所と心得豐後なりと

杜撰せしにこそ扨近世攝津志ニ大隅島を西成郡上中嶋大道村として姫島ハ稗島なりと云も亦誤なり

古事記大雀天皇爲將豐樂而幸行日女嶋之時於其島雁生卵

これを書紀ニハ

仁德天皇五十年三月河内人奏言於茨田堤雁産之

とあれハ兩岸の差別ハともあれ難波より西陲の地にハ有べからず且今稗嶋の地ハ松原などの有し理もあらぬ上に

萬葉集二和銅四年河邊官人姫嶋松原見孃子屍悲歎作歌二首

妹之名者千代爾將流姫嶋之小松之末爾蘿生萬代爾

難波方鹽干勿有曾根沈爾之妹之光儀乎見卷苦流思母

仙覺抄曰姫嶋ハ豐後國云云　攝津風土記云比賣嶋松原者昔輕島豐阿伎羅宮應神御宇天皇之世新羅國有女神遁去其夫來暫住筑紫國伊岐比賣嶋乃曰此島猶不是遠若居此島男神尋來乃更遷來停此嶋故取本所住之地名以爲嶋號云云（伊岐）　姫島松原ハ攝津國也この松原ハ難波の澪歟風土記次下に長樂の邊と見えたりたとへ豐後國に有とも今の歌ハ津國の姫島をよめるなり以上仙覺抄是に據て考るに西成郡下中嶋北方村に大松林ありて古樹蟠屈繁茂せり其中に後世

崇禪寺を創せしにより世俗崇禪寺馬場と號く馬場の稱詳ならずもし豐臣氏の時調馬の地とせし歟蓋此所なる事揭焉たり近世遠城生田の輩が鬪爭ニのミ其名高くして二千年に近き舊跡たる事をバ人知ぬなりけり

崇禪寺

北中嶋ニあり禪宗曹洞派　凌雲山と號す

本尊　釋迦牟尼佛　行基之作　長壹尺五寸

子安觀世音　十一面の尊像聖德太子御作　長三尺五寸許

鎭守社　辨財天を祭る　本堂の前ニあり

親鸞聖人名號　六字の中に阿彌陀經の細字あり

涅槃像　唐李龍珉の筆　此餘什寶若干あり略之

當寺開基ハ德叟亨鄰和尚なり足利六代將軍義教公の御菩提所として細川左馬頭持賢嘉吉二年修造を加ふ又將軍義教公の御袖印を賜ふ云

南方紀傳云　嘉吉元年六月將軍家義教公赤松滿祐が所領備前播磨美作を分て赤松伊豆守に給わんとす貞村童の時將軍自愛異なるにより今以て斯の如し同廿四日將軍滿祐が亭へ渡御あるべしと兼日相定めらる滿祐饗應の用意をいとなむ是滿祐が庭前の池水に鴨子を產ミ興ある故となり其日に至て赤松の二男竊に滿祐に語て云今日渡御ハ全く庭前御覽の爲にあらず此次手を以て當家を亡し貞村に所領を給わらんと也滿祐この事を聞て恨を含ミ渥美中村浦上以下三百人所々の口々に隱し置將軍を招請す卯尅に彼亭に渡御猿樂酒宴におよび滿祐

謀をなし厩に立をく馬を放ち是を捕んとして門を閉伏兵を起し屏風の後より渥美某出て將軍を害す　年四十八　座中伺公の面々驚き騒ぎ或ハ討れ或ハ同士討かづを知ず　京極加賀守入道縞山山名中務大輔熙貴死をおとす　斯波左兵衛督義廉大内刑部少輔持世垣を越逃ゆく　左衛門督萩原實雅卿數箇所きられ乍ら是も垣をこへ落る　滿祐ハ討手向ハゞ一矢射て腹切べしと思ひ相待といへども諸人あわて騒ぎそゞろに時を移す　滿祐父子三百餘騎を率へ攝津國中嶋の領所に趣く　此所に於て將軍の首を崇禪寺にて葬り後播州城山の城に籠る云々

按ずるに爾後同年九月滿祐追討の諸將發向し終に滿祐敗して自殺し首を獄門ニかけるト云々　然れバ翌二年崇禪寺を修造し追福を營ミ奉りしなるべし　然るに今其古墳の趾の詳ならざるぞ惜むべき事なり

義士墳　寺境の北の方墓場ニあり　世に崇禪寺馬場の敵討とて世に名高し　石碑の左右に摩利支天不動明王の石像あり

劍樹心英居士　正德五年未十一月四日

刀山天雄居士

義士遺具　當寺ニあり需に應じてこれを觀縱す

刀　一腰　遠城治左衛門重廣所持　脇指　一腰　同人所持　銘攝州住　藤原忠行　長刀　一振　同人所持　銘關兼安　刀　一腰　安藤喜八郎所持無銘筒井越中守入道紀充

銘定備前兼光　脇指　一腰　同人所持無銘定　筑州住左京　鑓　一挺　同人所持　銘河内守國助　千鳥十文字　鎖帷子　手裏劍　兩人所持其餘小道具あり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ崇禪寺松原ト題シアルモ構圖ナシ〕

崇禪寺馬場

右崇禪寺門前方三町許の松林あり林中に稲荷神祠あり此里北方南方の生土神とす例祭六月十八日　九月廿六日なり

此地ハ前に山川氏の按ニ云姫嶋の松原の古趾なるべし古松の大樹繁茂の光景後世の土地にハあらずかし馬場と號ること詳ならず豐臣氏の時代諸士この松原にて騎馬の調練ありしならんかといふ説も所理なり　春色うらゝかなる頃ハ都下の老若打むれて遊宴を催し最賑わし

傳云　正德五年の頃崇禪寺馬場の敵討といふ事世に名高し其始末を粗尋るに和州郡山の城主本多侯の家士に遠城治左衛門重廣安藤喜八郎光乘といふ兄弟あり又末の弟に遠城宗左衛門重次といふ者あり又同家中に生田傳八郎といふ劍術者ありて弟子多く自ら慢じて人を侮る事常なり然に宗左衛門傳八郎謀つて宗左衛門を圍討にして逐轉す兄の重廣光乘の異母悲嘆のあまり止を得ずして城主に願ひ義を立て山口武兵衛伊藤勝左衛門と變名し大坂に來つて數尋ねもとむるに漸にして傳八を見出し討んと乞ふ傳八の云く今幸ひに兩士に遇て敢て死を惜むにあらず今暫く命を請て三日の後靜なる崇禪寺馬場に會して潔く討れんといふ兩士承引て必らず約諾を變ずべからずとて別ぬ斯て其日にいたれバ兩士松原に赴き待つれども來らず其日も空しく過ぬ兼て宿所を見とゞけたれバ書翰を以て催促す傳八是非なく其翌日松原へ出て兩士と共

義士遺具觀縱

敵打の五十回忌に
遠城安藤兄弟の
うちものを見て

兄弟が心をくみて皆袖をぬらすいそちのなみのうちもの　栗標

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

に勝負を決す原來傳八郎ハ邪佞の者なれバ惡儻をかたらひ松蔭にかくしをき勝負の出會あらんとおもふ所に飛道具をもつて四方よりねらひ打けれバ終に返討に兩士とも討れぬ其遺蹟なれバとて今に此地を往來する人悲嘆せずといふことなし兄の重廣ハ年廿六歳弟光乘ハ二十四歳先に討れし重次ハ十七歳とそ聞へし

又一說に生田傳八郎ハ其場を立のき同月廿四日夜大和國矢田千日寺の門前ニおいて切腹のよし懷中に辭世あり

法岳義劍居士

死手の山たどり行見る今宵かな

俗名　生田傳八郎　行年廿六歳

又一說ニハ生田傳八郎宗左衞門を討て後東武の由緣に身を潛めしが故あつて彼方に住することなりがたく據どころなく浪花に來つて谷町の弓師丹波の食客となりて居たりしが其頃浪花にハ劍術柔術をはけむ者多くありて此生田の門弟となるもの少からず丹波ハ常々入魂なる曾根崎新地の妓家花屋何某か放さしきを借うけ傳八郎をいれ武藝の稽古場となしたり此花屋の亭主ハ此一兩年以前に死して後家と娘二人あり姉ハ病身にて藝者をやすませ内にて保養をさせ妹ハ舞子なれバ勤に出し其外かゝへの女郎一兩輩も有て相應にくらしけれども主なくなりてより放座敷ハ茶室の好みに建しまゝむなしく明家同前なれバ丹波が引うけにて生田にかしけり傳八郎ハ武術に鍛練せしゆへ追々に門弟もふえて豐に月日を送りけるさる程に裏と表の事なれバ病身の姉を生田の方に客來の節ハ茶の給仕あるひハ酒の酌などにやとひけるがいつしかわりなき中となり懷胎しけるを粗母も知りけれ

ど多くの門弟に尊敬せられ富るとにハあらざれど暮しかたに不自由もなきゆへ幸ひの事におもひて娘がこゝろの儘に暮させけり然るにある日門弟に誘われ生玉邊へ傳八郎出し途中にてはからず遠城治左衛門に出合名のりかけて敵を討んと詰かけしかども　傍　にハ門弟も數多あることなれバ種々と言なだめ明後日崇禪寺の馬場において勝負を決せんと約してわかれぬ跡にて門弟口々に尋ねけるゆへ傳八郎も是非なく郡山にての次第を物がたりけれバ若輩の門弟血氣にまかせ必ず先生のお手をおろさるゝに及ばず我々が討とらんと進むるをバ段々と言なだめて曾根嵜へ皈りぬ偖又治左衛門にハ石町の借座敷にかへり弟喜八郎に其日の始末をかたり約束の日を遲しと待わび當日崇禪寺馬場へ行けれども見へす空しくかへりがけに弓師丹波の方へ催促に至りけるに丹波の方へとくより傳八郎の書狀來り有て今日ハもだし難き用事出來しゆへ明日は相違なく彼所にて出會すべしとの文言なりさてハ翌こそ優曇華まさりの敵討と兄弟もろとも小踊して翌日未明より宿をいで長柄のわたし場さして行けりこゝに傳八郎が日限をのばせしハ門弟の銘々おもしろき事におもひ且ハ後學の爲などゝ同道せんことを乞へども傳八郎ニハ彼兄弟を討んとて大勢の門弟をつれ行んも耻かしく此評定に彼是と時をうつしけるゆへ日限を一日のばしけれども達てとのぞミて皈らぬ者もありけれバ是非なく翌朝門弟の銘々を同道して渉し舟を先へこすより兄弟もつゞいて渉しをこゑ終に勝負にかゝりしが立合ふ頃ハいまた薄ぐらく人顔もおぼろに見ゆるばかりなれバ松かげより門弟等遠矢にて射てとらんと雨のごとくに放しかけたり兄弟これを事ともせず傳

八郎を雙方より長刀と刀にて切付る傳八郎も雙方を受ながら火花をちらして戰ひけるが木蔭よりハ眼つぶし或ハ石瓦を投出し射かくる矢ハ篠を亂すがごとくなりかゝりし程に兄弟の眼へ砂やいりけん互ひに喜八兄者人と聲をかけながら傳八郎にうつてかゝりしが傳八郎にも疵やあふたりけん三人ともに掛聲もかすかになり稍てひつそと靜まりける夜も明はなれなバ往來の者の目にやつかんと門弟そこ〻より馳あつまり三人の傍へ立より見し所に三人ともに朱にそミ傳八郎ハ傍にわかれ兄弟ハからだをにじらせ負重なつて息絶たり門弟あわて傳八郎にハ印籠の氣付をのませなどして介抱し兄弟の身にハ惣々よつてとゞめをさし身に立し矢を抜とりし時遠城兄弟よりハ傳八郎に立し矢數多かりしとなりさも有べし鼎の足のごとく三人の向ふ所へ的もさだめず遠矢を射しゆへ生田の身に立し箭の多かりしハ是實說と思わる斯て門弟どもハ師の助太刀せんと思ひしにはからず三人ともに射ころせし事ゆへ心あわて蟲の息なる傳八郎を介抱し肩にかけて長柄の渡し迄來りし所に川端ニて生田ハあへなく息絶けり今更詮方なけれバ其儘長柄川へなげこミ互ひに後日ハ沙汰なしに濟さんと言あわせて皈りける程なく往來の者の目に付けれバ公にうつたへ御見とゞけあつて意趣切にて事ずミせしとぞ

前に云說の生田傳八郎大和國矢田において切腹せしといふこと不審いづれか是なるやあらず按ずるに惡報の顯然たることを思へハ此松原において三人ともに合討に死したる方實說ならんかとおぼゆ後人尙考ふべし

又一說に花屋の娘が懷胎せしハ男子にして成長の後上田秋成といふ名譽の逸人となりしよしをいへり然れどもいさゝか無稽

の説なるを以て秋成閑居の條に詳にす

大願寺

佛性院村にあり古刹にして初め佛性院といふ又橋本寺ともいふ後世日蓮宗となりて瑞光山大願寺と號す

夫木　なからなる橋本寺もつくるなりおこさぬ家を何にたとへん　信實

本尊　釋迦佛　闍浮檀金長壹寸八歩近世日慶上人當寺を再興す

橋柱地藏尊　寺境南の傍にあり長五寸許寺記云後一條院御宇長柄の橋はしら水そこよりあがりしを帝に獻りければ佛匠に命じて地藏尊につくらしめ給ふ即此地橋本寺の舊跡なればとてこゝに淨刹を建て安置すべき詔りによつて堂舍建立あり

鼠突不動尊　長壹尺三寸許此尊ハ京師姉小路の不動尊に同じト云

光明池

同村にあり傳云天正年中池中に光明あつて又龍燈をてらす村民これを怪しみ池底をさぐるに佛像を得たり今の大願寺の本尊これなりといふ

柴嶋

淀川の側にあり今俗に國嶋と書す此邊淀河の流れをくみて布木綿をのべ敷て乾晒すゆへに恰も雪の降つみしごとく其眺望絶景なり俗にさらし堤と號し浪花の貴賤舟行してこゝに遊ぶこと平生にありて風流の地なり

日本紀　仲哀天皇八年春正月限沒利島阿閉島爲御宮割二柴嶋一爲御廐云々

按するに此地もつとも古く且柴嶋と書てくに嶋と讀こと又久し其緣故詳ならず一に説槲じまの轉語ならんかといふ本草綱目に槲山林にこれあり其木堅しといへども材に充るに堪ずたゞ柴となし炭とするに宜しト云々槲をもつて柴薪とし炭となすこと和漢ともに異ならず最久しされバいにしへ此嶋に槲多く生て柴薪となし伐出せしゆへ槲島といひ又柴しまともいひしを後にハ柴嶋と書てくぬぎ嶋とよみならわせしを又轉語してくに嶋といひしなるべし

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ柴嶋晒堤ト題シアルモ構圖ナシ〕

長柄豐崎宮

長柄村の南北本庄村等舊蹟なりト云人皇三十七代の帝孝德天皇ゑばらく皇居を造らせ給ふ所なり

いにしへの長柄の宮ハ跡もなし橋柱だに朽はつる世に　公朝

皇居の事ハ首卷ニ委しく出せバこゝに略す

長柄川

一名中津川淀川第二の支流にして長柄村より西流し傳法にいたつて嶼々を分遶し海に入

仁德天皇の御宇難波堀江を疏導す又延曆年中三國川を通ず尙氾濫して已ず柴島の北故水道を疏し水勢を三國川へ漏洩す號て中津川といふ今の二重堤これなり其後名柄川を浚へ此水路を塞ぐ童謠ニ云　津の國の中津川原をせきかねて土持あまた持かねてト諷ふハ是なり名柄川の一名を中津川といふハこの由緣なり

と云

千載　あしの屋の假初ふしハ津の國のながらへ行と忘れざりけり　藤原爲貞

長柄橋跡

此橋の舊跡古來より定かならず何れの世に架そめていづれの世に朽くづれけん又分明ならず橋杭と稱する朽木所々にあり

今田畑より堀出すこともあり其所一擧ならず一説に上古ハ大物の浦より東北江口の里南ハ福島浦江曾根嵜より神嵜川まで一面の大江なり即ち大江の名もこれより出る又これを難波江難波入江三津江御津浦とも和哥に詠り其江の中に嶼々多くあり今村里の古名の遺るもの多し所謂南中嶋北中嶋の中に橋本柴嶋濱川口增島引江小嶋等みな水邊の鄕名なり長柄の橋ハ　孝德天皇豐崎宮の御時より彼嶋々に架わたして皇居への通路とせしなり今諺ニ云長柄の橋ハ長サ壹里ありしと言傳へたり是一橋の名にあらず嶋より嶋へわたして橋の數あまた有ども地名によりて皆長柄のはしと言ならわしけり委しきハ名柄豐崎の橋なるべし古來より今の北長柄より豐嶋郡垂水庄に至るまでを長柄の橋跡といふ又一説にハ長柄川今の船渡口のほとりより古杭のこれりとて近年堀出し江府にたてまつるト聞ゆ　孝德帝崩じ給ふ後ハ長柄豐崎の宮を大和の飛鳥の宮に遷都し給ひ橋の修理も怠り風威の時江海渺茫して落損じける事多し　嵯峨天皇の御宇弘仁三年夏六月再び長柄の橋を造らしむ其後　文德天皇の御宇に船わたしとなれるよし尙委しくハ首卷に論す故にこゝに略す

古今　難波なるながらの橋もつくる也今ハ我身を何にたとへん　伊勢

拾遺　蘆間より見ゆるながらの橋柱むかしの跡のゝこるべなりけり　藤原清忠

新古今　春の日の長柄の濱に船とめていづれか橋と問と答へぬ　惠學法師

續後撰　月も猶ながらに朽し橋柱ありとやこゝに澄渡るらむ　太上天皇

續拾遺　扨もけにながらの橋のながらへて世を渡る身ぞ苦しかりける　龜山院

玉葉　いにしへにあらず長柄の橋柱ふりにし跡を忍ばずもなし　順德院

同　さもあらばあれ名のミなからの橋柱くちずは今の人もゝのばし　定家

續後拾　けふいくか日數もふりぬ津の國のながらの橋の五月雨のころ　讀人ゝらす

同　朽ねたゞうき身ながらの橋柱世を渡るべきたつきだになし　僧正慈慶

榮花　橋柱のこらざりせバ津の國の知らずながらや過果なまし　辨範母

同　音にきく長柄の橋ハなかりけり千鳥ばかりぞ鳴わたりける　左兵衞督資仲

同　夫ながらそれとも見へぬ橋柱久しき跡のゝこるべなりけり　女房

同　橋柱それと斗をゝるしにて昔ながらの跡をみるかな　一品宮女房

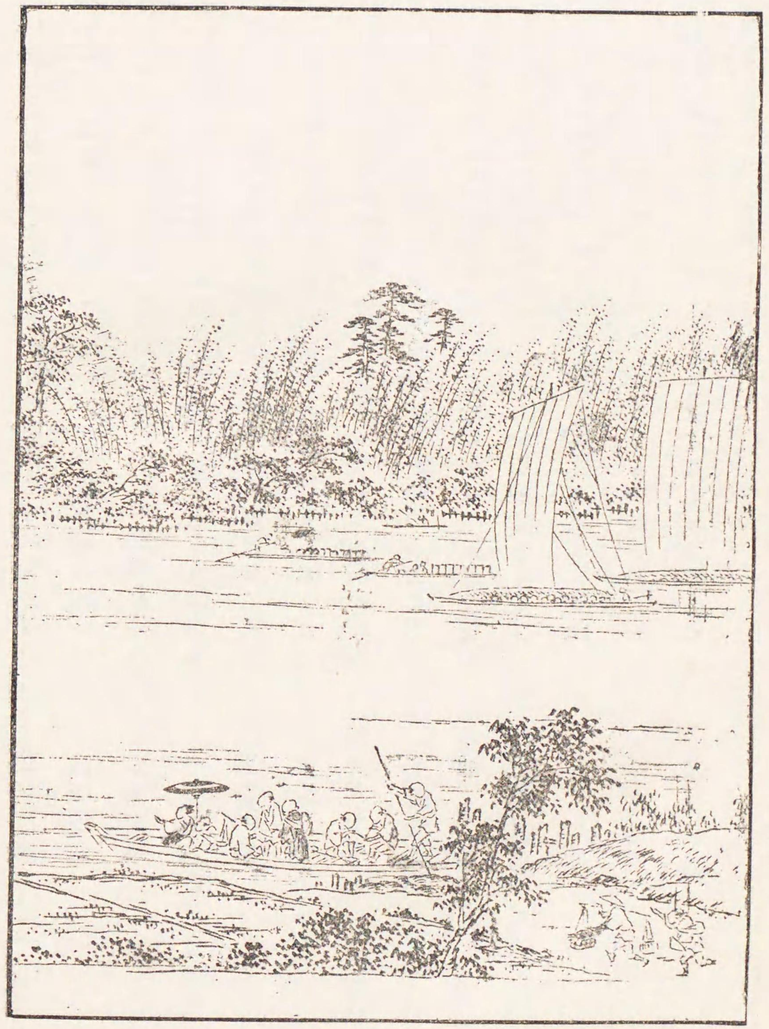
同　行水にながらの橋ハかよひけりひとはなにのミ聞渡りつゝ　同

貞治三年卯月上旬足利將軍義詮公住吉詣記云

長柄川渡口

舟子招
招立水
隈渡
錢討去
滿船堆
難尋
當日與
梁跡
但見輕
篙頻往
來

廣瀨
旭莊



いにしへの長柄の橋はくちはてゝふみにかけるを今ハ見るのみ

春雲

上略　夜明もてゆくほどに長柄といふ所につきぬいにしへハ此所に橋ありて人のゆきかよひしが今ハ橋の跡とてハわづかに古杭ばかりなりまことや古きためしに人のひくめるハことハりにぞ

朽果しながらの橋のながらへてけふに逢ぬる身ぞふりにける　義詮公

長柄川渡口

北長柄ニあり此川條の渡口五箇所あり當長柄の渡を川上の第一とし横關のわたし本庄の渡十三の渡野里等也

○

初霞ながらの橋もかゝるなり　蓼太

佐保姫や長柄の橋ハ絶たれど　道彦

涼しさを見よと長柄に桁もなし　我黑

陽炎にむらなし何所が橋どころ　來山

老の身や長柄の橋と夜半の月　蕉雨

藤の花長柄のはなし聞にけり　桂丸

安良郷廢趾

攝津志曰　安當作長方廢而長柄村存ス然れハ安良を長良に轉じ後又長柄と書しなるべし

釋迦堂跡

北長柄ニあり此所ハいにしへ長柄の皇居の御時より毘沙門堂の古墟なりあかるを中古仙譽堯鑑上人京師北嵯峨の釋尊の像をうつし五臺山清涼寺と號しこゝに住せりあかるに後廢して宇となりたりしを黃檗派獨嶷和尚菴を開いとなみて瑞祥菴と號す當庵に彌陀の名號の大幅あり布廿五反を以て製す長さ凡十五間餘あり文字の大さ貳間餘河内國玉手珂瑄上人の筆翰なり實に無雙寶物にこそト大坂鑑ニ見えたり然るに今又廢して幽の庵となり尼僧これを守りて寶物のたくひ更になしといふいかゝ成しかは惜むべし若くハ京師の本寺へ持かへりしものたらんか

鶯塚

同村田圃の道の傍ニあり諸說數ありといへども信用しがたし按ずるにいにしへ長柄豐崎の皇居ありし時の高貴の方の荒墳なるべし河内國山田村に鶯の陵といへるあり是則長柄に皇居をつらせ給ふ孝德天皇の陵なりあかれば鶯の名此帝によりどころあれば正しく其御宇の高貴の塚ならんかと覺ゆ

小野於通舊栖

長柄村より西の方なる畑の中に菴室の趾とてあるしの松ありて里俗お通の松とよびしが正德年中に朽たりと南水漫遊に見えたり

小野於通の傳系其說區々ありて詳ならず凡口碑に傳ふる所織田信長公の侍女たり博學秀才にして文をよくす君命によつて源牛若丸三州矢矧長者何某の娘淨瑠璃姫其母ハ三州鳳來寺峯の藥師へ祈誓をかけて儲し所の女ぞに馴睦給ふことを述作して長生十二段と題す是藥師の十二神に表し十二因緣の道理を諭すゆへ十二段といなしけるとぞ是を淨瑠璃物語と號く其後此草紙の文に角澤檢校或ハ岩船檢校とも云節をつけ三絃に合して語り初めしより

是を淨瑠璃と號し一藝とハなれり是淨瑠璃の權輿なり南水漫遊云於通自筆十二段の卷ハ大坂内本町島田某といへる人持傳へしかど元祿の初めに燒失す惜むべき事なり偖亦於通ハ織田家の亂を避て津國長柄の里に纔なる草庵を結びて住けるが原來和哥を好ミて數首秀歌あり就中世人よく聞つたへたる哥ハ

つれ〴〵とふりにし跡をおもふにも袖こそ濡れ五月雨の空

元和二年三月五日行年五十八歳にして當長柄の庵室に卒すといふ又一說ニハ織田家の亂後豐太閤の侍女となり北政所の御所望によつて十二段の淨留理物語を作るとも云或ハ鹽川志摩守の後妻となりしとも又ハ新上東門院へ仕へしとも云へり

一書云　於通ハ淸和源氏の後裔小野藏人直時の後小野十良左衞門義嗣の女にして織田信長公の愛妾於國の方の侍女たり後に豐臣家ニ仕へ浮田秀家に嫁す浮田家沒落の後攝州長柄の里に潛び此地に於て卒すとぞ　又尼子家の浪人松浦石見といふ人大坂に住し手跡の師範せしが算圓流の能書にて弟子おびたゞしかりしが於通も此石見が弟子となりしと云尙肇曲類纂に諸說を委しく出せりこゝに略す

近世畸人傳云　天正の頃年四十にかたむける女物狂しく一卷の文を笥に入首にかけて花のころハ東山の木蔭また月の夜ハ五條のはしの上などにいゐて彼文を出し高らかによみ又沈ミて讀などして聲をあげて泣悲しミ何やらん獨言いひて後とり納めて去これハ織田信長の大臣のおもひもの小野のお通につかへしちよといへる女にて稚きころより侍らひしかバ女の態はさらなり文の道も心をよせて情あるものなりしにある時都の商人喜藤

左衞門といふものに忍びてあひそめ心を通ハすこと三とせ斗おもひあまれる秋の暮に　うらやまし人めなき野の蛬なくも心のまゝならぬ身はトよみて打臥かちなるをお通ハもとより情ある人なれバ色に出る心の亂れを密に問きゝて頓て喜藤をめしよせ千代を得させければ悅び京へ伴ひ五條のほとりに住けり偖いかゞゐたりけん家おとろへ世に住詫るからにかたミに恨むるふしぐ〳〵も出來て己が世々にならんとす千代このよしを岐阜へ告て歎きける文のはしに

絕はつるものとハ見つゝさゝがにの絲もたのめる心ほそさよ

といへる惟喬のミこの御うたを書添て遣りけるお通あわれにおぼえてかの男へのふミに

久しくよすがなく音づれきかまほしき折から千代かたよりあらましのことども文して聞へ侍らふにさゝがにの絲たえはつるものとハ見つゝとふることなどくれ〴〵歎きこしさむらふまゝにこのかへりことにとにかくに折ふしことのたがひめを恨むる中ぞ契りなりけるとまうし遣しゆさなきだに女ハ心あさくて何くれのことをせばき胸にたもちさむらふハをとこにすさめられがちにて侍らんつれどももとの淸水わすれがたき御心をわれしもたのミ入し所からの御住居夕がほの垣根もまばらに人めもつらく思しめしさむらハど東山ゆうくわん房へ御たよりゆハゞよろしくはからひ申さるべくゆ法師ハ取つきあら〳〵しくゆへども底意なくて山の井を結びわけてもあしからずはからひたまひゆへくゆ折から所々のさわがしさうへにも御

長柄
鶴滿寺
絲櫻

五八

五九

けしきおだやかならずつきぐ〜の人も心ならずゆゑうれしき便までにあらましおどけなくいはし
此文に男もなぐさみて別れず五とせほど經けるが男身まかり岐阜とりぐ〜になりて世のさま變りしかば此
女氣そゞろになりて浮れ歩きける彼よミけるハ此お通の文とぞ狂女もさすかに哀なり尤お通の心ばへ文
雅の其代にも似ざるがめでたく覺へて近世の例にハやゝふるぴたれどこゝに錄す云々

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ小野於通淨瑠璃物語を述作る ト題シアルモ構圖ナシ〕

鶴滿寺

南長柄ニあり天台律宗雲松山慈祥院と號す　江州坂本西教寺に屬す

本尊　阿彌陀佛

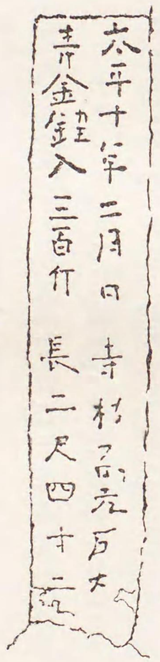
慈覺大師作長四尺許傍ニ地藏尊を安す當寺の開基ハ久遠にして詳ならず中興忍鎧上人延享年中の再建なり此時浪華の豪富上田何某許多の財を寄附し修營ありしとぞ　本堂の彫物に猿のかねを打て念佛を勤行するてい刻せり是いかなる故ぞと尋ぬるに本寺西教寺において山中にしへ念佛退轉におよびしとき山中にすめる猿あまた集り來つて鉦をうち念佛をまをせしよりふたゝび念佛盛んになれりとぞさるによつて數多のさるを以て中興開山ともいひつべしとて其古事にもとづきかゝる形勢を彫刻せしものと云

百體觀世音

秩父坂東西國等の巡禮所凡て一百體の觀世音を安す又堂下に其國々の觀音靈場の土をあつめてこゝに布て建りと云

梵鐘

門内南傍ニあり長門國主毛利侯より寄附なり往昔城下の邊土中より堀出すところなりとぞ原ハ異國の器物にて鑄銘あり



寺記ニ云　今當山の鐘樓に懸る古鐘ハ唐土北燕馮跋の太平十年にして東晉の十代安帝の義熙十年に鑄造するところの物なり往昔我日本に渡りて長州厚東郡宇部郷松江山普濟禪寺の樓鐘となりて則ち永和五年に彫刻せし銘あり其銘に曰

長門州厚東郡宇部郷松江山　普濟禪寺

聞鐘聲煩惱輕　智惠長菩提生
離地獄出火坑　願成佛度衆生
皇風永扇帝道遐昌佛日增輝法輪常轉天下太平四海靜謐專祈諸大檀那信
力彌堅善根增長二世願望一切圓成次冀山門鎮靜海衆咸安脩行有慶進道
無魔般若智以現前菩提心而不退四恩總報三有徧資法界含情同圓種智

永和五年己未仲呂日

然るに普濟禪寺退轉の後ハ世にゐる人もなかりけるが元文の頃長州萩の城主毛利侯の領地堤防經營の折から土中より堀出せ

しを延享年中に當山に納め給ひし所なり按ずるに北燕の太平ハ　本朝人王廿代允恭天皇七年戊午の年にして寛政庚申のとしにいたりて千三百八十三年になれり其歟識ハ漫滅せりといへども太平云々の文字ハなを見るべしさて又刻銘の永和五年より
ハ寛政庚申まて四百廿二年におよぶされハ諸刹の古鐘多しといへども黄鐘調を得るもの甚稀なり當山の古鐘ハ律管を吹ならしこゝろむるに其音黄鐘調にかなへりとぞ今海内にその律を得るものハ播州刀田山鶴林寺の鐘と當山の鐘とのみなるよし世人あまねく知るところなり云々

山川正宣云　津國西成郡長柄村雲松山鶴滿寺の鐘ハ形狀他に異にして古雅亦觀に足り識銘云太平十年二月日云々長二尺四寸二　此下ニ分の字有　寺記ニハ東晉安帝の世北燕の馮跋が僭元に太平の號あるを以て當時の所造とせり　しか今磨滅す　太平十年ハ義熙十四年に當れ　今按に此考杜撰なるべし抑異邦太平の年號ハ是より先三國吳の會稽王を
るを寺記にハ誤て十年とす　始として劉宋の時ハ柔然國に僭號し元嘉四年又梁の敬帝の代及び隋にも楚の林士弘あり大業十二年はた後に遼の聖宋にも此號ありて禧五年自余晉の趙厥。越の丁部領等詳ならず　に北燕を併せて凡八度なりされど其中十年餘に至りし
ハ北燕廿二年遼十一年越十二年　のミなるが今寺記にいへる鐘の寸尺ハ一に銘文と同じ然る時ハ是必らず馮跋が時の物にあらざるべし其故ハ度尺の長短ハ世々に其制違へり晉書云後漢至魏尺長於古四分有餘と見へ演繁露云唐開元時以十寸爲一尺又唐一尺比六朝一尺二寸とも有て既に南都東大寺正倉院所傳の天平尺も開元の時に當れるが今の曲尺にくらぶれバ猶二分短し仍ておもふに晉義熙ハ千四百四

龍頭及右掌破損
左手全鐘高二尺四寸二分
圍径一尺九寸五分
厚一寸八分

年の昔なれバ豈今と度尺おなじからん哉また遼の太平ハ我　後一條院の萬壽長元などの頃なれバ年歴も其半にして稍七百餘年前なり蓋尺今と同じかるべし且越國の太平ハ年歴も詳ならず　抑高麗國ハ遼に鄰りて當時彼國に屬したりし哀も遼史に詳なれバ此鐘の初ハ長門に傳わりしも恐らくハ朝鮮より購ひ獲たるならん當時高麗にて鑄たる鐘も尚太平と記すべし中世大内家をはじめ諸侯の朝鮮へ通交せし事海東諸國記ニ詳也　たゞし華鯨ハ書夜をい(と)はず雨露に曝されて古色を增せる事他の銅器と等しからず況此鐘一たび地中にも埋れたりといへバ今の銅質を以て年歴を論ずること難し故に管見を述て世の惑を解んとするのみ

因云　遼國の鑄錢今我邦に傳ふるもの天贊通寶を初て應曆。乾亨。統和。重熙。清寧。咸雍　十餘品あり是も蓋韓地より渡來せしにて其字體を見るに各此鐘銘に彷彿たり亦一の徵とすべき也

鬼貫翁墓　同鐘堂の傍ニあり元文三年戊午八月二日圓寂七十八歳ト勒す裏ニ云

おもしろさ色には見へぬすゝきかな

鴛鴦墳　本堂の向隅ニあり桑原梅龜嘗て飼得て愛する所の鴛鴦死せしをあわれみこゝに埋みてゐるしの石を建るものなり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　鶴滿寺　ト題シ　鐘樓ありさては櫻も散る合點　珪琳　ノ一句ヲ書入レアルモ構圖ナシ〕

上田秋成閑居趾

長柄村にあり今其地詳ならず

ひとゝせ紫陌を出て田野に幽棲すとて

月に遊ふ己が世はあり身なし　蟹　餘齋

右ハ此長柄の里に住し頃の吟なるべし

秋成ハ浪花の人上田氏俗稱東作といふ後に餘齋と改む或ハ無腸又鶉居と號す剪枝畸人とも戯號す儒を博く學び又醫を業とす性狷峭直の一畸人にして和學煎茶を好む毎に居を移事絶ず故に自ら鶉居と號せり長柄の里に久しく住し名利を事とせず世事に拘らず自いふ外剛にして内柔なる是我性なりと因て無腸の號あり壯年にて賀茂眞淵翁の門人加藤美樹に學びて古調の歌を善し和文をよくす又俳諧ハ宗因が流を汲といへども蕉風を慕ふ一時夜中閑居に賊の入し事あり夜あけて是を知り其忍ひ入し壁の穴の跡に短册を付たり

我よりも貧しき人ぞ哀れなるいばら枳ひまくゞり來て

諸人是を見て賊の入し哀を初めて知れり後京師に住し和歌古學を以て鳴る著述の書多し煎茶の書清風瑣言など最精し戯作ハ雨月物語五卷春雨物語五卷寫本ニテ行わる　聞耳世間猿八文舍物　癖物語　滑稽本　等あり晩年病あつく京師羽倉某の第宅内に蝸廬を建て住り常に粉をすりて土堝にいれ焚て食す菜ハ胡麻鹽とひしを味噌といへる二味に過

ず詠ところの和歌多し鹿の歌に

さよ時雨ねざめおどろく山住の軒の宿りの鹿の一こゑ

遂に其所において沒す時に文化六年享年七十八歳　戯作者考ニ出

又一書ニハ文化六年巳三月廿二日沒　行年八十三

一説ニ餘齋か四疊半の居宅の壁書ニ云

家寶　肝積丸　第一意地を强くし腹の寒さこたへべし

禁物　酒肴　煙草　油　阿諛俗ニ云アブラ　すべての物くさきを嫌ふ文人茶人財主等の臭氣ニ不可對　出店類藥無之ト云々

或云　前に説崇禪寺馬場ニおいて刄傷におよびし生田傳八郎が胤を懐胎せし曾根崎新地の妓家花屋の娘ハ生田が始末を誰あつて告ゑらすものもなくそのまゝに打すぎ月日を重ぬれども傳八郎にハかへり來らずうわさに聞バ崇禪寺において二人の侍の死骸ありといふに驚きもしやとあんじ委しく聞合せども面體恰好符合せざれバすこしハ心おちつけども其前日まで來りし大勢の門弟も誰壹人來ることなく不審ながら日をおくるうち妊娠の臨月來つて終に男子をうむ小兒ハ故なく生立しかども母ハ何角の心勞せしにや產後に空しくなりけれバ母のなげき一方ならず小兒を乳母にてそだてかの客人もかへらねバ殘りある金子調度の類を皆幼子につけ孤兒のことなれば不便さも一しほまし心の儘に育てしところ成長にまかせ青樓妓家の倅に

ハ似もつかず書畫琴棊ハ更なり詩歌連俳などを好みけるが彼妹娘の舞妓を勸めしものも後に東武のよき客つきて身をあがなわれけるゆへ客にゑたがひ東都に赴き母も孫の成長をたのしみ居けるが姉にハ死わかれ妹ハ他國へ嫁し便なくおもひしや孫が十七八歳の年終に身まかりぬ此孫實ハ生田傳八郎が忘れがたみなれども世をはゞかりて由緒ある武士の胤なりと近しき人も思ひけるが此人成長して寛政の頃和哥および俳諧をよくし著述の書もあまた著わせし上田秋成又餘齋とも無腸ともよびし近來名家の逸人なり其身ハ生田の姓をふかくつゝみ母ハ遊里の婦なれバ風雅の友にいやしめられんことを嫌ひてや後にハ京師に居をうつせり又花屋の妹娘なるハ東都におもむき彼地において男子を產む其子成人して俳優中村大吉俳名巴丈といふ女形の名人となれり文化元子年坂東彦三郎と同じく浪花にのぼり同十一年戌の秋東都にかへり後役者をやめて剃髮して終に彼地に沒せりゑかれバ秋成と巴丈とハ從弟同士にて巴丈ハ生田傳八郎が爲にハ甥なり然れども餘齋ハ氣性高けれバ是をいわず巴丈も深くつゝみて語ることなかりしとぞ此説世に專ら流布して實に傳ふ然れども愚按るに此説妄談なり尤秋成ハ曾根崎新地の青樓花屋何某といひし人なりし事ハ普く人口に膾炙して此事に於てハ違ふ事なしかるがゆへ生田が忘れがたみなりと無稽の者の言し也上田秋成沒年文化六年にして年七十八或ハ八十三といへり凡八十三歳にて沒すとして年歴をかゞなふれバ享保十二年の生れなり生田傳八郎が刄傷ハ正德五年にして享保十二年より十三箇年以前なり是にて虛説なることすみやかなりさわいへ强ちに妄談を作りて何の益かあらんいさゝか混合せしを無稽の徒のかくハ言傳ふなるべし予試みに其傳をつゞらバ彼生田が忘れ遺胤の子ハ成長して花屋某となりて相續しけるが父の惡報にや生得多病にして終に子なし延享の初の頃三十歳ばかりにして他より養子す時に年十七八歳ばかり是則上田秋成なり又東武に赴きし花屋の妹娘正德五年の頃舞

妓といへバ十三四歳なるべし成長して客に隨ひ東武にいたり男子をうむ時に享保六年の頃として廿歳の年なり右男子成長して其家を相續し廿九歳の頃一子を設く時に寛延二年の頃此一子成長して俳優中村大吉となる文化十一戌年東武にかへり後彼地において死すといふ沒年いまだ詳べずといへども六十有餘七十に近かるべしかゝれバ秋成と大吉とハ又いとこならんか尤是ハ予が附會の説なれバ實説とハ言がたし後人尚考べし

國分寺

國分寺村ニあり長柄に鄰るを以て世俗長柄の國分寺といふ正國山金剛院と號す眞言律宗

本尊　阿彌陀佛　座像長三尺五寸許　聖德太子御作

地藏堂　本堂前東傍ニあり俗ニ敷石地藏尊といふ其はじめハ玉造鍵屋坂にありしをこゝに迁すといふ

護摩堂　本堂の前西傍ニあり本尊不動明王長三尺五寸許　弘法大師作にして俗ニ赤不動と稱す左右ニ矜羯羅制多伽の兩童子を安す前に毘沙門天王脇士左愛染明王　右觀世音　本尊不動明王ハ其はじめハ高野山に安置の尊像なりとぞ靈驗あば〳〵あらたなりといふ

當寺本願ハ　聖武天皇開基僧正にして國毎に建營ありし國分寺の其一寺なり荒蕪の後快圓比丘中興して律院となる國分寺料むかしハ一萬五千束其餘施料の事延喜式および文德實錄にも見へたり又東生郡にも國分寺あり何れ一箇寺ハ國分尼寺の跡なるべし後人尚考ふべし

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　國分寺　ト題シアルモ構圖ナシ〕

兵粮倉

南長柄八幡の社内ニあり傳云往昔織田信長本願寺と爭戰の時兵粮を入をかれし土藏なりとぞ

樋之口

淀河の西岸にあり此所ハ天滿堀川の水上にして是まで堀川をあらたに開鑿ありて清水を通ず此邊一圓に櫻の列樹にて花の頃ハ老若こゝに遊覽して蹤をかたふけ破子をひらきて哥よみ詩つくり今樣をうたひて甚にぎわし殊更川の向ふハ櫻の宮の上方にて淀川をさし挾み東西一圓のさくらなれバ晩春の花ざかりにハ吉野あらし山にもおさ〳〵劣らぬ思ひせらる

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ　樋之口橋嘗神祠　ト題シアルモ構圖ナシ〕

源八渡口

樋の口のほとりにあり天滿源八町の濱より中野への舟わたしなるを以て號くるなるべし世に名高し

源八をわたりて梅のあるじかな　蕪村

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁插畫ノ豫定ニテ　樋之口源八渡口　ト題シ　堤よりまろひ落れハ菫かな　馬莧　樋の口へ流れ出て舞ふ椿かな　無鐵炮　ノ二句ヲ書入レアルモ構圖ナシ〕

木村堤

樋の口より南へつゝきたる川岸の堤をいふ此所も樋の口にひとしく櫻の並樹にて爛熳たる花の白雲淀川の水に映じて眺望言語に絶す

桃田金平戰死古趾

右同所の南安濃津の御屋敷の前にあり

慶長の末浪花の役の時安濃津侯の軍勢天滿川の邊へ押寄戰ひはげしく家臣九十三騎討死なしける其内に桃田金平といふ士ありて眞先にすゝみ勇を震ふ然るに敵より打出す鳥銃金平の眉間にあたり溜り得ずして水中に墮入終に此に沒す然るに近來此邊川浚の折から川中より十文字鎚の尖鋒を堀出せり其鎚のこゝに表の方へ姓名を彫裏の方にハ一首の歌を鐫つけたり

武士の花の數にハ入らずとも散なんときハ桃も櫻も

斯りし程に其由を御掛りへ申上鎚をさし上げれバ　公より御尋のところ其子孫今に連續あるよしなれバ右の鎚を下され有がたき御言葉を下されしにより主家よりも格別の加恩を賜りしとぞ既に二百有餘年の星霜を經て勇名あらわれ加恩に預ること實比類なき譽れといふべし此詠哥を弘化申年東都において上木なりし秀雅百人一首といへる歌集に加へ其事實を詳かに著せりこゝに略す

川崎渡口

天滿川嵜より備前島への舟わたしなり上ハ網島さくらの宮下ハ天滿ばしむかふに巍々たる金城ありて目ざましくして奇觀なり

攝津名所圖會大成　卷之十一　畢

攝津名所圖會大成　卷之十二　目錄

涙華自北至艮之部

川崎御宮　有樂齋三井　日羅墳　女夫池妙見堂　天滿寺
觀音堂　七夕池　明星池　天滿宮（本和歌三神社）　大將軍社　天照太神宮
蛭子社　老松殿　紅梅殿　白太夫祠　十二社　宇賀社　靈符神社
繪馬舍　神輿庫　文庫　神馬舍　表門　戎門　石鳥居
興正寺　佛照寺　本泉寺　名產細溫菘　名產蘿蔔
鉾流嵜　天滿川　網島　大長寺　天滿菜蔬市
櫻宮　櫻之渡　鵜墳　瑞光寺（鯨橋）
專念寺　將棊嶋　母恩寺
大隅宮舊趾　江口　同　遊女妙　同　尼古蹟　君堂

江口城墟　　蘆浦　　蘆若江　　二

絕閑池　　般若寺舊趾　　名産蒲穂　蒲生　　北中嶋鳧

川崎御宮　四月十七日御祭禮羣參

川寄の御宮御造營ありけるに詣て奉りて

御利生も宮もあらたにたつか弓やれ〳〵ありかたい平の世や　國丸

神君遺廟北郊邊　四月靈辰薦豆邊

歡心一樣人如堵　共仰建藥二百年　荒井鳴門

棨戟如林滿廟門　列侯肅穆薦蘋蘩

不似慶長當日役　裸身掇甲執藥鞬　奥野小山

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁半插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

川崎御宮

東天滿川畔ニあり攝陽羣談云　元和年中松平下總侯草創所　祭　征夷大將軍贈一位家康公奉號　東照大權現一云云御例祭四月十七日當日雜人の參詣をゆるし給ふ浪華市中ハ言もさらなり近郷近在より歩みをはこびて羣參す其にぎわひ言ばかりなし御宮の後の方築山ありて林泉の風景美觀なり傍に觀音堂藥師堂あり別當禪宗妙心寺派九昌院建國寺と號す

社頭に能舞臺あり毎歳四月　日催しありすべて御境内に櫻多くして彌生の花の頃ハ殊更美麗勝景なり

有樂齋三井

花の井菊の井梅の井の名泉みな九昌院のほとりにありといふ嘗て織田有樂齋好みて堀しむる所とぞ有樂齋諱ハ信益源五郎と號す織田信長公の舍弟なり茶道に精しくして利休の後世に宗匠と稱す亦禪法を重んず建仁寺正傳菴に其塔あり

日羅墳

天滿同心町の東にあり

達率日羅ハ肥後國葦北郡の國造阿利斯登が子なり賢にして勇あり　宣化天皇　人王廿九代　の御宇百濟國に往て彼方に止り住居す時に　欽明天皇　人王三十代　十三年任那國先に日本に屬する地にして内宮家之國と日本紀ニ見へたり　新羅の爲に滅さる　欽明天皇これを憎ませ給ひ任那を舊に復せんと謀り給ひしかども果さずして崩じ給ふ　敏達天皇　三十一代なり　續て同じ　欽明第二の皇子　叡慮あらせられ百濟國なる日羅を召て相計んこと欲し給ふにより紀國造押勝と吉備海部の直羽島とを遣わし是を喚せ給へども百濟國王日羅を惜ミ此事を肯わず兩使空く皈朝して斯と奏す　天皇是歳重ねて吉備の羽島を遣し給ふ羽島再び彼國に渡り先私に日羅に見んと欲して獨彼第宅に至る日羅迎へて上座に座せしめ對話して密に告て曰く僕竊に聞百濟國の主天朝を疑ひ奉り臣を日本に遣わしなバ後還し給ふまじと惜むがゆへに背ひ奉らずとさる程に宣勅を宣給ふ時嚴猛色を現わし急に召すべしと羽島すなわち其計策に依て日羅を召す是に依て百濟國の主ゑば〳〵怖れて勅命に隨ひ日羅を還し奉る時に恩率德爾等をはじめ枹師水手若干の人を副てこれを送らしむ頓て皈朝し吉備兒島の屯倉に到る時朝廷より大伴糠手子連を遣して慰め勞ひ給ふ爾後難波の館に入しめ大夫等を以て訪わしむ是時日羅甲を被馬に乘て門の庭下に到り乃ち廳前に進ミ跪き拜して曰火葦北國造刑部靫部阿利斯登の子臣達率日羅天皇の召を聞り恐れ畏りて來朝すと乃ち甲を解て天皇を拜し奉る斯有し程に館を阿斗桑市に營ミて日羅を住せしむ爾後阿倍目臣物部贄子連大伴糠手子連等を遣して新羅を擊の謀を問しむ日羅對て國を治むる政道を委く語る恩率參官等これを嫉ミ將に百濟に還らんとす時に潛に德爾に謂て曰吾筑紫を過る頃を計へて汝等偸に日羅を殺すべし吾皈つて國王に具に白て爵祿を賜らんことを計るべしと斯て恩率參官等德爾余奴等に別れて出帆す是に依て日羅ハ桑市村より難波の館に迁る

德爾余奴等日夜に伺ふて殺さんと欲す然れども日羅身の光あること恰も火焔のごとし故に德爾等恐れて殺害することを得ず遂に十二月晦日に至つて光を失ふを候ひ日羅を殺す此時更に蘇生て曰此ハ是我駈使德爾等が所爲なり新羅の惡計にハあらずと言畢て死す　此時にあたり新羅よりの使斯有し程に天皇詔して日羅の屍を以て小郡の西畔丘の前に收葬らしむ偖亦德爾の徒を捕へて拷問す德爾等罪に伏して白狀に及ぶにより肥後國葦北郡に使を遣わし日羅が眷屬を召て德爾等を賜り情のまゝに罪せしむ是時葦北の一族等これを受て皆思ふが儘に斬殺し姫嶋に投り捨ぬ爾して後日羅の屍を賜るにより故鄕葦北に移し葬むる又先に發船せし恩率の船ハ忽ち暴風に被て覆へり海に沒す參宮の船ハ津嶋に漂泊し辛ふじて國に皈ことを得たりト云々　日本紀　大概　或傳此時日羅諸葛亮の兵法および六十四陣を以て太子に傳ふと云　一書に恩率が船風に被て海に沒するハ則ち日羅の怨靈あらわれて舟を覆へせしなりと云さも有べし

傳云　小郡の西畔丘の前に葬るといへるハ則今の同心町の東の地なり小郡とハ西成郡をいふなりとぞ然れども此地ハ志ばしの閒假に葬り置し所にして既に肥後國に屍をうつし葬りたれバ所謂殯葬の古蹟なり

攝津志に僧日羅墓とあるハ誤りなり尙先板名所圖會にも攝津志のまゝを寫して同僧日羅墓と出せり尤兩書ともに日本紀の文を出したれども委く校閲せざるなるへし日羅ハ日本紀に見へたるごとく肥後國葦北の領主の子にて文武兼備の勇士なり甲を被て馬にのり旦國の政事をのぶるを以て僧にあらざることを考るべし

按ずるに後世に日蓮宗などの僧に日羅といへる僧の若やありしにより思ひ違へるもの歟又小郡の西畔丘の前といへるハ

此同心町なりといふ證も未だ詳ならずもしや彼僧日羅が墓所ならんか後人尙考ふべし

〔編者曰ク原本此ノ記事ノ中ニ半丁插畫ノ豫定ニテ 德爾余奴等日羅を殺さんと伺ふ ト題シアルモ構圖ナシ〕

女夫池妙見堂

女夫池町の東ニあり此地其初ハ一の池ありて朝來池と稱たりしが後世其側に又一ツの池を堀て雙となりしにより世人女夫池といひならわせりとぞ後世其邊市中となるにより女夫池町と號す然るに去天保八丁酉年堀川すじを新鑿ありて淀川の流れを通ずるにより女夫池町に橋をわたして女夫橋と號し池ハうづみて平地となり此に能勢侯の邸を建られ門內の傍に妙見尊星を勸請あり是ハ則ち攝州能勢郡野閒村妙見山の本尊同體の靈像にましませバ應驗わけて新なりとて貴賤つねに詣でゝ晴雨ともに閒斷なし殊更午の日ハ御緣日なりとて詣人羣を成し夜店の商人など多く出て甚にぎわし

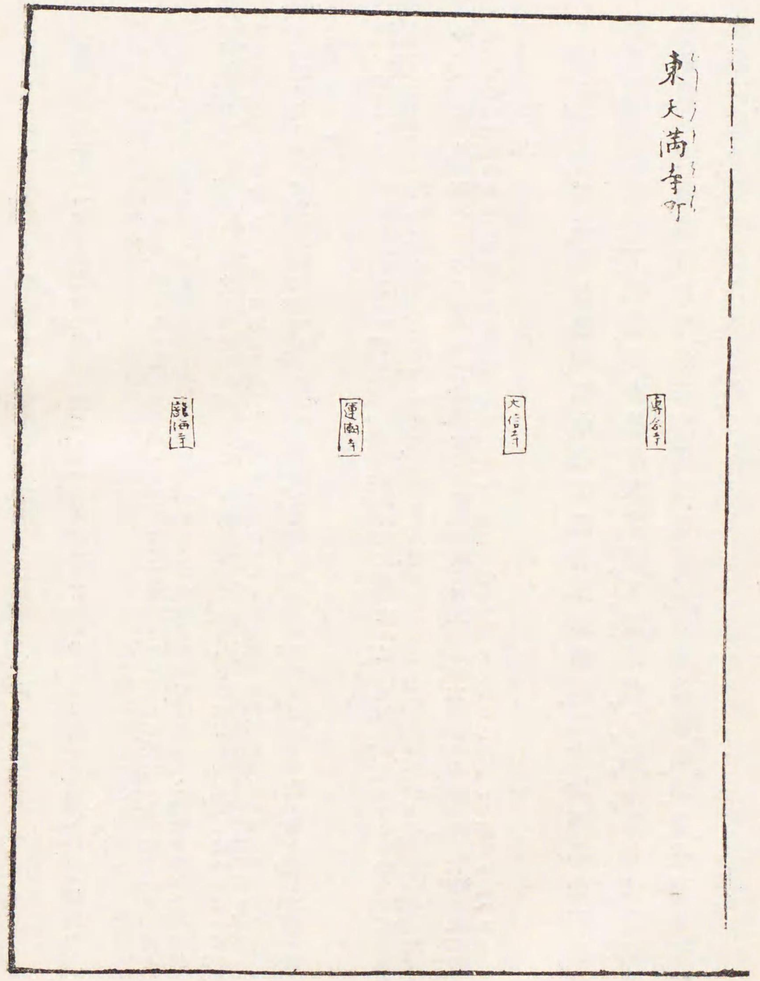
菅原山天滿寺

天滿東寺町にあり寶珠院と號す眞言宗本尊大日如來ハ弘法大師の手造なりと云寺內に天滿宮を鎭祭す相傳ふ往昔菅神はじめて此地に影向し給ふ靈趾なるにより神廟を營むとぞ神像の長七寸ばかり殊勝なり弁ニ大師堂あり大坂大師めぐり第四番の札所なりさる程に菅神に祈願の貴賤大師信仰の老若平日に羣參して頗る賑しき寺院也又當寺の梵鐘ハ其はじめ攝州姫路の城の漏鐘なりしを後に當寺の寶器とするよしくわしく銘文ニ見へたり

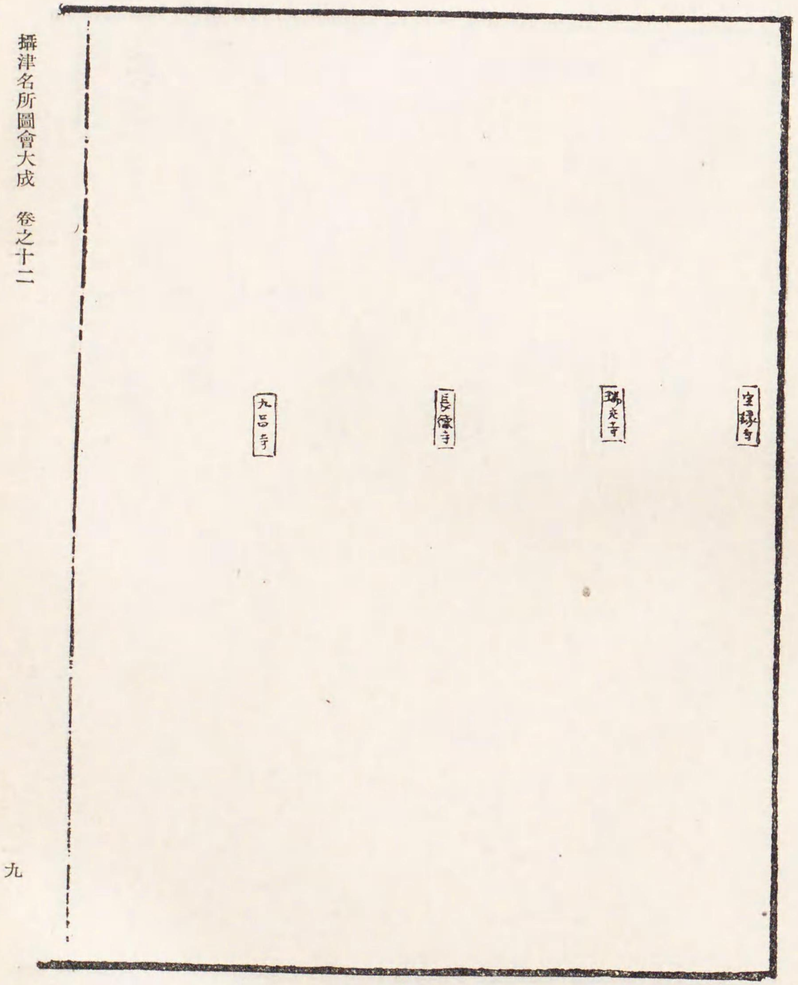
銘云

天滿寺銅鐘者本攝州姫路城中之漏鐘也城主和州太守松平某公移封之日委置銅鐘於坂城下館舍庫中檀信某等誓其無用捨貲贖之而納之天滿寺以爲伽藍之寶器素無銘紀焉主席藏海僧都託蓮臺俊師索銘予耄耋衰落辭以廢筆硏而力索不已乃爲之銘曰

東天滿宮



八



九

其二

其三

一口華鐘分　靈頌不同　金舍諸街市分　惟固頌銅
用諸精舍分　惟靈熙隆　市震地府分　聳動天宮
顯警昏睡分　幽息劍鉾　形標般若分　德歸圓通
菅廟歆亨分　神威益崇　檀家贊喜分　考寧無窮
福被海内分　歳登民豐　以至蜎蠕分　等脫樊籠
寺主海公分　悃索勒功　瑞應隱叟分　粤綴雕蟲

元祿五禊龍舍壬申秋九月令日　瑞應七十九翁泊如運敞敬銘

因云此鐘銘を誌せし泊如和尚といふハ大坂の人にして名ハ運敞字ハ元春泊如ハ其號なり姓ハ藤原父の名ハ秀俊かつて勇名あり母ハ江崎氏泊如慶長甲寅の年十月十九日に生る靈根夙植あるがごとく利智も又尋常の人に越たり二三歳の頃よりはやく我姓名の文字を識れり幼時常に一寶殿を夢見ることあり其高廣嚴麗たる殿前に白馬をつなけり後京師にいたり母に伴われて東山を遊覽し大佛殿を見るにおよびて儼としてかねて夢ミる所の如し父の沒するの時に年十三神泉我上人の父と故あるを以て母に喩して云既に三子あり何ぞ其一人を僧として佛に供養せざるやといへど母の鍾ミ愛すること限なく忍びざるの意ありけれども泊如の自ら懇に請るゝこと再三なるに依て遂に許して僧とす是より常に神泉に詣り内典を習ひ學べること怠らず次の年高野なる良慧

和尚の京師に寓するにあひて往て謁するに良慧祕藏寶鑰數帋を以て授くるに稍て覆讀して一字も忘るゝ事なし坐客ミな驚異せずといふとなしかゝれバ良慧泊如を伴ひて野山にかへれり又安樂壽院にて賴運和尚に謁す賴運一見して器量の勝れたるを許し給ひ留めて左右に侍らしむ一日母の病いとあつく遽に身まかりぬと聞て賴運心經祕鍵を誦せしむ泊如即ち往て懇に讀誦するに母のにわかに甦り泊如にいへるハ昨夜子が誦經する折から病鬼の遁れさるを見たり佛法の靈洵まことに誣べからずといへり十六歳の時出家得道しある公に謁するに及びて請て佛經を講ぜしむ公もとより儒典を嗜みかねて本邦の神書に通曉し釋氏の法に於てはじめハ信ずること無りしを泊如豫めこれを知て譚經の次で因に儒釋および十住心轉昇と即身成佛の理を辯論して以て說さとせしかバ公深く感嘆して云今日はじめて佛理の妙を知るとのたまひて盛禮をもて歸裝を送られたり晩年にいたりて弟子慈觀に語りて云我明日滅をとるべし汝等が輩他に行ことなかれと云ひて翌日諸弟子を召し遺誡するに佛制に違ふことなく興法をもつて常に懷とせよと懇に告られ還偈をゑるし祕印を結び迁化せり時に年八十歳元祿六年九月十日なり嘗て撰述の書いと多かり殊更に大師の書を發揮するもの少からす性靈集便蒙三敎指歸刪補祕藏寶鑰纂解等隨筆にハ谷響集あり　名家略傳

觀音堂

右同寺の鄰栗東寺ニあり寶珠山と號す本尊十一面觀世音ニして惠心僧都の作といふ大坂觀音順拜第九番の札所なり

當寺開祖ハ東屋清春和尚と號す本尊釋迦佛を安す禪宗曹洞派也梵鐘の銘ニ云

其質頑鈍　厥音鏗鏘　德超諸物　響通十方
紛夢昏覺　火宅晨涼　施心空寂　挂傳無疆

寶暦八年星纏戊寅冬十一月　現住楊山叟天苗謹銘

囚云　俳人津田休甫ハ諸藝に達せしが一時當栗東寺に來りし折から住持さいわひに客殿の杉戸を新調せり書て給わらんやと所望ありしかゞ休甫たゞちに筆をとつて虎を三疋畫きたり其筆意ものにかゝわらぬ氣象妙なりとて其頃世上に專ら賞美せしが或人のいわく此虎かばかり勢ひなるによく〳〵見れゞ髯なくて律義すぎたりと言り友人きゝて休甫にかくと語りけれゞ直に寺に行て杉戸の片隅に毛拔を一本かきそへをかれしとなり其物に着せざること此のごとしと言傳へり此邊火災にかゝること數回なれゞ其杉戸今尚ありや覺束なし

七夕池

同農人町大工町の間ニあり此池の地所ハ川嵜村ニ屬すといふ其由緣詳ならず或ハ星合の池ともいふ傍ニ七夕社あり世人明星の池と思ひ違ふことあり明星の池ハ次ニ記す所ニあり

明星池

同大鏡寺門前人家の後ニあり傳云往昔天滿宮鎭座のはじめ一夜に大樹の松生じ其梢に明星降臨ありて此池水にうつりかゝやきしを以て號く則ちこの明星ハ菅公の神靈なるにより其松の生たる地に聖廟をいとなむとそ往昔大將軍の社のほとりに影向の松として有しが火災のために燒亡すといふ

天滿宮

天滿九丁目すぢを表門正面通とす傳云いにしへハ南中嶋の總社と稱せしとそ

本社　中央　大自在天神　相殿　東二手力雄命　西二猿田彥大神　東三法性坊尊意　西三蛭子尊

嵜の皇居の四方にありし其一にして則ち南の方の社なりと云

宮の前西の傍ニあり　末社　老松殿　紅梅殿　相殿に祭る　本社の東ニあり　白太夫祠　老松殿ニとなる

和歌三神社　大將軍社の南ニあり

兩皇太神宮　三神の社の南ニあり

大將軍社　本社の西の傍ニあり當社の地主神と稱すいにしへ長柄豐

宇賀神祠　本社の北池のむかふニあり

參籠舍の北ニあり

連歌所

祇園祠　いにしへ大將軍の森のころハ今の九丁目の濱四角の地にありて濱の祇園といひしが後世土地ひらけて人家立ならび自ら淸淨ならざるによりて今の社内に移すもつともいにしへハ濱までも地下なりし故今も地下町より修理等をくわへ火燈のせつも町役人參詣すること舊例なり

十二社　本社の後ニ列す

荒神祠　十二社の東ニあり

神興庫　文庫　ともニ十二社のひがしニあり

神供所　參籠舍　ともニ本社の東ニあり

本社のむかふ正面ニあり左右に隨身の木像を置

戎門　表門の西ニあり蛭子迁殿のかたへハ濱邊に一の鳥居ありて此鳥居ハ第二の鳥居なり又門内ニ三の鳥居あり尙裏門および天神小橋にも鳥居ありしよし社家所傳の古圖ニ見へたり列す

繪馬舍　社前の東西にあり

神馬舍　太神宮の傍ニあり白の木馬を納む

表門　石鳥居　表門より一丁南ニあり天滿宮の額をかゝく曼珠院良如法親王の御筆也いにし

靈符神祠　神主家の鎭守なり本社の艮ニあり稻荷祠吉備公祠等左右ニ

當社ハ往昔人王六十二代　村上天皇天暦年間　勅願によつてはじめて此地に聖廟を造營し給ふ靈地なりさる

程に古しへより今に至るまで朝廷の崇敬淺からず遷宮にハ吉辰を撰わしめ　宣下し給ふ且百九代　後水尾天皇より神影および　後陽成天皇御宸翰の神號を御寄附なし給ひ近くハ　光格天皇御信仰ふかくまし〳〵て神影を御寄附し給ふ尤いにしへより鎮座の地方ゟ移さず社職ハ神主社家の餘僧侶を加へず世々菅家の執奏を經て禁官を蒙る所なり則ち地名を天滿と號するハ天滿神の鎮りまします故なりとぞ靈驗ことに新なれバ遠近の詣人陰晴をいはず歩ミを運ぶこと間斷なし別て例月廿五日丑の日等にハ羣參街に充滿して頗る賑わし所謂浪花第一繁昌の神社なり　正月廿五日を世俗初天神と稱し貴賤の羣參なすこと夥し十日惠美須初天神の兩日ハ浪花初春の大紋日なり尚二月廿四日廿五日ハ祭祀殊に嚴なり

本朝無題詩　山洞部

九月盡日陪天滿天神祠　攝州　華榮便祝瑞籬菊

渡口社頭訪土民　説言天滿是天神

蒸禮近羞幽澗蘋　葉錦敗風秋盡夕　木綿翻雪日晴辰

重巖松老無知歳　激浪花飛鎮駐春　城北靈祠猶仰德

河湯古廟更歌仁　村閭遠近低頭至　報賽黄昏歸海濱

藤原敦基

同

扮楡社下思丁寧　天氣蕭條地勝形　渡口潮添寒浪白

江干松老暮烟青　叢祠基趾多經歳　槐鼎官班昔應星

菊混紙錢花已悴　林欺錦繖葉將零　三秋徂景歸鞨路

萬代祝言唱廟庭　蓬島李門尋累趾　寄望高仰德風馨

藤原敦光

○

元亨釋書云　吏部侍郎藤敦光者世稱大儒平生製作詩文盈二十篋筥佳句多在人口天仁帝召爲侍讀天養元年四月依病剃髮謂子弟曰吏部侍郎通議大夫我亦足矣一日謂曰炤王召我爲文臣而因出家得遁也十月二十八日延沙門受戒結定印唱彌陀而薨年八十二

○

按ずるに藤原敦光朝臣ハ宇合卿の裔孫にして人王七十四代鳥羽帝の侍讀たり世に大儒と稱す製作の詩文許多あり就中天滿天神社の詩ハ同御宇永仁二年甲午秋九月晦日の作なり又五葉集二十卷尾張守橘盛忠撰　敦光序五代集後冷泉後三條白河

天滿天神社

參詣も今をさかりと梅咲て天神さまの紋日にぎはし　桂影

梅にほふ宮居にきわしたが家もあるしなきやと思わるゝまで　方雅

諸人の心つくしや畫馬盡　花莖

馬鄉祠外淑光新　賽客繽紛拂紫塵　竝河寒泉

聞說芳梅神所愛　風流尤協浪華春　重寛

神木の落葉や今も梅の雨　素外

難波津や神のまに〳〵梅所

謫居常慕九重天　日拜御衣思慘然　延爲香火萬堆烟　鈴木茶溪

一縷餘薰長不滅

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁半插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

堀河鳥羽の五代也　又ハ山階集とも云敦光序著聞集人丸夢想の像の讚敦光朝臣の作なり平生に作るところの詩文二十篋笥に盈るといへり　天神社の詩作永仁二年より嘉永七年まで五百六十一年ニ及ヘリ

太平記貞和四年十一月住吉合戰の條云

播磨國住人小松原刑部左衛門ハ主の三河守討れたる事をも知ず天神の松原まで落延たりけるが三河守の乘給ひたりける馬の平頸ニ太刀切て放されたりけるを見て偖ハ三河守殿ハ討れ給ひけり落てハ誰が爲に命を惜むべきとて只一騎天神の松原より引返し向ふ敵に矢二筋射かけて腹掻切て死にけり云々

同　康安元年九月之條ニ云

和田楠是を見てよき時分なりと思ひけれバ五百餘騎を卒して渡邊の橋を打渡り天神森に陣を取る云々

信長記元龜元年野田福嶋要害合戰之條ニ云

攝津國野田の要害をこしらへ三好笑岸同日向守中略又福島の要害ニハ安宅甚太郎を大將として中略信長卿彼を退治せんとて數萬騎を卒し八月廿日に發向せらる同廿五日に先陣ハ攝州池田伊丹邊に着ければ後陣ハ未だ近江國にさゝへて勇けるが廿八日ニハ先陣後陣の勢揃ひしかバ其夜軍評議あつて翌朝野田福嶋近邊に推つめ一宇も殘さず放火し天滿の森河口神崎上難波下難波に陣をとる云々

同九月三日大坂合戰の條ニ云　室町殿ハ細川右馬頭が居城中嶋へ御動座あり同八日に河口に向ひ城の鍬初

し玉ふて云々翌日信長卿天滿が森へ本陣を移され云々

右ニ云天神の松原天滿が森みなつゞきなるべし　一説にいにしへハ天滿の杜天神の松原とて廣き叢林なりしとぞ今尚當所の北に天滿山といへる地あり此ところも天神の松原よりつゞきたる丘なりし遺名なりといへり且當社より一丁西に南森町北森町といふあり是なん天神の森の名殘なるへし

社頭一千句連歌發句之内　あすも見ん松に大江の夕霞　宗祇

例祭　六月廿五日鉾流しの神事と稱す往古ハ天滿川ニ鉾を流し漂ひ着し所に神輿渡御ありしとぞ後世戎嶋に御旅所を營み此所に神幸あり九月廿五日流鏑馬の神事當日正面九丁目通りニおいて流鏑馬の式あり　公より御馬を寄附し給ふ

當社六月の祭禮ハ天神祭と稱して諸國に聞へ浪花市中の賑ひなり　抑天滿の本社より神輿渡御ありて難波橋より神輿二基船に移し　奉り供奉の太鼓も船にて隨從す音樂を奏して神慮を清しめ警固の役船前後に列し戎嶋の御旅所に神幸あり御迎船とて福嶋より例ありて船をよそほひ漕連きたり雜喉場戎島寺嶋および江之子嶋安治川富嶋木津川上博勞九條嶋等の産地より善盡し美盡したる樓船に木偶を錺り船諷に絲竹の調を合せ神輿の船を迎て引下る此行粧を拜せんとて數百の樓船大河を埋むが如く羣集す陸にハ棧敷を設け幕打はへ金屏風を立わたし諸侯第にハ家々の紋の挑灯をてらし河岸にハ篝火を焚き恰も白晝に異ならず船あそびハ三絃太鼓をはやし唱歌の聲うるわしく花火ハ星降り昇龍九天にかゝやき巴金鼈ハ水上に曲をなす市中ハ棚車俄狂言晝夜限りもなくありて浪華無雙の賑ひなり神輿の還幸ハ廿五日夜亥の剋の頃にして此日ハ常に汐晝の八ツ時に滿て晩の五

ツ時に干るなり然れとも毎年當神事の日ばかり夜子の剋までも汐ひる事なく川の流れ滔々とたゝへて船路を安くし神輿を還御なし　奉る是を世に貰ひ汐といひならわせり正しく神德のふからしむる所なるべし當日神輿の駕輿丁ハ地下町宮前町より勤之　又神輿渡御の砌豐前小倉の御藏院より抹茶を點じて神輿に供じ筑後久留米の御藏院よりハ還御の節大炬火を燒て川條を照す世人筑後大箒と云又神輿船の行燈　俗に朝貌のあんどうと云ことハ往昔平野町南邊屋何某より獻上の例によつて今に至て南の字を記せり是皆舊例に據所と聞ゆ

天滿祭月夜ならねど灯燈を京の御客の外聞にする　貞柳

御渡りのあとを慕ひて飛梅の花火も松の一夜千本　眞顔

絳燭燒天鉦鼓咻　菅神畫鷁放中流

奢豪誰配牛祠典　贏取長江連舸游

鼓聲如沸暮橋風　光焰燒天籌火紅

兩岸喧嘈向河拜　神輿已在彩舟中　並河寒泉

祠々神會鼓聲多　昨日稻荷今坐摩　奥野小山

別有壯觀天滿在　燈埋游舫々埋河　橋本晩翠

萬燈如晝鼓聲揚　迎送神輿人殆狂

天滿宮鉾流神事

猿田彦ゝなくてもけふの御わたりにわきてなたかき山崎のはな　春雲

灯の星か廿五日の祭り川　長笛

千早振神代もきかす天滿川數萬の提灯水くゝるとは　貞柳

神よりも人涼しめそけふの舟　枝樓

薄暮神輿駕彩舟　人聲ハ如湧熱ハ如蒸　源華城

丹心一點當時恨　散作長江數萬燈　高秀

夕日影水も諷ふや太鼓舟　可蘭

炎天の色にかたまる頭巾かな　羽鴻

紅の藻鹽も草の茂りかな

菅祠神會足遊觀　舟載金輿過翠瀾　荒井鳴門

星珠萬點天如畫　髣髴驪珠滿水端　希因

蘆の葉の舟こく舟の祭りかな　桃雅

灯と水も今宵あふ瀬や夏神樂　千丈

水の面に照る提燈の數そひて今宵まつりともやつきにけり　湖岸

船流れとまるや神の下屋敷　淡々

夏と秋の透間あらすな御祓船

六月廿二日立秋なり廿五日天滿宮御輿の御供御旅所に至る

〔編者曰ク原本此ノ所四丁插畫ノ豫定ニテ前頁以來ノ書入レアルモ構圖ナシ〕

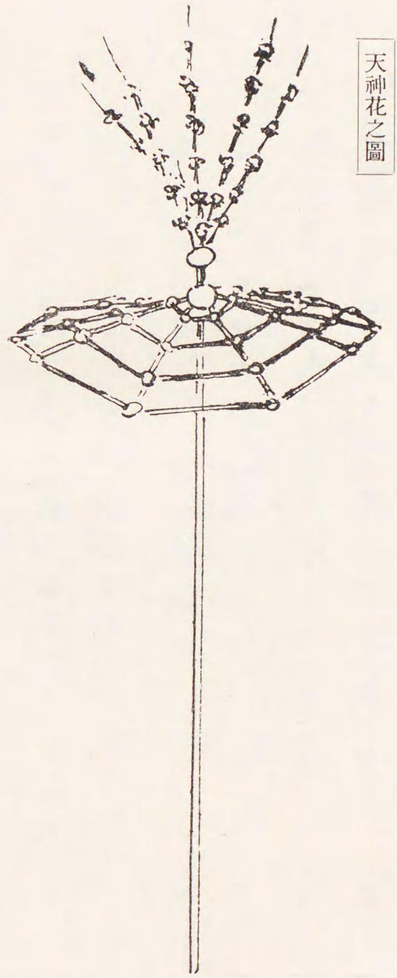
却愛三更船盡散　殘箐宛似夜漁涼　筱崎小竹

金城士女極紛華　爭賽菅廟人若麻　春田厚生

處々合街成隊者　紅衣舞蹈曳樓車

例年正月廿五日の神事に天神花とてこれを販ぐ其形八角につくりし風流傘のごとく所々に彩し餌を細き串につらぬき上に粧をもつて花のことくに作る

天神花之圖



天滿宮　流鏑馬神事

九月廿五日の神事ニハ流鏑馬の式あり時の御城代より神馬を牽せられ御代參あり尤御參府中にハ御定番より獻じ給ふ當日警固の諸役人最嚴重也

○

治郎吉が元服祝へ秋祭り　浣素

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁挿畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

天神花の起原　詳ならず彩りし餌を神に供ふ心なるや後人尚考ふべし

長さ凡一尺許より一尺五寸ニおよぶ大小精粗いろ〳〵あり俗にこれを求めて家におけバ雷難を除るといひ傳ふ

○

〔編者曰ク原本此ノ所半丁插畫ノ豫定ニテ天滿十丁目條ト題シアルモ構圖ナシ〕

名産宮前細溫菘

往昔當天滿宮の前後左右すべて田圃にして此邊りにて作るを以て宮の前となづく形ち小さくして細く至つて長し土地繁昌にゐたがひ社頭の傍邊ことゞく市中となる是によつて今ハ北の村里にて作れり然れども古名を以て今尚宮の前の名あり是を又河内國守口に求めて酒糟に漬て守口漬香之物と銘す　浪花ひらけて繁昌なること是をもつて推てゐるべし

同　天滿大根

東ハ淀川より西ハ曾根崎の邊まで培養ものよし就中長柄鶯塚より西南池田町のほとり迄に生ふるもの殊更よしといへり

里人云　天滿菜菔ハ諸國の產に勝り第一其色潔白にして美味なり又終日煮とらかすといへども切目の正中窪むことなし且干て香物となす頗る佳なり

味ハこれ天滿大根の香のもの色なり香なり何につけても　不仙

彼國の人に見せばや津の國の天滿わたりに干た大根を　力丸

興正寺

天滿七町目條にあり京師興正寺の抱所なり當代三代源海上人の開基にして產寺と號すト云例年卷納の時天滿鄉中人別に鳥目を寄附す

一書云　當寺ハ顯如上人の草創にして天正十五年庚卯八月泉州貝塚ト半の御坊ト云より移住し給ふ則いにしへ生玉の莊内の御堂の替地なるよし豐公の御朱印今尚興正寺にありとぞ故あつて御朱印の相續ハ絶たれども今に其遺風ありて天滿產生寺と號す天正十九年辛卯八月京都西六條へ移住し給ふ天正十五年より同十九年まで五年が間の本寺也

佛照寺

天滿高嶋町典藥町の間にあり東本願寺派の御堂なり俗に天滿の御堂といふ

專念寺

天滿東寺町東の端ニあり聚松山と號す開祖眞蓮社天譽滴翠和尚本尊阿彌陀佛春日佛師の作

將軍家の尊牌を安す御忌日ニハ諸侯方御佛參あり

本泉寺

天滿堀川鳴尾町ニあり俗ニ堀川の御堂といふ開基の來由鐘銘ニ詳なり　東本願寺派組頭なり

當寺梵鐘の銘ニ云

摂津國西成郡天滿境本泉寺者本願寺附庸之道場也居僧說其由云始在于加賀州親鸞聖人七世的孫存如上人之令子蓮如上人之弟乘如法師所草創也數年之後廢壞而跡既絶矣其的裔教慧法師繼絶興廢相攸於斯地慶長年中新營梵刹矣境致雖異系譜相承堂宇雖新風規復舊爾來門廡井竈俱備矣斯地之爲勝也東對金城巍巍而高南帶淀川混混之流要津處處般若橋橫箇箇弘誓船浮可謂靈區矣方今住持宣惠法師徧勸檀越新模華鐘架之高樓以爲警衆之具其志深矣既而請予爲之銘夫鐘者蘭若之號令也曉擊則破長夜警睡眠暮擊則覺昏衢疏冥昧引杵宜緩揚聲欲長昔年梵王下鑄金鐘於祇陀寺拘留孫造石鐘於脩多羅院於是諸佛出興說法且經傳載罽賓王聞鐘逃劍輪苦南唐王脫縲械若其妙用不可勝記焉仍願十方檀那累代孫子永與此鐘共至于無窮也銘云

眞宗蘭若　號曰本泉　殿堂高築　門廡相連　新鑄九乳　甬衡共全

緩引一杵　呂律不偏　朝催僧粥　暮送客船　露結霜降　地靈月鮮
可擬豐嶺　如移竺乾　警煩惱睡　起寂滅緣　聲限百八　響徹大千
讚此功德　祈億萬年

寛文二年壬寅秋九月吉辰

洛東山建仁茂源叟紹栢書

治工和田信濃掾藤原國次

天滿菜蔬市

天神橋北爪上手より東へ龍田町まで濱側どふり三町ばかりの間にあり　天神橋より下手西の街を市の側といふ是ハ市場ニハ非す乾物荒物の類を商ふ市店軒を並ぶさて毎朝諸所の商人此市場に集り土地の名產ならひニ五畿内および紀伊丹波播磨近江等の鄰國より出る山林郷池の珍物菜蔬果蔬九穀等のたぐひ需るにあらずといふことなし豪富の問屋軒を列ぬすこふる繁花の市場なり

原此市場ハ往昔京橋南詰に於て年久しく有しが慶安の頃其所官所の御用地になりて京橋片原町へ引移す然るに商人往來の煩ひありとて替地を免許ありて今の所に引移りて日々朝毎に市をなす　抑春の朝の初市より師走の終市に至るまで一日も怠慢なく交易に隙なし就中九月の栗市松蕈市極月の密柑市等ハ殊更に目ざましく所謂浪華第一菜蔬の大市場なり

世習滔滔趨侈奢　嘗新薦異競相誇

天滿菜蔬市

天神橋北市名高　薩芋紀柑船幾艘
肆有冬時珍異物　碧西瓜對紫蒲萄　源華城
村園蔬菜競時新　天馬橋頭滿載臻
春半瓜茄冬半笋　都人購去待嘉賓　荒井鳴門

天滿市之側

賣たつる市にはしりの松茸かさひくにしてかさ高な錢　安人

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

詩人欲賦苦無例　九月龍孫十月瓜　廣瀨謙
市聲清曉集沙灣　開肆青芹紫芋閒
吾輩一生難喫了　菜根隨處積成山　劉冷窓

鉾流嵜

難波橋のほとりをいふとぞ天滿祭を鉾ながしの神事となづく古昔祭日に鉾をながし其とゞまりし所を御旅所とすされば其頃此ほとりより鉾をながせし島の崎なりしなるべし

天滿川

天滿ばし天神ばしなには橋等の三大橋下をながるゝ大川なり　世俗すべて淀川と稱すれどもくわしくハ山城の淀より當攝津の長柄までを淀川といひ長柄より下ハ天滿川なり難波ばしより下を大川といひ夫より西を土佐堀と號し末にいたつて安治川といふ又北の流れを堂じま川といひ末ハ安治川に會す

上荷船

浪花の川々を荷物運送の舟にして二十石を積なり川口より本船の上荷をとるの名なり又問屋より荷物を本ぶねにつむにも此舟を用ゆ海をも川をも乘べし其制海舟作りにして淺川をゆく瀨越舟なり

茶船

是も荷物運送の舟にして其はじめ長柄川普請の時人足の飲食を給仕せしによつて茶舟と名づくるとぞ屋形あるを樓茶舟と號して川内往返の人をのするなり其餘勾配樓の大小若干ありこれを略す

將棊嶋

京橋の北西ニあり此所淀川故大和川平野川等の落合にして其流至てするど也故に島頭に石を疊み水の流れを除く其形將棊の駒頭の如しよつて號くといふ後に又この嶋頭より築地を長く足して尙流水の防とす此所より東の方を備前嶋といふ

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ備前島川嵜渡口ト題シアルモ構圖ナシ〕

網島

嬌妓冶郎情不賒　一宵餠世梵王家
春魂化去爲雙蝶　猶戀鴛鴦墓上花　源華城

城北網洲漁父鄉　酒樓宛在水中央
魚膾蟹螯知不乏　妓舟維得柳絲長　荒井鳴門

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ擬定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

網島

備前島ノ東ニあり此地ハ淀川のつゝみにして漁家つらなり鮮魚を多く市に出すさる程に軒毎に終日網を干ゆへ斯ハなづけ初しなるべし

抑此地ハ前ハ澱河の流れ潔く難波津の通船釣舟網船遊參舟引もきらず往かよひ後ハ生駒嶺が嶺二上が嶽葛城の峯々まで見へわたりて雪の朝月の夕花ハ名におふ櫻の宮夏を忘るゝ夕暮の河風に螢の飛こふなど四時ともに勝景の瞻望あり故に富家の別宅雅人の閑居湯治の養生所風流の貨食家等ありて頗る遊興の雅地といふべし

大長寺

網島にあり川向山と號す淨土宗　門前の堀を鯰江川といふ後ハ淀川の流にして方丈よりの眺望絶景なり

本尊　阿彌陀佛　座像長五尺許　惠心僧都作

脇士　觀世音菩薩　勢至菩薩

鯰江家靈牌　同左脇檀にあり牌面ニ云　大長寺殿　神位　裏ニ云

曩祖鯰江備前守源定春者其先出于宇多帝第八之皇子敦實親王天正年間住於攝州故後世名其地謂備前嶋鯰江隄定春卒後造立一刹號大長寺茲歲文化三丙寅夏四月再設神位以傳永世矣

裔孫豐後國佐伯城主從五位下美濃守藤原朝臣毛利高明奉祀

什寶

開運地藏尊　立像五尺　弘法大師作

圓光大師鏡影　鎭西聖光上人筆　尙此餘靈寶數多あり略之

鯉墳

境内にあり寛文八年此里の漁父某淀川にて大なる鯉を得たり其鯉の鱗にことゝく巴の紋あり里人これを奇なりとして官にうつたへ水邊に生をきて諸人に見せしむ日を經て此鯉死しけれバ里人等もいかさま因縁あるべき鯉ならんかしと思ひ當寺へ葬り供佛施僧いとねもごろに弔ひける然るに其夜住僧の夢に甲冑をよろひし武者來りぬ住僧これをよく〳〵見れバ腹卷に巴の紋を付たり告ていわく我こそハ慶長元和の合戰に武功をあらわし終に討死せし者なり世にある時殺生をこのみものゝ命を取し報ひによつて斯鱗に生れ苦しむ處にはからず和尚の引導をうけ當寺に葬らる其靈魂なり今此供養に預りし功德によつて佛果を得たりと告訖て夢覺たりこれによつて龍登鯉山と法號し石牌を建て鯉塚と名づくと寺記に見へたり

又同所に紙治小春の墓あり是ハ享保七年寅十月十四日十夜回向の折から彼二人のもの此處に來り參詣羣集に紛れ夜もすがら法座につらなり終に晨鐘の時にいたつて境内の傍にして書をきを懷にし空しくなる其書殘す文にいわく

今宵ありかたき御おしへにあづかり忝奉存ゆ私共淺間敷身の果みらいのほどもおぼつかなく存ゆ何とぞなきあとの御とむらい被成被下ゆハゝ忝奉存ゆこれのみ御頼申上度書殘申ゆ已上　十月十四日

治兵衛
小はる

大長寺様

追善狂哥

皆人の南無阿弥じまのたむけ草紙やほとけの縁にひかれて

十月の小春のむかしおもひ出て皆心中に回向あれかし　大長寺　進譽

心中天網島あるひハのべの書をきなど題して淨瑠璃の戯作に取組しゆへ世に名高く聞へたり紙治といへるハ天神筋町紙屋治兵衛といひ小春ハ曾根崎新地の妓婦紀伊國屋小春といひしとぞ

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ大長寺鯉墳ト題シアルモ構圖ナシ〕

櫻宮

大長寺の北中野村にあり例祭九月二十一日　當社其初ハ野田の小橋故大和川の堤の字を櫻野といふ所にありしを後世こゝに迁すゆへに舊地の名を以て櫻野宮と號せしがいつしか境内のほとりに數百株の櫻を植しより今ハ櫻の宮と稱して花ゆへなづけし如くなるも所謂名詮自性なるべし

祭神　天照皇太神

當社ハ淀川の東の岸にありて社頭ハいふも更なり水邊より馬場の隄にいたるまで一圓のさくらにして弼生の盛にハ雲と見雪とうたがふ光景西の岸ハ川嵜の堤より北につゞきて木村づゝみ堀川の樋の口長柄の邊まで此も並木の櫻なれバ川をはさみて兩岸の花爛熳として水に映じ川風花の香を送りて四方に馥郁たりさる程に都下の貴賤陸路をあゆみ船にて通ひ諷ふあり舞ふありて終日遊宴す實に浪花において花見第一の勝地といふべし境内に風流なる貨食家ありて花の頃ハ言におよばず夏の頃にいたりてハ荷葉飯を焚て名物とす雅客多く舟行してこゝに來りこれを賞味す

城外春光無不宜　白櫻花發是櫻祠　荒井公廉
吟朋酒伴知多少　十里長堤信杖之
櫻樹擁祠花婀娜　嬌絃脆竹幾舟過
風光須向東人詫　也與墨川不較多　奥野小山
滿地雪飛花正奇　吟朋相約好追隨
泛々浮家那邊子　杯尊載妓向櫻祠　春田厚生
陸續春船何所之　看花皆向白櫻祠

狂舞酣歌興何似　恐他驚動粉紅枝　後藤春草

兩岸輕風花又花　嬌烟擁樹浩無涯

一川蕩々泛香去　遍遶浪華十萬家　竹鼻纜山

江村無處不悲哉　忽見櫻花暎酒開

天公應恨遊人少　故出新奇助一杯　筱崎小竹

晩維輕舸倚垂楊　領得陂塘五月涼

一飽旗亭荷葉飯　吟詩口吻有餘香　同

櫻祠烟景本殊他　花柳風香湧醉歌

浪速城中家百萬　無人不向此經過　清水中洲

三八

櫻之渡

九月十四日さくらの宮ニ遊ふ月ハくらかり峠に出れハ後の月くらがり山ハ猶くらし　梅室

同社頭の上の方ニあり花咲ころのみ渡船を出して西の岸にわたす故に斯ハなづく兩岸の花にうかるゝ人往返していと賑わし

櫻の宮

夫木　名をもおもへ櫻の宮にいのるらん花をちらさぬ神風もかな　俊成

深々と神風誘ふさくら哉　翠鶯

櫻の渉

拇戰聲喧兩岸樓　葦簾深下醉爭籌

嬌雲夾水水如練　艷髻酌醪醪似油

碧傘紅裙芳草渡　三絃雙鼓夕陽舟

繁華休詫荏城客　不滅墨陀川上遊　源華城

色外にあらわし花の往來哉　梅室

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

母恩寺

澤上江村にあり法皇山と號す
淨土宗女僧住職す

本尊　阿彌陀佛　惠心僧都作　立像長三尺許　當寺ハ後白河院の本願にして御母待賢門院御菩提のため草創し給ふ彼帝御母公の厚恩を報じ給わん爲とて營み給ふ寺院なれバとて母恩寺と號け給ふとなり女僧の手業に綿帽子を製す清白にして世に名高し名物とす

鵺墳

右同村より五六丁東にあり傳云いにしへ源三位頼政が射とめし化鳥を輪鰐にのせて淀川に流す遂に此渚にとゞまり里人これを土中にうづみてぬえ塚とよふとぞ又蒐原郡蘆屋里にも同名あり　いづれも事實詳ならず信がたし

倭名抄載唐韻云鵺怪鳥也按俗或用鵺字此鳥晝伏夜出故然焉云々
山海經云單張之山有鳥狀如雉而文首白翼黃足名曰白鵺云云

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ圖ナシ〕

母恩寺鵺墳　ト題シ　尼寺や干たる衣に散紅葉　ゆう　ト書入レアルモ構

大隅宮舊趾

西大道村ニありいにしへ此地を大隅島といひしとぞ　應神天皇の御宇こゝに行宮ありて屢〻行幸し給ひ海上を眺望ありしこと日本紀に見へたり又　安閑天皇二年秋九月勅して牛を難波大隅島姫嶋松原等に放ちて牛の牧となし給ふことも見へたり又此地を乳牛牧庄といへり是いにしへ牛を飼て酥を貢せしなり故に乳牛といへり　今當村に大祖皇神祠とて應神天皇を祭れるハ大隅宮の由緣なるべし

瑞光寺鯨橋

瑞光寺ハ小松村にありて本尊觀世音ハ靈驗あらたにして諸願をかなへ給ふ別て子なき婦人祈願すれバかならず子をあたへ給ひ又子ありて愁ふるものハ觀音に預け奉つるとて祈れハ子をはらむことなしとそ近來信者さかんにして詣人常に閒斷なし又堂前の鯨のはしハ寶曆年中熊野浦より寄附する所にして其後時々朽損ずれバ彼土より修理を加ふといふ浪花の一奇とす

○

粉壁碧甍臨曠原　長堤隔水賽人繁
近來婦女惡風俗　願放慈悲鍼頂門

源華城

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

日本紀云　應神天皇二十二年春三月甲申朔戊子天皇幸難波居於大隅宮

丁酉登高臺而遠望時妃兄媛（侍）之望西以大歎兄媛者吉備臣祖云々　同四十一年春二月甲午朔戊申天皇崩于明宮時年一百十歳　一云崩于大隅宮云々

江口

大道村の東にあり　いにしへ此地は淀川の末にして難波江の口なり故に江口といひ又古書には川尻或は大河尻ともいへり委くは難波江口なるへしさる程に西國の入船こゝに集ひ京師に赴く時はこゝより川舟に乘かへ登りしとなり又京師より西國に赴くもこれにおなじ故に海船入津の湊なれば頗る繁花にして遊女もあまた有しとぞ中頃より泉州堺の津にかわり天正年間より又大坂海内の大湊となれり故に當所は江口の名のみ存じて一圓の田圃となり農家わづかにありて耕作の地となる又淀川の支流ありて西に流れ終に海に入是を神崎川と云　又三國川ともいふ　此里より北の方一津屋へわたす船わたしありて江口の渡しと號す　いにしへは此江口まで異國の船の入りしこと舊記に見へたり

續日本紀云　天平寶字三年十二月高麗の使高南甲難波の江口に到ると云々　これ海船のこゝに通ひし證なり

御集　川ぶりの江口に立て蘆鶴の鳴なる聲を我に聞せよ　菅家

此道に長柄といふ所きこゆるは過ぬるかと人の尋れば舟人のながらはくま川の方になん侍りと云をきゝて

散木集　涙のミおほ河尻の末なればよもながらへへゆかじとそ思ふ　俊頼

土佐日記　七日けふは川尻に船入たちて漕のぼるに河の水ひてなやゝ煩ふ云々

八日なほ河のほとりになづミて鳥養の御牧といふ邊にとゞまる云々

東鑑曰　元暦二年十一月五日甲申今日豫州攝津國至河尻翌六日於大物濱乘船

遊女記云　比門連戸。人家無絶。倡女成羣。棹扁舟着旅舶。以薦枕席。聲遏漢雲。韵飄水風。經廻之人。莫不忘家。洲蘆浪尤。鈎翁商客。舳艫相連。殆如无水。蓋天下第一之樂地也江口則小觀音爲祖。中君。小馬。白女。主殿云々　一本に小觀音無小字又音作童次下同

相傳曰雲客風人爲賞遊女自京洛向河陽之時愛江口人刺史以下自西國入江之輩愛神崎人皆以始見爲吏云々。豪家之侍女。宿上下船之者。謂之湍繕。亦稱出遊。得少分之贈。爲一日之資。爰有髻俵絅絹之名。舳取簦指皆出九分之物。習俗之法也。雖見江翰林序。今亦記其餘而已

江口遊女妙

哥塚とて新古今集贈答の和哥を石刻して江口村南隄の上に建る北の方西行の哥南の方遊女妙の哥東の方法華首題七字賜紫日顯書判西の方當山法華靈場寶林山寂光寺君堂造立志者爲知月院妙耀日近信士菩提

天王寺へまいり侍けるにかわに雨ふりければ江口に宿をかりけるにかし侍らざりければ讀侍りける

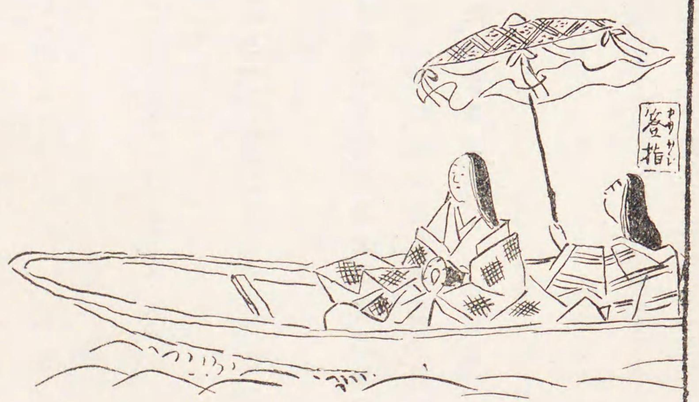
古文談云御堂殿ハ遊女小觀童
觀童御出家之後被參七大寺之時
伴路經河尻之間小觀童參入
入道殿聞之頭面給御衣題遣云云

茶花物語云江口と云所ハ
遊女多住所なり
尋面白ものとおもふ心と
ちなみ多くなるもの
なるべし
陸の上もなほ江口の
ながめつるかな
又余の名所の所の附
江口の遊女二人もろ舟と
稱するを繪にもかく

按舳世ゝ訓ハ
舟の前なり
說文云船後曰舳
字鏡舳止毛
靈異記舳フナヘ
とくくるハ此棹を取ハ
則舳取なるべし
後世花魁ハ從ハ女を引舟と号ス
是等の余風なるべし欲長柄の傘を
さしかるも古き風俗なるべ

江口中君

聞ハ昔中君善歌舞常有乳方爲媒妁
若把江口比鄭櫟字佐等官是芍藥
林羅山



新古今　世の中をいとふ迄こそかたからめ　假の宿りをおしむ君哉　西行法師

同返し　世をいとふ人とし聞バかりの宿に心とむなと思ふばかりそ　遊女妙

貞治三年卯月上旬足利義詮將軍住吉詣記云

江口の里といひてゐばし船をとゞめてかなたこなたを眺めありきけるに日もくれぬ

いにしへ西行法師この所にやどりせしこと思ひ出られて

惜みしもおしまぬ人もとゞまらぬ假のやどりと一夜ねましを　義詮公

江家次第ニ云

八十嶌祭日　到難波津宮主作檀中略次中宮御料次齋宮御料宮主着膝突西面捧御麻修禊了以祭物投海次歸京於江口遊女參入纒頭例祿如恆歸京之後典侍參内返上御衣并申御祭平安奉仕畢由云云

江口尼古蹟　江口の里をいふ　舊跡は詳ならず

西行撰集抄云　治承二年長月の頃ある聖とともなひ西の國へ趣きしにさして何國ともなきまゝに日の傾くにも急がすして江口橋本なんといふ遊女か住家見めぐれば家ハ南北の岸にさし挾みて心ハ旅人のゐばしの情を思ふ

さまさもはかなきわざにて扨もむなしく此世を去て來世はいかならん是も前世の遊女にてあるべき宿業の侍りけるやらん露の身のゐばしの程を渡らんとて佛の多きにいましめ給つる業をする哉我身一のつみハせめていかゞせん多くの人さへひきそんぜん哀いとゞうたてかるべきには侍らずや然れども彼遊女の中に多く往生をとげ浦人の物の命をたつものゝ中に有て終いみじき事多く侍りこハさればいかなる事ぞや前世のかいぎやうによるべくハ何とてか今かくうたてきふるまひをすべきや又此世のつとめによるべくハ豈かれら往生を遂んや是を以て靜に思ふに唯心によるべきにや露命をつかんとての計事に侍れバ心にもあらず是に交り彼に伴へどもこれに心をうつさずかれに心をゑめて常に後世の事を思はん人は口にあしき言葉をはき手に惡きふるまひ侍るとも心うるわしく侍らむにハさらなりけるにや侍らんとある聖と打かたりつゝ其里を過なんとするに冬を待得ぬ村時雨のはげしくて人の外面に立休らひて内を見入侍るにあるじの尼の時雨もりけるをわびて板を一枚さけてあちこち走り歩きしかは何となくかく

賤がふせ家をふきぞわつらふ

とうちすさみたるに此尼さばかり物さわがしく走りあハつるが何とてか聞けん板をなげ捨て

月ハもれ雨ハとまれとおもふにハ

とつけて侍りきさも優に覺て見すぐし難く侍りしかバ彼庵に一夜とまりて連歌なんどして侍りて曉がたに此

つれたる僧かく

心すまれぬ柴の庵かな

と侍りたるにあるじ又

都のゝおもふ方にはいそがれて

とつけ侍りし事ハ實胸をこがして覺へ侍りき六十餘州さそらへて多くの人に見馴はべりしかども是程の物のかくまで情はえたるは侍らざりきあハれ男にしあらばとかくこしらへていなひ連てうへを慰むる友ともしてんといとゞなつかしくぞ侍りし此連の聖ハ立出る道すがらさも戀しき江口の尼かなとぞ申侍りし

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ江口尼ト題シアルモ構圖ナシ〕

君堂

江口の里ニあり日蓮宗寶林山寂光寺普賢院と號す女僧住職す

江口君像

本堂ニ安す長壹尺許其外普賢菩薩の尊像を安す境内ニ西行法師の塔江口の君の墓西行櫻あり又什寶ニ西行眞蹟の和歌あり

山深くさこそ心ハ通ふともすまであわれハふらん物かは　西行

寺記云　諸佛薩埵利生方便ハ水にやどれる月のごとくにて更に凡心をもて思議すべからず當院光相比丘尼ハ

江口里君堂

渡しまつ江口となりぬ枯尾花　奇淵

澱河登船

畫船　船かすむさとや水手の硯彫　來山

扁舟競買泝皇都　山郭水邨景各殊

精細看來入佳境　清明畫出上河圖　荒井鳴門

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

俗稱妙の君此里に住て往來の船に棹の一ふしをこめ心を慰むるに似たれど眞ハ生身の普賢菩薩苦界の衆生に出離の緣を結ばしめ給へり西行法師天王寺に詣でしかへるさに一夜の旅寐を求むとて　世の中をいとふまでこそかたからめ假の宿りをおしむ君かな　と詠しに妙の君とりあへず　世をいとふ人とし聞ハかりの宿に心とむなとおもふばかりぞ　と詠じ給ひき其後此所に地をゝめつゝ普賢堂法華三昧堂など經營し寶林山寂光寺と號す又ミづからの形を俗體に刻ミ五障の女身といへども菩提心を發し衆生を慈念したるためしを見せ知らしめ貴婦賤女乃至遊君白拍子の類ひをも普く無常道に入らしむる結緣とし給へり斯て元久二年三月十四日西嶺に傾く月と共に普賢菩薩の相をあらわし白象に乘て去給へり御弟子の尼衆ハ更なり結緣の男女哀愁の聲鄰里に聞ゆ終に遺舍利を葬り寶塔を建て勤行おこたらざりき然るに元弘延元の亂を經て堂舍佛閣焦土となりつれど猶寶塔ハつゝがなく靈像ハ嚴然として安置せり去る明應のはじめ赤松丹波守重病にて醫術手をつかね既に今ハと見へし時この靈像を一七日信心供養せられけれバ菩薩の御誓ひたがわず夢中に異人來りて赤松氏の頂を撫給へバ忽ちに平愈を得たり猶かくのごとくの應驗あげてゝるしがたく爰に思ふに妙の君の妙ハ轉妙法輪一切妙行等の妙なるべし云々

按ニ江口の謠曲の文義これによく相似たり彼文に西行法師江口の君と和哥贈答の後江口の君ハ普賢菩薩とあらわれ舟ハ白象となりて西の空に入るの趣向なり是ハ西行撰集抄十訓抄東齋隨筆等ニ云　書寫山の證空上人播州室の津の遊女を見て閉目觀念し給へバたちまち遊女ハ普賢菩薩と見へ又目をひらけバ本の遊女なりといふ是を江口の遊女になぞらへて謠曲の文句につくりしなりされハ遊女の事ハかくのごとく有といへども當寺の緣起とすべき舊記ハいまだ見來らず故こそ有べし尙後人の考へを俟のみ

白象となるや江口の船の雪　宗貞
君堂やぬるハいとはぬ花の雨　吳逸
惜むかや刈田に鴈のやとりさへ　素外
やどれとハ御身いかなる一時雨　梅翁
草葉にも心とめずや飛ほたる　魯白
川船をとめて江口の踊かな　肅山
君こゝに魚荷過ゆく霞かな　琴風
はつ秋や江口の後の門徒宗　百里

江口城墟

江口村の里長田中氏の家其古蹟なりと云攝津志云初江口村にあり後下新莊村に徙す一名中島の城といふはじめ三好長慶從弟宗三郎長慶を細川晴元に讒し天文十八年　宗三こゝに據る晴元香西木澤の二氏を率て三宅の城に入る則ち宗三を援ふ長慶の族一存を以て三宅の城を落し晴元を擒とし直ちに本城を攻る宗三敗して遂に首を授く長慶城を保つ又後に中川氏こゝに據る

江口渡口

淀川の支流神崎川のわたし也江口村の里長田中氏に元龜年中の古牒あり其文曰

渡舟之儀晝夜令馳走之條當村之事亂妨狼籍（藉）一切非分除之若猥儀在之者可成敗之狀如件

元龜元年九月　　信長判　江口村船頭中

蘆浦

八雲御抄夫木集俱に攝津國ニ入今其舊趾詳ならす或云江口の邊ならん歟

續古　人ごとのたのミがたさハ難波なるあしの浦ハのうらみつるかな　延喜御製

蘆若江

蘆の浦の一名なるべし

家集　難波がた漕ゆく船はあし若の江ざる程こそ久しかりけれ　元眞

北中嶋鳧

大坂の近邊にとる所の鳧ハ頗る美味なり就中北中嶋をもつて上品とす

鳧を捕る法他國にてハ鴨羅（と）いへども津國にてハ「シキデン」とて横幅五六間に竪一間ばかりの細き絲の羅を左右竹に付て立る又三間程づゝ隔てゝ三重四重に張なりこれを霞とも云○又一法に池の邊にてハ竹に蘂をぬり横に多くさし置バ鳧渚の芹など求食とて竹の下を潛るに觸て蘂にかゝる是をハゴといふ○又一法に水中に有鳥を捕にハ流し蘂とて藁莚に蘂を塗川上より流しかけ翅にまとハせて捕ふ○亦一法に高繩といふあり是ハ池沼水田の鳥を捕るが爲なり先蘂を寒に凍らざるが爲油を加へて是を一度煑て苧に塗轤に卷とり扨兩岸に篠竹の細きを長さ一間ばかりなるを間一間半に一本づゝ立ならべ右の絲をまとひ張る一方に向ひたる一本づゝの竹ハ尖の切かけの筈に油を塗り絲の端をかけ置き鳥のかゝるに付て筈はづれて纏はるゝを捕ふ　是を棚がおちると云　東西の風にハ南北にひき南北の風にハ東西に引必らず風に向ふて飛來るを待なり又鴨羣飛して絲の皆落るを惣まくりといふ獵師ハ水足蹈とて韋にて作りたる沓をはき又下になんばといふ物を副はきて沼ふけ田の泥上を行に便利とす又鳥の朝下しと宵に下しとハ水の濁りを以て知り又足跡について其夜來る來らざるを考へ旦來るべき時剋などを察するに一も的らずといふことなしとぞ

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ北中嶋霞羅ト題シアルモ構圖ナシ〕

絶閒池

千林寺村にあり今尚一の絶閒と稱す古來より河州茨田郡に屬す　今池水乾涸す

良玉　戀わびておつる涙も積る哉あわぬ絶閒の池となるらん　常陸

般若寺舊趾

般若寺村なるべし　當寺ハ人王九十五代後醍醐天皇の勅願によつて大燈國師の草創にして大般若經六百卷を書寫し土中に納め石の塔婆をたてらるゝにより般若寺と號す然るに後世兵亂のために堂塔頽廢して村の名にのみ存れり一説に今天王寺河堀口にある般若寺ハ當所の廢跡を再興し移しいとなむ所とぞ委しくハ河堀口の條下ニ出す

名産蒲穂

蒲生村ニあり此里より出すもの色美にして尺長く他所の生ニ超て佳なり故に名産とす蒲生の名も是よりして出るなるべし　數寄屋の天井椽側の筵等に用ゆ

摂津名所圖會大成　卷之十三　目録

浪華船場嶋之内之部

難波橋　金相場濱　蟹嶋　過書街
高麗橋　堺樓屋敷　吳服正店　虎屋菓子店
浪花井　薬種交易場　佛光寺懸所　堺樓遺蹟
貞婦鶴女古趾　唐高麗物鋪　吳服所遺趾　淀屋橋初相庭
御靈神社　本社　宗源殿　猿田彦祠　神輿庫　神樂殿　三神祠　繪馬舍　朝吉祠　瑜伽祠　菟布良社
寶城寺　藥師堂　御影堂　妙見堂　金毘羅堂　行者堂
横堀材木屋　分福茶釜
御堂前木偶鋪　雛市　菖蒲飾物市
浮世小路　薬種行店　思案橋名義　名物革烟草嚢　觀音堂
津村御堂　本堂　二尊堂
本街故衣行店

摂津名所圖會大成　卷之十三上

八百屋街飛禽店　神輿屋　彫物職　安土街八幡　鯛屋貞柳蹟　二　花市

難波御堂　本堂　對面所　經藏　鐘堂　鼓樓　芭蕉翁終焉地　座摩神社　本社　菅神社

茶所　諸講役所　窟門

田蓑神社　大江神社　末社　故衣肆　仁德天皇宮　本社　八幡宮　太神宮　博勞祠　末社　繪馬舍

神樂殿　繪馬舍　神輿舍

神輿庫　末社　春日神祠　金毘羅祠　觀音堂　筒井順慶第趾　順慶町夜店　油懸地藏

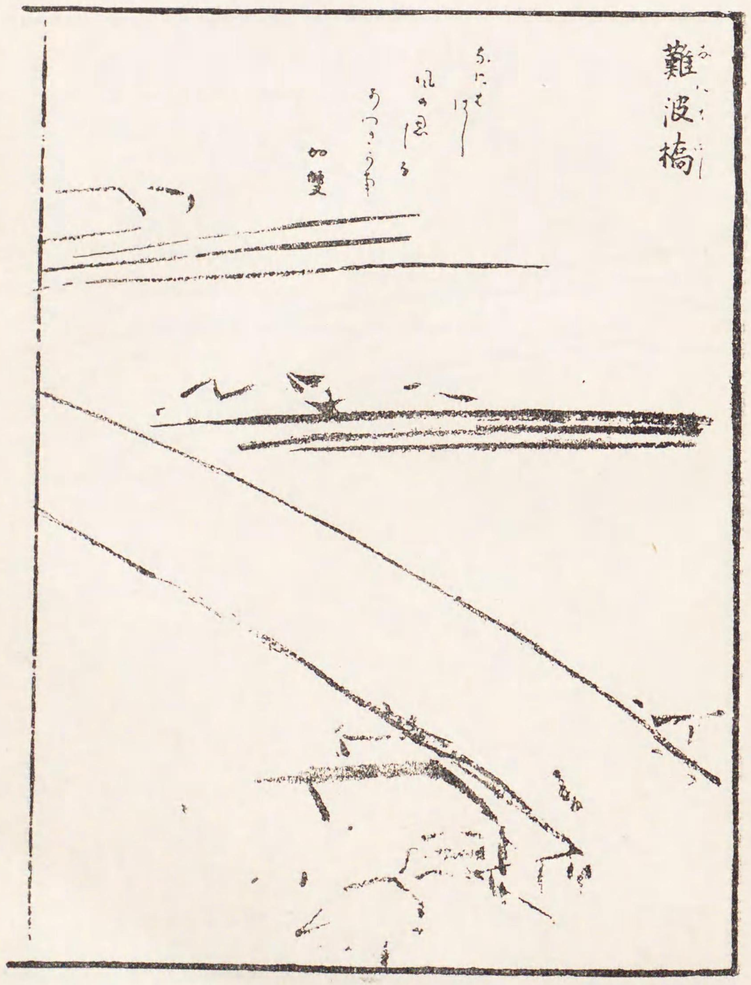
難波藥師趾　石濱　三津八幡　本社　繪馬舍　新築地金毘羅

影向松　觀音堂

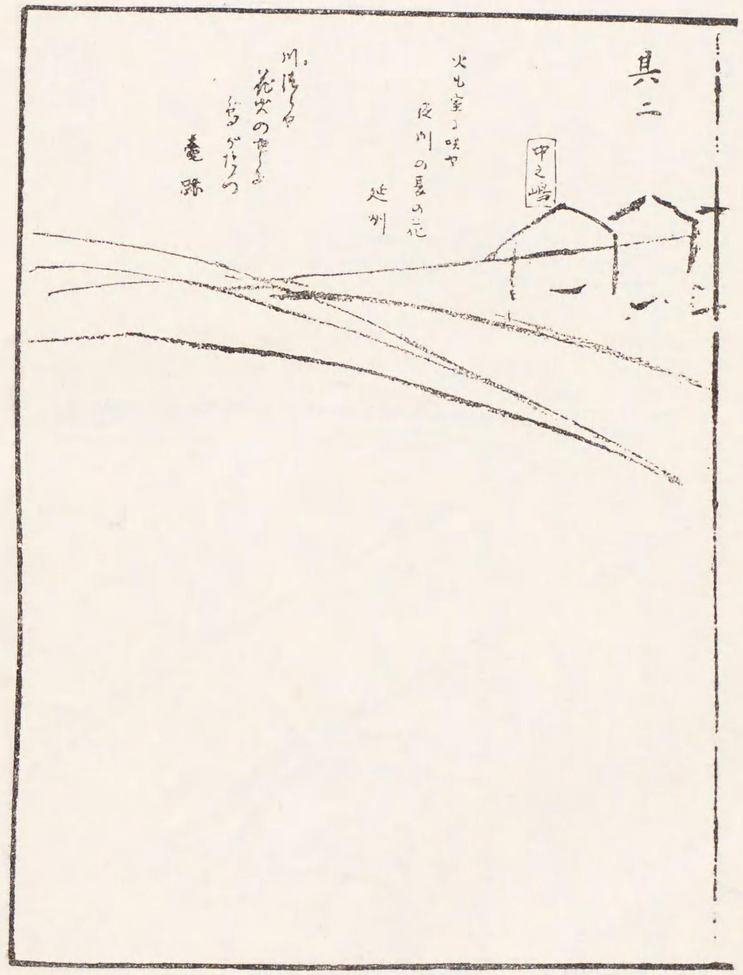
伏見舊趾　蠣船　昆布鋪　三津寺　本堂　地藏堂　楠大樹

心齋橋夜市店　書肆　忠孝庶民

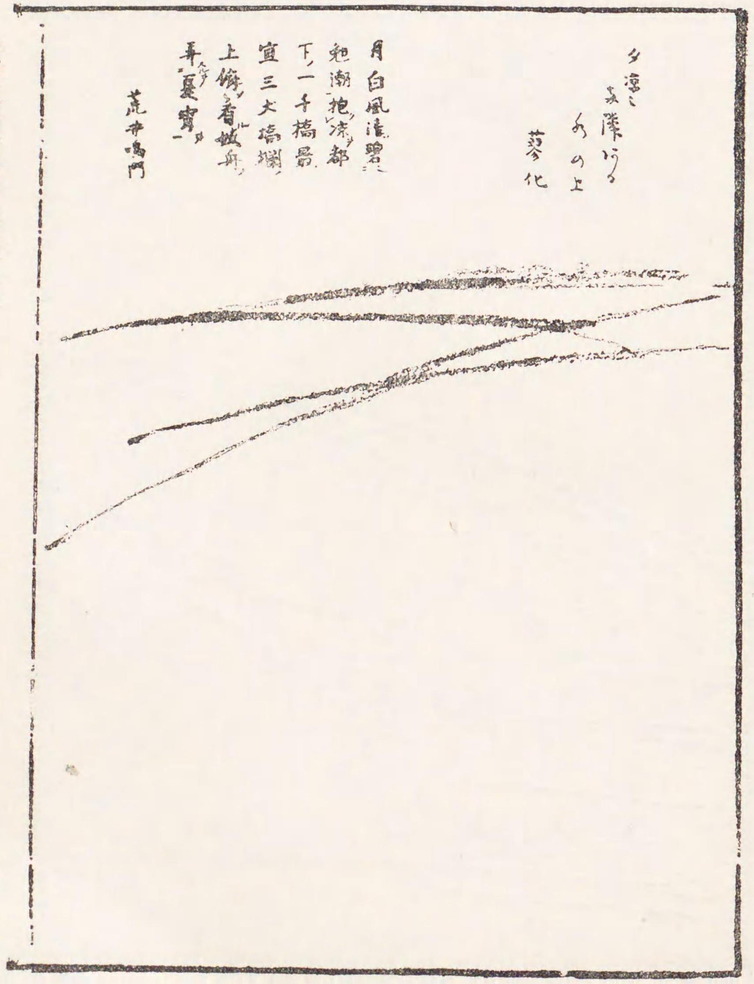
難波橋



三

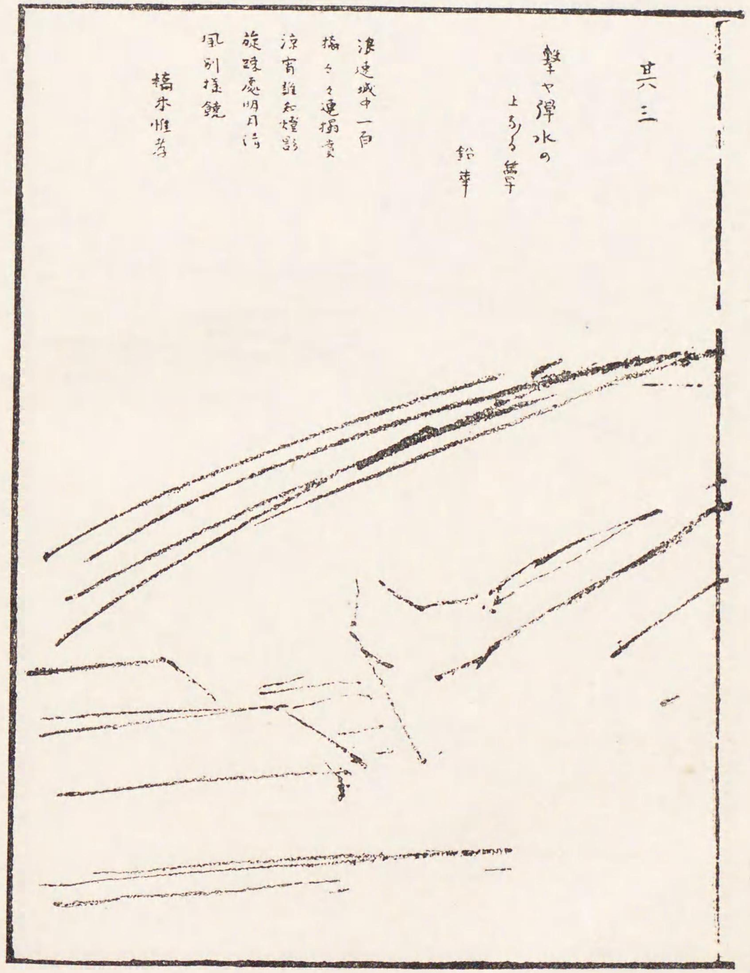

其二
中之坐
火も室の咲や
夜川の裏の花
延州
川傳ふ
花火の音
なつかしの
蕉路

四


夕涼み
舟に降りる
あの上
芭蕉化
月白風清碧
海潮抱浦都
下一千橋晨
宜三大塙嶼
上俯看蚊舟
年夏宵
蘆井鳴門

五

廿六　三



凄迷城中一面
橋々々連揚屋
涼宵雖未煙影
旋暗處明月清
風列燈鏡
橋本惟考

難波橋

大川條第三の大橋なり長サ百十四間六尺欄檻擬寶珠あり天滿橋天神橋難波橋を以て浪花三大橋といふ北詰を西天滿といひ南詰を船場北濱町といふ此北詰の西の方ハ諸侯の御藏やしき甍を列ねて巍々たり夏の夕ハ濱側に納涼の茶店床をならべ一夜酒豆茶なんどを販ぎて川風に苦熱を忘るゝ客をもてなす或ハ按摩按腹の療治軍書講釋昔ばなしなどありて頗るにぎわし六月廿四日廿五日の兩日ハ天滿宮の祭禮にて此川すゞを船にて神輿渡御あれバ川に拜禮の舟々透間なく陸もひとしく遙拜の羣集雲霞の如く獻燈のてうちん出し店の行燈あたかも白晝に異ならず花火の流星ハ八方をてらし水賣の錫器めくりにかゝやく其美觀いふべくもあらずもとより夏月ハ當日にかぎらず川にハすゞみの遊參ぶね陸にハ床の夕涼にてすこぶる賑わし此はしの中央より西の方に中の島の岬ありて是を山崎の鼻といふ此嶋より北の流れを堂嶋川といひ南の流れを大川と號すこの橋の上より東西の眺望佳景なり且左右を見めぐらせバ十有餘橋を眼前にありて浪華無雙の奇觀なり

夕すゞみ月も難波ハ橋の數　希因

其日之記ニ云上略葉月の晦日まだ夜ふかきに秋霧とゝもに我家を立いで拂曉難波橋にさしかゝる

長き夜もわたれバ明ぬ難波ばし　獅々堂

橋ハ百丈にして水ゆるく流れ日ハ金城の上に出て影孤舟を沈む諺に此所浪花第一の美景といへるもよろしきに似たり云々

涼しさやながゝれと思ふ難波橋　我黑

咲やこの梅を難波のはしの反　涼菟

夕暮の秋ハありけり難波ばし　漫々

難波橋の邊に舟を泛て遊びけるに江南江北の遊客の舟花やかに所せきまで漕出たり

我を招く玉むし出よ涼ふね　几董

三大橋一望　淀矢矧いかでか三つの橋の雪　淡々

泉襠河嶺雪光寒　來映金城辨得難　後藤機

誰人能喚猿郎起　把這銀山粉壁看

浪華橋下浪生風　坐榻倚欄涼不空　早野思齋

舟舶向京如矢疾　月懸弓影古城東

江風一掃暑氛清　喜見波心大月生　筱崎小竹

稍向橋欄懸玉鏡　山河影裡幾人行

殘月無光霜若紛　吟哦斜渡浪華橋　春田厚生

早行已有先儂者　无邊人跡拜菅廟

柳影參差落綠波　盈盈兩岸月明多　中井桐園

樓船載妓相追至　總向浪華橋下過

金相庭濱

いにしへ此邊りを北濱と號して曠々たる濱邊にて米穀材木唐物のたぐひを交易の大市場たり　尤其頃ハ濱邊に假葺の小屋を建ならべて市を立しとぞ庭訓往來に京の町人濱の商人と書たるハ此市人の事なりといへり今尚此金相場あることハ往昔の餘風ならんか

○心あらハ人も來てとへ山吹の花の八重さく春のまかきを　行家朝臣

千首　行めくる籬のこてふまかふなりさける山吹ちりみたるころ　肖柏

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

城堞烏栖霞始消　滿江燈影早涼搖
樓臺如畫舟如織　十萬人家三大橋　筱崎小竹

金相場濱

難波橋南爪の東ニあり浪華市中の兩替屋こゝに集り日毎に金の賣買をなし相庭を立て金の價を定む是ハ堂嶋において米の相庭を立るにおなじ是又浪花の一奇といふべし

この所の一すぢ南の東ぼりに架りし橋を今橋といふ一説に浪花の古圖にハ今橋ハ見へず元和寛永の頃までハ當時の今橋通の南側ばかり町家にして北ハ廣き濱岸なりすべて北濱とよべり此地ハ米穀および金錢唐物藥種材木等の交易の大市場にて皆假葺の小屋をかけ竝べて居り其のち漸々繁昌して家建立派につくりて榱の木を賣ところを梶木町といひ過書船の船持の住る所を過書町といひしとぞ尚追々人家建つらなりて今橋通の北側も町家となり又其北の通も町家となれり故に北濱何丁目と號す斯繁昌にゑたがひ東に橋なくてハ不便なりとて京橋町よりの往來すぢに橋をかけて新たなる橋なるが故に今ばしと呼べりといふ

蟹嶋

金相庭の東ニあり俗に築地といふ一説に昔此邊みな濱にて有しときより此蟹嶋といへる地ハ有しとぞ按ずるにいにしへよりかにしまといへる地の有しに後世それニ石を疊みて地をつき人家を建つらぬるやうにせしゆへ築地といいふなるべしこゝに架る橋をよしや橋といひて通船の辨理の爲とて防州錦帶橋のごとく橋杭を用ひず造りて奇觀たりしが近年破損に及び正中に杭を建たるハ惜むべき事にこそ先年橋杭を用ひずして成就せし時ある人の句に云

船のミか燕よろこぶ葭屋ばし

〔編者曰ク原本此ノ所半丁插畫ノ豫定ニテ 蟹嶋葭屋橋 ト題シアルモ構圖ナシ〕

過書街

北濱の一丁南にあり一説に凡て此邊いにしへハ濱邊にして舟方の家或ハ舟具を商ふ家多かりしとぞ故に梶木町ハ楫の木を賣家あり又舟町といへるも舟方又ハ漁師など住居せし所なり當過書町ハ過書傳道の舟方多く住しゆえにかくハ號くるといふ過書船傳道船といふハ攝津より山城へ淀川すぢを上りて荷物を運送の船なり或曰艣に似て大なり三百斛餘を載べし宇彙狹而長可載三百斛者名艇者即ち過書船のたぐひかといへり昔ハ多く此舟を用ひしところ近來川すじ淺くなりて用ひがたし故にすぐれて大なるもの今ハなし適大なるもの長さ十五六間幅二間半餘あるひハ三間に至るあり過書傳道もと一ッにして大なるを過書といひ小なるを傳道といふ其元ハ傳道船なり傳道の名ハ往古より呼きたることにして能利にかなへり易曰舟楫之利濟不通致遠以利天下と不通を濟すハ傳道なり又傳通とも書べし凡二百石より百三十石又四十石積をも傳道といふとぞ

東牖子云　過書船ハ照代の御國初に有功の下民を御取立ありし御仁德を布るゝ事有しに時過期に後れて訴へ出し故過書と言りといふ人有しが按ずるに唐書の令に諸渡開津及乘船筏上下經津者皆當有過所云々又順和名抄にも出たり又天道船と稱するも淀渡か澱渡なるべし昔ハ淀より神崎難波へ乘船せし故淀船とも言りしを伏見の城繁昌の時より伏見輻湊の地となり淀をこして登るゆへ唐書にいえる過所に配當して過書たるべき歟云々

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ 過書船　傳道船 ト題シアルモ構圖ナシ〕

浮世小路

今橋通の南にあり一説に浮世小路と稱せることハ寛文貞享のころハ東堀より西横堀までの間此小路の兩側ニハ揚弓屋風呂屋あれバその鄰ハ餅屋質屋次ハ三絃法師諧曲指南の者もあり或ハ色宿古手屋魚屋賣卜寺子屋米屋油鉢軒をあらそひ家々建つどひて實に浮世のありさまを眼前に見わたすの故をもつて浮世小路と唱へたるよし夫より世かわり星うつりて豪富の町人等今ばし高麗橋に移住して家々の裏手に土藏を建つらねしより今ハたゞ浮世小路の名のみ存りて昔の光景ハ天淵に變ぜりと云

新永代藏ニ云抑〻この浮世小路といふ所ハ南ハ高らいばし北ハ今橋すじの正中に細き小路ありて爰を手代の隱し宿又ハ問屋葉栖女の身まゝになりて相應より奇麗に住居する云々岡屋がとなり座しきをかけける灘の小はつといふ葉栖のはて今ハ許の色宿となりて多くの人の出いる中に云々

高麗橋

東堀に架せり此川すじ十三橋の内川上より第三橋也高欄擬寶珠ありの東詰を内兩替町ト云西詰を高麗橋一丁目ト云則西を船場と號す

傳云　往古の高麗館の古趾此橋の東に有を以て名くとぞ

日本紀曰　推古天皇十六年夏四月小野臣妹子至自大唐云々

大唐使人裴世清下客十二人從妹子臣至筑紫遣難波吉師雄成召大唐客裴世清等爲唐客更造新館於難波高麗館之上云々

按に高麗館の古跡ハ今定かならずといへども難波大郡に饗し給ふと同紀に見へたれバ此館ハ今の上町の地に

高麗橋堠樓邸

相傳ふ高麗橋の敵討といふハ享保三年七月十七日或武家の藩中女敵なりとて同家中の密夫某幷ニ淫婦を討取ると云くわしく攝陽落穂集に見へたれバこゝに略す

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

三井吳服店

東堀より西横堀を限り北ハ大川南ハ長堀を以て界とし其間を船場と號す船場ハ洗馬なるよし信州にてハセバト云是も洗馬なり浪花の洗馬ハ天正慶長の頃の外郭洗馬の地なり然しより斯ハ云りとかや今船場の重箱讀ハ當らずと東屬子のいへり今ハ夫にハ引かへて富家巨商軒を列ね繁昌いふに絶たり是ひとへに太平の御恩澤仰ぐべし尊ぶべし

○

岩城吳服店

綾錦襟袖口の吳服みせ不自由なものハ女きれのみ　英　風

〔編者曰ク原本此ノ所貳丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

虎屋菓子店

虎屋伊織製の菓子を賞味して
いをりとゝ廬山の雨の夜に似れと錦帳のもとまでもてはやす菓子　木端

高麗橋畔饅頭家　競買人如蜂赴衙
招牌題掲於菟號　傳得芳名海外誇　大熊寅

同　饅頭製法場

高麗橋西虎氏饅頭々出甑露初乾
可知茶事多珍賞　錦籜包開玉滿盤　荒井鳴門
虎屋饅頭纔五文　店前終日百花羣
信牌通用實銀札　千里美名似走雲　秋里籬島

〔編者曰ク原本此ノ所弐丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

有しこと證なり

埃樓屋敷

高麗橋西詰兩角にあり恰も城郭の矢倉のごとし故に俗にやぐら屋敷といふ
浪花市中の一奇觀なり或云　元和以前の見附の番所の如きものならんかといふ
一說ニ天正慶長の頃當橋の東爪ハ大手の御門にして西爪に二箇所の官廳あり此所ハ下民の訴を聞理非決斷の公衙なり則其所に有し埃樓の遺趾なり、

道修町藥種行店

高麗橋通より三條目ニあり凡五六丁の間すべて藥種の問屋軒をつらね和漢の藥種の眞僞を糺し買たくわへ上品と下品を撰わけ或ハ洗ひ或ハ乾し塵を除くあり刻むあり爾して諸國の藥店の注文にまかせ吾妻のはてより筑紫がたまで運送するを活業とす

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ道修町藥種行店ト題シ列肆比簷皆藥商　麝檀狼藉曬街傍　衣裳自怪經過後　惹得茴君坐處香　廣瀨謙ノ一首ヲ書入レアルモ構圖ナシ〕

浪花井

道修町壹丁目の南條平野町ニあり唐阿蘭陀船來の藥品を交易す
平生に井筒に蓋を覆ひ覆りに汲ことを許さず其由緣未詳
さる程に許多の藥商こゝに集りて賣買こと夥し

藥種交易

道修町の南條平野町ニあり唐阿蘭陀船來の藥品を交易す
さる程に許多の藥商こゝに集りて賣買こと夥し

佛光寺懸所

平野町にあり京師佛光寺の抱所なり平野町の御堂といふ

埃樓遺趾

同堺筋の西北角にあり是も高麗橋に矢倉の有し同時の結構なるべし一說に此所も南北の兩角にありしが享保の大火後南の方ハ廢して北の方のみ今に存せりといふ　是も浪花市中の一奇觀なり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ 平野町埃樓 ト題シアルモ構圖ナシ〕

思案橋

東堀十三橋の内川上より第五橋目也東詰を内平野町といふ西詰ハ淡路町瓦町の間に架せり又東詰より東への通ハ金城の大手御門すじなる故俗に大手すじト云

一說に天正の時代此橋を架させられしが五奉行の諸侯いまだ橋の名を決せず豐公聞給ひて增田右衞門尉を召れ汝案じて決せよと仰ありけるゆへ暫時案したりしが未だ決せず公わらひ給ひて天下の政道を預るものかゝる愚鈍にて何の用にか立べき思案の決せざるハ直に思案橋と號すべしと宣ふ諸臣大に赤面して終に此名を用ゆといふ又或ハ東より西に渡れバ淡路町瓦町の間なるゆへ南にや行ん北へや往んと沈吟するを以て思案橋と名づくるとも言り

貞婦鶴女古趾

未詳

續近世畸人傳云　鶴女ハ浪華船場鐵屋吉左衞門が妻也十四にして嫁し良人によく仕へ舅に孝あり十六歳の春一男子を產しが其年不幸にして良人吉左衞門病死す其忌も滿ぬれバ親族つどひて今男子ありといへども未當歳なり壻を撰ミて鶴女に配せんとて如此かたらひけれバ鶴女涙をながし吾若しといへども兩婦にまミえざる敎を聞り將良人の忘れがたミに男子さへあれバ我心の及ふ程ハ主人にかわりて舅に仕へ此子をも養育せばやと語るに人々感じあへり斯て舅に仕ふること良人存生の日より厚く召仕ふ者にも情深けれハ皆其德に伏しけり扨年もかわり一周のいとなミも過しかば先の人々去ものハ日々に疎しといふ　諺　をや思ひけん又集ひて今ハ斯家事も整ひぬるものから未だ齡の若けれバ行末覺束なし唯まけて吾々がいふに隨ひ給へと言ひけれバ鶴女尙さきのごとく誓ひて固辭けれバ爲方なく止ミぬ斯しつゝ天明の年閒鶴女不起の病にかゝり死に臨むところ人々枕邊によりて思ふことあらバ殘なく言ひ置ねといふに更に言をくべき事なし唯老人に先立こと今生の恨ミなれど是も命なれバ詮方なし此上思ふ事にハ死して後棺に收むる迄ハ僧たりとも男子の手に觸しめ給ふな入棺の後ハ世の作法もあれバ例に任せられよと言終りて死す享年二十七歳とぞ

蒿蹊云　凡世閒のごとく時に臨ミて人の耳目を驚ろかすは勇ミありてかたきも亦よくすべし常を守るハ安きに似てゞかも中心の誠に出るにあらずバ始終全くすべからず　幾たびか思ひ定めて變るらん賴ミかたきハ心なりけり　ト古人も歎かれき鶴女の節操ハ婦女子の鑑にして其死體といへども丈夫の手に觸しむることな

かれと遺言せるに於てハ一生の護を一語に盡して人をして墮涙に堪ざらしむ云々

伏見町唐高麗物店

伏見町通凡四丁許の間唐物の市店軒をつらね異國の産物をなにくれとなく店にかざりて商ふ

抑當街の市店ハ一品も吾朝の産物を交へず唐阿蘭陀將來の異國の産物を鬻ぐを活業とすされバ磁器塗物銅器錫器佛狼瓷硝子の器物を山の如くに飾り其餘墨筆紙圓扇便面眼鏡磁石時計或ハ線香沈香丁香奇楠龍腦白檀麝香又ハ藤筵紫檀烏木蘇枋梹榔(檳)鐵刀木花櫚椰子咬嚼吧木此方にハ瑪瑙琥珀珊瑚珠璃瑁犀角一角鮓答水晶瑠璃彼方にハ波斯印第亞革虎皮豹皮絹布にハ羅紗猩々緋八絲緞閃緞毛天鵝絨紗綾綾子絹紬黃絹榜葛剌紬綿紗襪褐聖多默織莫臥爾錦花布金巾櫛柳條葛布芭蕉布樊枝花絲類種々に蛇皮線月琴半面鼓喇叭嚔吶銅鑼銅鼓言とも盡ぬ外國の品々さる程に飛頭蠻の幃涎小人嶋の紅粉鍾長臂島の銃襠衫長脚島の裩襠なんど需むるに難からざる覺ゆるハ實一奇の商賈といふべし又同町内に茶道具の商家多く時々の古器の入札市あり て數千兩の交易をなすこと是亦浪花の一奇なり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ「伏見町唐高麗物店」ト題シ「わか國の御調そなへて年毎に今もくたらの舟ぞたえせぬ　女房」トノ書入レアルモ構圖ナシ〕

吳服町戎講

小判うる春の市にもひけハとらしとんなきれてもゆく戎講　幽山

笹見せの出さぬゆえにや戎講の今日ハたけなきこぎれ商ふ　輕雲

まな板に小判ちりけりえひす講　其角

夜明ぬに賑ふ聲やえひす講　梅人

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

吳服所舊趾

伏見町の西吳服町にあり當所ハ天正慶長の年間伏見の吳服商賈引うつりて御用をつとめしとそよつて伏見町といひ吳服町の名のこれり尤今も吳服の商家多く住するハ其遺風なりとそ例年十月廿日戎講をつとめて甚にぎわし

淀屋橋初相庭

大川すじ船場の北より中の嶋に架す淀屋橋にあり　例年正月四日米相場の初市なり

傳云　往昔當橋爪に淀屋旦菴といふ豪富の者ありて諸國の米穀を買集め此橋詰に於て毎朝市を立て諸人に商ふこと其數際り知れず此家絶て後堂嶋に於て市を立ることゝハなれりとぞ故に今尚正月四日の初相場ハ當橋の南詰において立そめ其後堂嶋に引移すを舊例とす是淀屋が遺風なりと聞ゆ又此橋も其はじめハ淀屋より架そめしゆへ號くとも云へり例年七月當濱において水燈川施餓鬼を修行す　谷町條寺町大仙寺これを勤む當寺ハいにしへ淀屋の檀寺なりしとぞ故に此供養も淀屋の菩提の爲に修す

といへり

名物革烟草嚢

同所橋の南にこれを商ふ家あまたありて名物とす　又此濱邊ハ金毘羅參詣の渡海船あるひハ明石の通船のり場にして旅駕おほく立つらなり晝夜ともにすこぶる賑わし

例年六月十七日ハ御靈の宮の神輿此濱より乘船ありて御旅所に渡御あり供奉のふねゝ此につどひ拜禮遊參等の樓船ろゝ

淀屋橋初相場

淀川橋畔曙光新　捲起堂州羅糶塵
拍手丁々黍谷韻　和爲十萬竈中春

○

初市や藁も錦のうり詞　温故
去年よりもそやし立けりけふの春　望一

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

諸藏紙出

紙ハ往古推古天皇の御宇高麗國より曇徴といふ僧來朝して製法を傳ふ尤此時ハいまだ楮をもつて製することなかりしを聖德太子はじめて楮を以て紙を造給ふ是則今の紙の製法なり後世諸州に楮を植て專ら紙を造ること弘まり其品類も最多しさるほどに諸國の產物となり浪花に運送して藏々におさむ然るを紙問屋の巨商等これを求めて諸方に販く則ち此紙俵を藏より出すを紙出しと號す其形勢夥し

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

相撲漢大山

傳云　關取大山治郎右衞門ハ大坂梶木町心齋橋の角ニて出生せり身長六尺有餘目方卅四貫目餘ありて至て美男なり若年の時或諸侯より召出されしかども大山思ふ子細ありて固辭して仕へざりしかバ其侯より相撲さし構を仰出され三十一歳まで止居たりしが侯にも逝去ありしにより頓て免されし程に直に其年より堀江立山利太夫に從ひ相撲を稽古し出精する事餘の者よりハ三人前なり夫ゆへ程もなく卅二歳にて關取となれり一時さる大守に召されて寒取に出たりしが其内にて大山に勝たる者にハ金五兩づゝ御褒美として下されしにより五兩男と異名せしとぞ

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

〳〵ありて賑わしきこと天神祭に異ならず

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ今橋學校ト題シ文運窮來建學曇　至今經術授書生　老泉一自生神物傳得蘇家兄弟名　源華城トノ一首ヲ書入レアルモ構圖ナシ〕

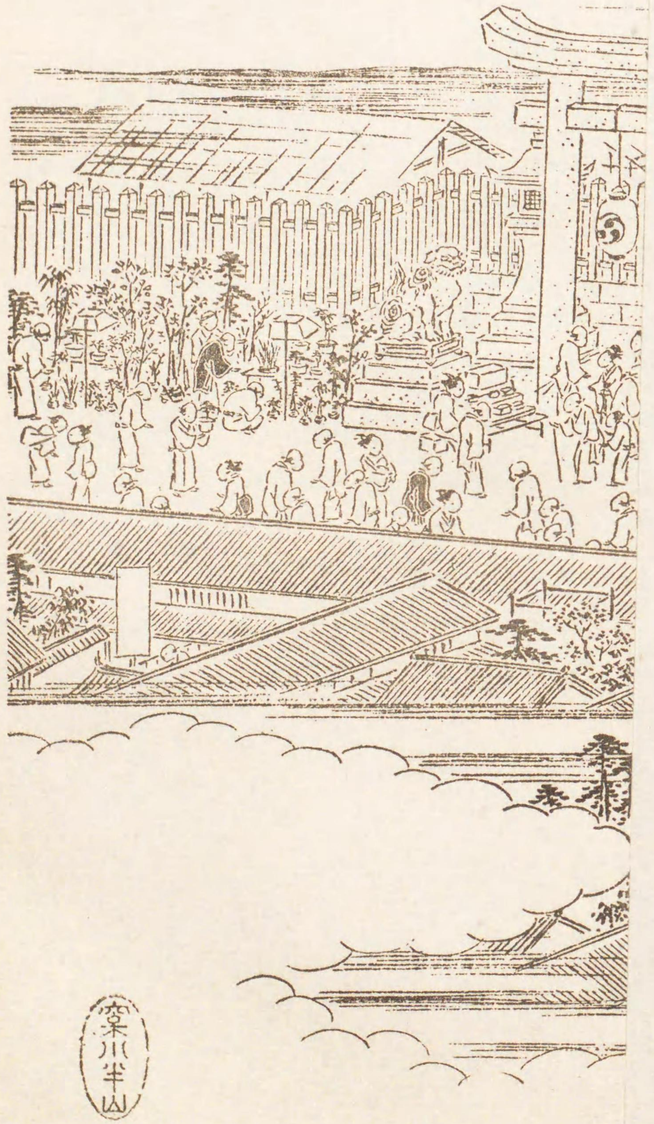
御靈神社

平野町の西龜井町にあり傳云中古石州津和城主龜井侯の第この地に有しゆへ今龜井町の名のこれり一說ニ當社ハ其始龜井侯のやしきの鎭守なりしといふ尤江戸堀四丁目龜井侯のやしきの鎭守も今尙同神なりとぞ古く八新御靈又ハ圓の御靈ともいへり延寶年閒にハ權五郎殿と稱せり

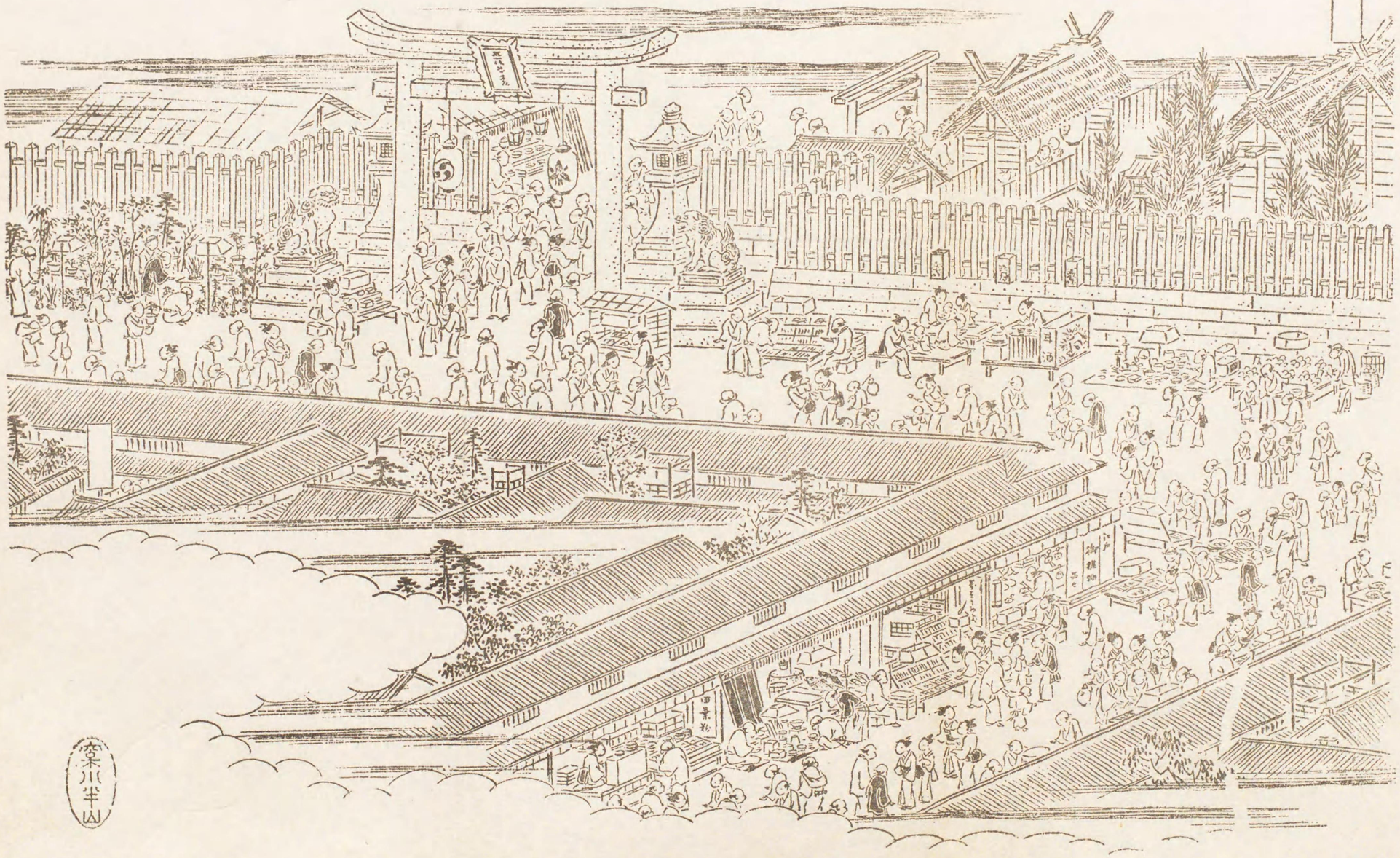
祭神　中央　天照皇太神　左　八幡太神　右　權五郎景正靈神

攝陽羣談云　昔津村の何某もつはら武勇を勵まし諸國を巡行して軍術の奧旨を極む相模國にいたつて一夕景正社に詣で神殿に通夜す時に神靈かれが武勇を感じ託して曰攝津國難波の勝地に祝祭れ吾まさに汝を擁護せんとなり答て曰何を以てか證とせん神云枕上に神幣あらんとなり明旦さめて之に然り自らこれを負て是に皈り叢祠を造り神幣を納め祭り御靈宮と稱す元祿年閒御靈大明神と贈號あり云々神社考云　權五郎景正社ハ相州鎌倉にあり嘗て源義家に從ひ奧州の役に赴く矢景正が右の眼に中る矢を拔ざる妻七日遂に其寇を射殺す今の世に目疾を患ふる者此社に祈る時ハ則效しありと云々

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ景正答の箭に敵を射落す ト題シアルモ構圖ナシ〕



御靈宮祭日之市場



栄川半山

摂津志云　圓神祠津村町今稱御靈古今祕註曰堀江東有澤周廻一萬歩許名八十島頭延喜式曰八十島祭御巫生島巫并史一人御琴彈一人神部二人及内侍一人内藏屬一人舍人二人赴難波祭之卽此名區云々

一書ニ云　祖實法師が難波紀行に津村の宮にいたりぬ實此やしろハ柳蔭の宮とて上古よりの宮居にて神木にも柳を植られし事摂津國の舊跡にて侍り云々

又一説にいにしへ此社内に大木の柳ありて津村の柳といひ浪花五景の其一なり今ハほろびてなし

わたのべや津村の宮の柳かけなびくも御代の春のふるしに

右諸説まち〳〵にして其事實詳ならず按ずるに當社ハ龜井町津村の町等にまたがりたるを以て津村の社といふなるべし津村ハくわしくハ難波津村なるべし其初ハ難波津の嶋にありし神社にして八十島祭をもこゝにて行われしこともあらんか後に島々變じて一圓の平地となり難波津村とも號せしをいつしか略して津村といひならわし八十島祭などありし古跡なりとて神祠のありしを津村の宮となづけけらし爾後津村何某鎌倉において靈夢を蒙り故郷にかへりて此津村の宮の相殿に祝ひまつりたりもかるに後世龜井侯こゝに第邸をいとなみ給ふにより是を鎭守の神と崇敬し給ふ斯て後久江戸堀に第邸をうつし給ふにより神祠ハ其儘にて名さへも龜井町と號せり又龜井侯より寄附し給ひし武器あまた今に存せりさる程に景正の神靈世に名高く又靈驗あらたなりしによりて相殿に在すことハ世人ゑらずして唯權五郎殿と稱し又ハ御靈の宮とも新御靈などいひて景正

の神靈の社と心得たるならんかし原來神德日々にあらたなれバ詣人常に閒斷なく社頭すこふる繁榮なり

宗源殿　社前の北傍ニあり兩皇太神宮を祭祀す　猿田彦祠　宗源殿の西ニ鄰る　神輿庫　猿田彦祠にとなる　神輿二基を藏む

神道祕密護摩壇場宗源殿といふとぞ

神樂殿　本社の北傍ニあり　**末社**　本社の後ニあり一棟　繪馬舍　本社の南傍ニあり　七神相殿祭神略之

朝吉社　繪馬舍の西ニあり　稻荷明神を祭る　**瑜伽祠**　朝吉社ニとなる備前國瑜伽權現を祭る

三神祠　菟布良社の向ニあり　伊勢八幡春日を祭る　**觀音堂**　神樂殿の東ニあり本尊十一面觀世音慈覺大師作浪花巡禮第三十三番の打留なり　**菟布良社**　本社の南傍ニあり菟布良彦菟布良姫の二神を祭る

例祭　正月十五日的張神事　同十七日御弓の神事　六月十七日夏祓神事神輿渡御大川筋淀屋橋南爪の濱より乘船にて下博勞御旅所へ神幸あり供奉の壯觀御迎の諸船濱々の篝火等美景なり　尤社頭より出御ありて淀屋橋までの閒の行列數々花麗にして殊勝なり　九月廿七日秋祭神事　十一月十日御火燒祭　例月一六の六齋日にハ夜店あまた出て至つて賑わし

前太平記寛治三年七月上旬奥州金澤柵初度の軍の條云　斯て夜書七日が閒息をも繼す戰へバ何れ隙ありとも見へず或ハ手負討死するもあり或ハ分捕高名するもあり樣々なりし其中に殊に勇々しく聞へしハ相模國の住人鎌倉權頭景成が一子權五郎景正なり生年十六歳とぞ聞えし力量馬上弓打物ならびなき達者にて心飽まて剛にして其質柔和の若者なり毎度大軍の先を蒐け驍勇にして善戰ふ敵を斬て落すこと其員を知や未だ一所も手を負ず比類なく舉動ける程に諸軍これを感美せずといふ者なし爰に武衡が一二と憑みし兵に奥州の住人鳥海彌三郎

御靈神社

國安く民ゆたかにと朝夕に
かけてそいのる神のゆふしで　前攝政左大臣

玉葉

皆人の祈るこゝろもことわりに
そむかぬ道を神やうくらん　藤原爲守

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

といふ者あり强弓の手垂なりしが一々景正が働きを見て心憎き冠者が有さまかな未だ年も滿ずして浩る所爲尋常の者にあらず彼を其儘さしをかバ多く御方を失ひなん射捕ばやと思ひ景正が進むごとに櫓上に在ながら樣々心を碎きけれども然るべき間も無りけるが今日彌三郎諸卒を具して柵外に打て出たりしに景正が叔父鎌倉權大夫景道が陣と蒐合せ追つ返しつ戰ひけり景正も此陣に有て例のごとく數多の敵を受て四角八面に切て廻り敵を四方に追靡け傍に引退き太刀おし拭ひ室に納め郎等にもたせたる丸木の弓を取て弦くひしめし寸引して又敵に向ふべき支度して居る處を彌三郎これを見てすわ究竟の處なれと近々と懸寄て四人張二十四束飽まで引設けて强音たかく切て發つ其箭矢所を違へず景正が右の眼を射て首を貫き胄の鉢付の板に射つけたり普通の者なりせバ此矢を受て片時も命生べくも見へさりしが景正些とも弱らず片目にて敵を見とゞめ唯今御矢賜りしハ鳥海彌三郎どのとこそ覺へたれ其處引給ふな當の矢を進らせん受て見給へといふ儘に眼に矢を折かけながら弓矢番て引絞る彌三郎大に驚き今まで某が鏃にかゝる者の物いひたる例を覺えず是凡人に非ずと身毛を竪て恐をなし當の矢に中なバ我命生べからず由なしとて逃たりけり景正忿て膩し敵遁すまじきぞ何處までもと鐙を合せて追かくる鳥海も命を大事逸足出して逃けれども重々に引懸たる亂株逆茂木に礙られて彼方此方と蒐めぐる何にもして柵の内へ入んと心はかりハ早れども是や運の究めなりけん郎等ども落合さず然も方角をさへ失ひて何處とも知ず逃まどふ景正遂に追つけて懸さまに丁と射る過たず鳥海が押付の迦より前へ射貫て千旦の板

より鏃五六寸射出したれバ少も悚へず馬より岸破とぞ落たりける景正が郎等はしり寄て首をかく景正ハ當の矢射課せて敵を射とり本陣に引退き馬より下胄を脱て景正手負たり此矢拔て給とて仰さまに臥たり同國の住人三浦平太郎爲次いで拔て進らせんとて弓手にて景正が額をおさへ片手にて力を入て拔んとす元來雙なき强弓の精兵が射付たる矢なれバ固くして容易ぬけず爲次頬貫着ながら景正が顏を蹤て左右の手をかけ拔んとしける時景正臥ながら太刀を拔て爲次が草摺をとらへて擧さまに突んとす爲次おどろき是ハいかになど斯ハし給ふぞ景正か云やうハ弓箭に中て死するハ勇士の望む所なり爭か生ながら足にて頬を踏るゝことハ有まじきぞ所詮和殿を敵に取て景正こゝにて死んといふ爲次理に責られ舌を卷て云事なし卽膝を屈めて顏をおさへ其矢をぞぬきたりける三浦鎌倉ハ年來兄弟よりも睦じかりける程に爲次何心もなくて斯ハ計らひけるなり景正ハかほどの痛手負ぬれども少も心違ハずして假にも無禮を惡みて斯ハ咎めけるとかや古より今に至るまで高名なりとて世に稱嘆せらるゝ者多しといへども未だ景正が如き者を聞ず是をこそ未曾有の高名と云べけれと見聞ける人毎に語りつたへて感じけり

一說に景正矢瘢を蒙りし舊地今も矢流川と呼ぶ又軍事終つて後其恩賞に出羽美濃兩國に於て五千貫の采地を景正に賜ふ其後ゑば〳〵軍功を顯し東美濃一萬貫西美濃の內居益の邊に於て一萬三千貫相模國大庭の莊を一圓に領しけり伊勢太神宮を常に信じて大庭の庄を神田に供獻す景正卒去の後法號を行濟といふ鎌倉に墳墓を築き末

御靈祭神輿渡御行列

堀河百首

いにしへにさはへなしける神たにもけふの御祓になこむとそ聞　顯仲

人なみに去るも去らぬも身を祈るけふの御祓いいく世成らん　知仁

夏祭車樂

山車轆々鼓鐘々　傾市看人總若狂

童子何知老萊事　滿街舞踏彩衣裳　後藤春草

棚車雷鼓響轟々　彩服斑爛躍且行

不識明神能享否　一鄉年少總如狂　並河寒泉

〔編者曰ク原本此ノ所參丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

葉の人尊敬せり其後惡源太義平此墳前を馬にて通られしかバ忽ち墮落して絶入し給ひ頓て狂亂して戯ニ云吾塚頭を馬の蹄にかけしハ非禮なりと怒れるに臣等これを宥て介抱なすに漸々本心に皈せしかバ義平さバ〳〵過ちを悔て一社を建營し景正を御靈宮と崇敬す景正の嫡子小太郎景繼其子長江四郎義景傳へて濃州を領し景正の庶を青坂大明神と祝ひ奉りけり云々

系圖

桓武天皇 ― 葛原親王 ― 高視王 ― 式部卿

人皇五十代

高望王（始賜平姓） ― 良文（從五位下因幡守） ― 村岡小五郎 ― 忠通 ― 鎌倉權太夫

爲通 ― 三浦平太夫

三浦之祖 ― 景通

景村 ― 鎌倉四郎大夫　長尾大庭　壤島瑞田殷野等之祖

景久 ― 梶原太郎

景正 ― 權五郎

景秀 ― 權六

景繼 ― 小太郎領濃州 ― 義景 ― 長江四郎領濃州

一萬三千貫ニ云

按ニ前太平記ニ景正ハ權頭景成ノ一子トアリ景道ヲ叔父トス何レカ是ナルヤ不知後人尚可考

拔するに奥州後三年軍記に鎌倉權五郎景正右の目を敵に射さしたるを折かけながら答の矢にその敵を射てをとしさて退きて景正手負たりとて仰さまにふしつゝ三浦平太郎爲次に其矢を拔するよし見へたりゑかれども敵の名ゑれず

俗説辨ニ云　陸奥話記阿倍氏傳を考ふるに康平五年頼義義家奥州征伐のとき貞任が弟鳥海彌三郎宗任をとりこにすと有古今著聞集を見るに宗任其後義家の家人となると見へたり奥州後三年記寛治五年義家武衡家衡と合戰のとき鎌倉權五郎景正といふ者十六歳になりしが右の目を射られ其矢を折かけ答の矢をはなち敵を射取　此てきの名ゑれず　陣所にかへりしを三浦平太郎立寄て矢を拔たりと記せり年數をはかるに鳥海がとりことなれるより十二三年を經て景正生れたれハ鳥海に射られたるにハあらざる也

前ニ云前太平記ニハ武衡が一二とたのみし兵に奥州の住人鳥海彌三郎とあり又宗任ハ鳥海三郎と見へたり然れバ宗任を彌三郎といへるにもせよすでにとりこと成て都にありて年を經たり故に奥州において同名の武士出來たるも知れず強ちに彌三郎ハ宗任のみと思ふも僻案ならんか

寶城寺

右同所ニあり眞言宗社僧たり

本尊藥師佛を本地佛と稱す

藥師堂　本尊瑠璃光佛ハ弘法大師の作日光月光十二神將ハ運慶作　毎月八日十二日詣人羣をなせり

御影堂　藥師堂の東傍ニあり弘法大師の影像を安す大坂大師めくり第一番の札所にして毎月廿一日諸人羣參す

横堀材木屋

此川條を西横堀と號す大川より南に曲流し道頓堀に會す川條南北都合十七橋を架す

東川岸凡十五丁あまりの間材木屋軒をつらね交易ゑバ〳〵繁昌なり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

分福茶釜

傳云　明和四年亥の春浪華の所々に於て新築地ありけるが立賣堀二丁目古金町の濱邊を築地せんと堀穿つ所に何かわあらず鍬に當るものありて忽ち土中より水氣烈く立昇るに人々あやしミ尚々次第に掘うがつに一塊の石の如きものを堀出せり皆々奇異の思ひをなして水をそゝぎよく〳〵見るに半より大小二ッに分る恰も身と蓋のごとし其形更に比ふべきものなし處々少し毛あり蓋をとれバ内空にして蜂の巣のごとく堅きこと金鐵のごとし然れども更に金石土木の類にもあらず取上見れバ其輕きこと瓢のごとく其色蛙の色に似て下の方皮に似たれどさにもあらず數水をかくれど外へ一滴も洩さずして吸こめり時として水を吹出す時へぶんぶ〳〵と鳴聲あり本草綱目三才圖會にも是に比すべき説更になし世上の風聞公に聞へ御取よせ御覽有しが只奇しきものと許にて則ち其節築地請人何某へ下しをかる其折から阿彌陀池和光寺に於て上總國千田村齒吹の如來開帳ありて靈寶の内ぶんぶく茶釜といふ品これある由うわさ專らなりしかども開帳おわるまで更に來らず然るに此怪物何となく其物に名實相應せるやう思われしかバ誰いふとなく是を分福茶釜と名づけゝる實に代にならびなく一奇物なり今横堀材木屋何某の家に藏せり

〔一者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

妙見堂　右大師堂の西ニ鄰る北辰尊星を安す

金毘羅堂　藥師堂の北ニ鄰る

行者堂　役小角并ニ不動藏王等を安す茶所の北ニ鄰る

○淸正公祠　烏瑟沙摩堂戸隱社其餘末社多し

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ寶城寺ト題シアルモ構圖ナシ〕

横堀材木屋

西横堀東岸ニあり北ハ七郎右衛門町一丁目二丁目より濱町長濱町樋木町及ひ西笹町五幸町等凡十五町餘の開材木屋軒をつらねて目覺し浪花市中に於て材木の商家此彼に有といへども斯ばかり軒を列ぬるハなしされハ濱納屋軒場にハ杉檜の丸木をはじめ松樅椹梅楠櫸桐なんど所せきまで立つらね内にハ黑柿瓢樹櫻樫桑柳黃楊櫟檜木楊櫨の小枝まで庭面に壘々たり其餘あらゆる諸木を集め見も馴ざる唐木までたくわへ持て販ぐものから何にまれ需むるに應ぜざるといふ事なし故に浪花中へいふも更なり遠近の國々より注文有て頗る賑し

津村御堂

御堂筋備後町より本町のあいたにあり世俗表の御堂又北の御堂といふ京師西本願寺抱所なり

本尊　阿彌陀佛　安阿彌作長三尺五寸兩脇檀に開山親鸞聖人の影前住上人の影聖德太子七高僧九宇十宇の名號を安置す

二尊堂　本堂の南ニあり開山聖人蓮如上人の二影を安す俱に蓮如上人の筆なり

對面所　本堂の北ニあり莊嚴美にして頗る廣し御門主下向の時は門徒こゝにおいて御盃齋非時に列す是を御相伴といふ又朝鮮人來聘の時ハ此所をもつて止宿せしむ

轉輪藏　二尊堂の東ニあり一切經を藏む

鐘堂　輪藏の東ニあり

鼓樓　艮の角築垣の上にあり

茶所　本堂の前ニあり　詣人こゝに憩ふ

本願寺第八代蓮如上人明應四年石山本願寺を建立し給ひ化益し給ふ故大坂市中および北攝津の村里の門徒多く尊信す因之第十二代准如上人此御堂を再興し給ふ其初めハ境内狹少なれバ元祿年中裏町渡邊筋六十間安土町四十間を買取て境内とす又享保九年三月大坂大火に類燒す其後南の方本町條の人家を移して寺内とし今の如く御堂の莊嚴他境に勝れ美麗なり畫ハ多く法橋狩野永雪とぞ聞えし常に老若の參詣間斷なし例年七月十七日より十九日まで京師本山より燈籠をうつして御堂において門徒に見せしむ是恆例なり

又十月報恩講を勤む浪花市中ニもとより近在近郷より貴賤羣參して頗る賑わし築地の内にハ講中の詰所いらかを竝べ門外の左右にハ作り松を多く植て景勝とす市中第一の佛閣なり

西風に何ぞ自力の扇づれ　西山宗因

絲垂櫻　玄關の庭にあり大樹にして四面に枝を垂る晩春の花盛にハ美觀言語に絶す

寶殿花開春色新　賞翫難去幾吟呻
奔波翁媼不知趣　認得乃爲宗旨人　清水中洲

津村御堂　西本願寺御坊

傑閣雙徽桐菊新　高彫鳳翼又龍鱗　源華城
不開門外傳奇話　長弔朝鮮國裡人

海棠やお八ッ打出す堂の前　史邦
すぐなりしあさぢの御法きかんとて蓬生の宿をき出てゆく　木端
其まゝに花の臺にうつすかな櫻に染し春の心を　讀人志らず

同報恩講羣參

水涕にまことと見せけり御取越　千那
翌玄らぬ老の身なれやおとりこし　范孚

〔編者曰ク原本此ノ所參丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

御堂前木偶店雛市

宮入の娘よ雛の市　水室

むかし男むかしし女や紙ひいな　乙兒

二君にゝ仕へぬ武士もあれこれと殿のよい雛忍りて求むる　町丸

誘ふ水まつ萍や市のひな　天來

落つかぬ顔なり市ののこり雛　梅專

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

本街歳市

涙花ゝ常に夜店多く順慶町を始め心齋橋通り松屋町條平野町等ともに年の市店を出せり去かれども本町通ゝ平生にゝ更に夜店を出すことなく年市にかぎりて此地に店をつらぬること昔よりの古例にて賑わしきこと又類ひなし

○

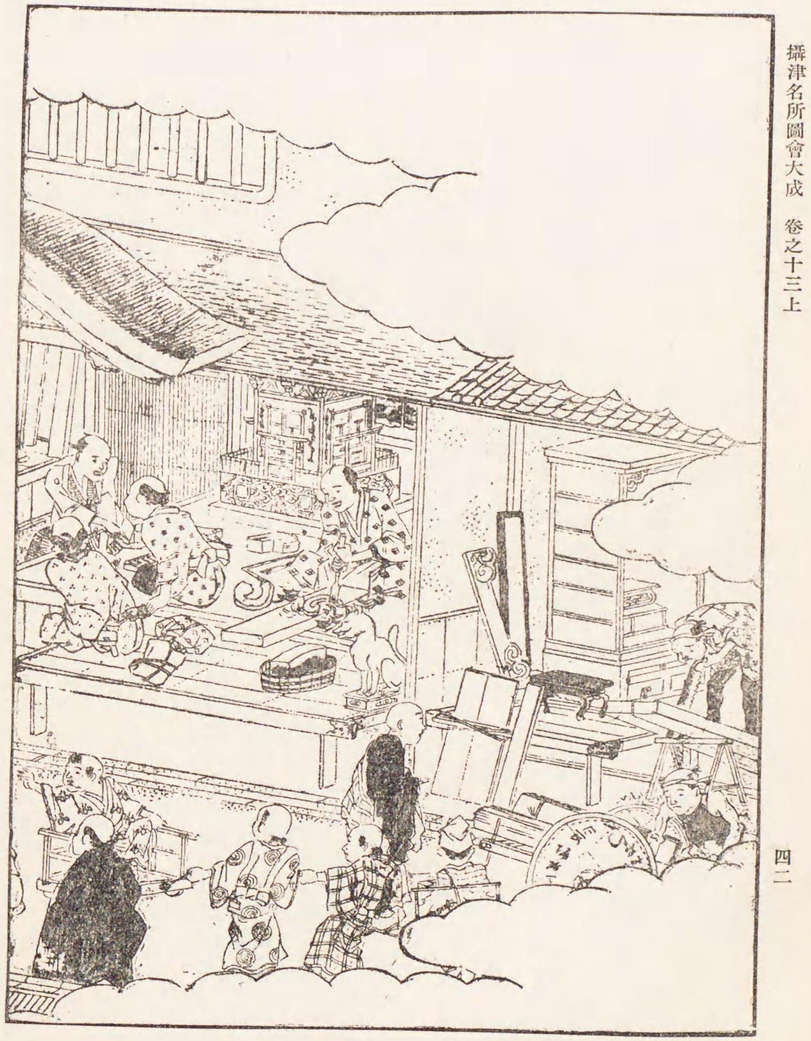
年の市梅さし上て通りけり　雨什

神鳴もさわくや年の市の暮　去來

海山の物一聲に年の市　魯江

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

安土（あづち）
街神（まちのみ）
輿屋（こしや）



八百屋街飛禽店

燕都貢獻阿蘭陀　隨例歸途茲駐靴
滿目總無鄉里物　羈情狂買狄禽過

源華城

○

唐わたりのゐんこ鳥を見れバ
齡をのぶるといふに

千代も猶生てゐんこと相違なし
名鳥を見る人ハ長命

國丸

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

御堂前木偶店

北の御堂の前より南の御堂前まで凡八丁許の間軒をつらぬ世俗御堂のまへの人形といふ

抑此市店ハ初春の毬打羽子板手鞠より年玉物の數々月影朧にして桃の花ほころび北の御堂の絲櫻咲頃ハ彌生の雛人形紙雛衣裳雛雛の御殿に左近櫻右近橘御隨身官女仕丁婢子雛市松木偶御廚子黑棚萬の調度を取そろへ所せき迄飾たて商ふぞ甚目ざまし扨端午の前にいたりてハ染幟鎧薙刀弓箭鐵炮太刀具足其餘兵器を數模し立列ね木偶にハ神功皇后武内宿禰賴光公時八幡太郎鎮西八郎朝比奈時致牛若辨慶佐々木梶原加藤樊噲關羽鍾馗好みに任す勇者の粧ひ威風凜々と備へたり水無月ハ御祓の祭挑燈手遊の地車于蘭盆の切子燈籠蹄子の花笠重陽にハ後の雛飾神栗月ハ髮置の飾綿歲暮祝儀の進物まて調わずといふ亶なしさる程に浪花市中ハ言も更なり近鄕近在および遠き國々よりも此に來りて需るゆへ其繁昌いひも盡しがたし

本街故衣行店

本町二丁目邊より四丁目にわたりて古着の問屋軒をつらね日毎に浪花市中および近國近鄕の質の流れを買あつめ絹布上下の品を仕分け遠近の國々に積送ること夥しかるが故に夫々の得意ありて此方にハ松前の客をむかへ彼方にハ薩摩の客を送る或ハ品々をならべて商ふあり又ハ酒宴を催して饗應ありいづれも銀高の商賣にして容易からざる取引なり尤此町家ハ他に異りて軒いたつて深し是ハいにしへ買もとめし古着類を三日のあいだ軒さきにならべ諸人に見せしめ若や盜賊のため奪われしものあらバ撰み出すべしとの事なりとぞ其餘風にて今尙軒端格別に深し一奇とす亦古手の市店ハ座摩の前佐野屋橋通等にあまたありといへども何れも小賣店にして問屋といふハ此所也

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ本街故衣行店ト題シアルモ構圖ナシ〕

八百屋町飛禽肆

備後町安土町の間八百屋町通りの兩側鳥屋の店のきをならぶ故に俗に鳥屋町といふ日毎ニ諸鳥の市ありて賑わし

時珍曰凡二足にして羽あるを禽といひ飛禽の總名を鳥といふ羽ある蟲三百六十毛ハ四時に協ひ色ハ五方に合ふ山禽ハ岩に棲ミ原鳥ハ地に處林鳥ハ朝に嘲水鳥ハ夜唼かゝる諸鳥を普く集め飼得て是を販くを業とすさる程に大なるものハ孔雀鶴をも育て小なるものハ雀燕をも籠に入て軒端に出す春の鶯秋の鶉も養ひて棚にならへ夏の水鷄冬の鴛鴦は庭中の池に遊ばしむ鷄鶩ハ街に求食矮狗哈叭狗ハ席上に往來せりそも吾國の鳥ハいふも更なり見も知らざる異國の鳥獸にいたる迄畜へぬれバ何にまれ需むるにあらずと言ふことなし實や山陵鳥に曲をさせ鸚鵡に言せて來客を饗應も一奇の活業といふべし

安土町八幡宮

安土町三丁目ニあり　例年八月十五日放生會の祭祀ありて至つて賑わし

一説に當町ハ天正の頃諸士の射術調練の地にして射場の垜ありしゆへ安土の名殘れりと云或云江州安土の町人こゝに引うつりし故に名づくとも云いづれか是なる哉詳ならず

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ安土街八幡放生會ト題シアルモ構圖ナシ〕

鯛屋貞柳蹟

御堂前通鏹屋町西南角の家也こゝに住して菓子を製し業とし鯛屋山城大掾と號す委くハ下寺町光傳寺の條に出す

若年より狂哥にこゝろをよせ八幡山豐藏坊信海法印が門に入て其名世に聽けり元祿元年辰九月十三日信海法印迁化ありけれハ今より後狂哥の道たど〳〵しきと淺草大護院へ申上けれバ月洞子御事豐藏坊に狂哥おとり給ふまじければあなたへ添削を乞ひ申せとありけれバ黑田公へ文奉るとて

男山言葉の花ハちりぬれど猶たのミある武藏のゝ月　貞柳

黑田月洞軒よりの御返し

いや我ハ吾妻のえびす哥口も髭もむさ〳〵むさしのゝ月

右家ハ享保九年辰三月廿一日大坂大火に類燒してより舍弟貞峨の息忠七といへる人道頓堀太左衞門橋すじにて貞柳の鯛の看板をかけ菓子店を出せしとぞ

攝津名所圖會大成　卷之十三上　畢

古梅園墨店

〔編者曰ク原本此ノ所半丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

小橋屋呉服店

山鳥のをばしやのたなの子供らが
ながくしき聲のにぎわしきかな　鶏成

〔編者曰ク原本此ノ所半丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

御堂前花市

涼しさや花屋が店の秋の草　凡董

○

不待羣花趁信風　窖中冬暖暗香融　鈴木尙

街頭一夜風如劍　始識園師欺化工

羣芳馥郁露香新　花戸朝朝引市人

不消吳山幽討遍　肆頭常祕四時春　荒井鳴門

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

難波御堂　東本願寺御坊

薩叟奥嫗來去忙　黃花難壓牡丹香　源華城

門前因果報應跡　人說雙羊殪一狼

肩衣をかけておもへゝ極樂へ戀といふ字のおふみうれしや　宵眠

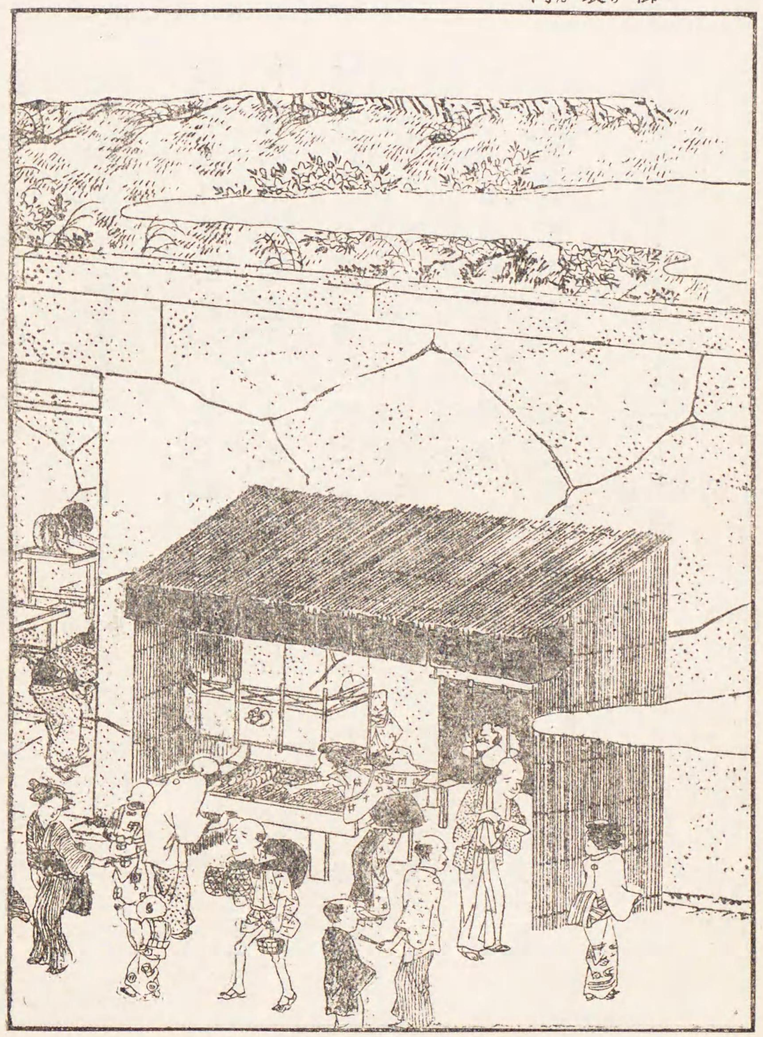
葉も塵もひとつ臺や雪の色　千代

畫桷高甍自屹然　鸞公巨刹掃風烟

雲聚佛前隨喜客　無朝無暮誓生天　荒井鳴門

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁半插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

四



南御堂の裏穴門

五

西瓜くふ跡い安達か原なれや其角

出女の口紅おしむ西瓜かな支考

難波御堂

御堂すじ北久太郎町より北久寶寺町にわたる裏の御堂又ハ南御堂とも稱す京師東本願寺の抱所なり

本尊　阿彌陀佛

安阿彌の作長三尺五寸許兩脇檀に祖師親鸞聖人前住上人の影を安し聖德太子七高祖九字十字の名號を安ス

ニあり一切經を藏す

鐘堂

本堂の巽ニあり

鼓樓

本堂の艮ニあり

茶所

堂前ニあり詣人こゝに憩ふ

對面所

本堂の南ニあり

轉輪藏

本堂の北傍

窟門

本堂の後北傍ニあり土堰石壘の中を石にて窟を造り て通路とす則上下左右ともに切石をもつて造りたれバ夏日といへとも暑氣を徹さず清涼なりこゝに西瓜をひさぐ店をいだして名物とす衆人こゝに暑をさけて西瓜を食す穴門の西瓜と稱して名高し

中興第十二代教如上人將軍家より台命を蒙りて此地を賜り難波御坊と稱す初メ文祿年中にハ道修町壹丁目にありて渡邊御坊といひしとなり慶長の末に此地に御堂を移され南北の兩御堂とも莊嚴艷麗にして他に比類あらず築垣の石高くして西北の方ハ土堰をきづき上に映山紅山躑躅を多く植て盛りにハ花色爛熳として往來のたもとを輝し市中の壯觀となれりしが近來枯て大に景色を失へり

享保十四年酉閏九月二日難波の御堂へ東御門跡御下向によみて奉る

菊の閒も閏九月の色見へて重ね疊の千代に八千代に

貞柳

御堂前花市

右南御堂の門前より北久太郎町通りへかけて毎朝花作りの農夫四時をり〳〵の草木の花をもち來りて地上につらねてこれを販ぐその光景艷にして美觀なり尤花の市ハ上町松屋町通りにもありて當所ニ限らずといへども此地ハ殊に賑しくして勝りたり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ御堂前木偶店端午飾物市ト題シ滿城端午祝男兒矛戟幟旗各鬪奇武備儼然驚目處依稀將帥出師時荒井鳴門ノ七絶ヲ書入レアルモ構圖ナシ〕

芭蕉翁終焉地

南久太郎町御堂前東へ入南側にあり今俳師花屋菴鼎左こゝに居住す尙其砌の手水鉢今に存す且蕉翁が遺品を傳りて祕藏せり原此家ハ其始花屋仁右衛門といへる切花をあきなふ者の家にして裏に風流なる座敷のありしを貸屋として有しを翁南都より難波に來り此ざしきを借て滯留せられしが其内病床にふして終にこゝに卒すとそ委くハ其角が枯尾花終焉の記に見へたり十月八日の夜の吟ニ云

旅に病で夢ハ枯野をかけ廻る　はせを

終に元祿七年十月十二日申之剋に沒す行年五十三

傳云翁終焉の花屋の座敷といふハ其先貞享の頃世に流布する御堂の前の敵討なる嶋川太兵衛といへる浪人ゑバらく寓居せしが終に此御堂前において討れしとぞ實世に名高き人に緣ある座敷にこそ

俳家奇人傳云　桃青俗名甚七　藤七　忠左衛門等の或説あり今高野山報恩院の過去帖に從て忠左衛門とす

松尾忠左衛門ハ伊賀上野藤堂何某の近臣なり一年故ありて故鄕を立いで洛に上り吟叟に遊學する事七年寛文の末つかた東武に下り礫川の水道修成俤夫となつて功を終るの頃薙髮して風羅坊といふ深川に庵を結ぶに自ら

芭蕉を植て樂む是より世擧つて芭蕉菴と稱す庵瓢中庵の諸號あり　初の名を宗房といへり後桃青と改む又杖錢子或ハ泊船堂無名庵蓑蟲是佛坊等の諸號あり素より學識宏博氣象飄逸古今に其人なき所以なり且禪意を佛頂老師に悟り畫法を森河許六に得たり當時其雅に皈依する人少しとせず何れの年にか有けん客居して姑く幻住庵の幽閑を樂しむ貞享四年の秋鹿嶋の吟行あり同く五年杜國を携て大和に遊び元祿二年曾良を率て陸奥に旅す同七年の秋ハ翁伊賀に在しが浪花より招きもあれバ奈良の重陽をかけて赴んとて支考惟然を伴ひ歩を進めて風遊するの日痢を患て大坂御堂前花屋仁右衞門が後園に伏す病中の吟　旅にやんで夢ハ枯野をかけ廻る　是風詠の終なり纔に七日を過て歿す歳五十有一嗚呼悲ひ哉此叟一たび江左に龍擧してより始て自然の妙を開き遂に俳諧をして美を詩哥に競わしむ光前人を蔽ひ澤後代に垂る其句正變一ならず然るに後進察せず其平々たる者を取て以て三昧となす歎ずべし「象潟の雨や西施がねぶの花」これ東坡が西湖の詩に萠す「田一枚植て立さる柳かな」新古今の哥より催す「古池や蛙とびこむ水の音」是全く王維が妙境紙筆に說がたし「花の雲鐘ハ上野か浅草か」幽玄涯なし「木の下ハ汁も鱠も櫻かな」其事近ふして及ぶべからず「六月や峯に雲おく嵐山」此句自然にして濃厚三復して後その旨意を知る「名月や池を囘りて夜もすがら」洛の嘯山ちるして云く友人雅因さきに廣澤に遊びて月を觀る適この詠を感じて其精深なるを覺うと「枯枝に烏の止りけり秋の暮」又いはく翁若かりしとき檀林中に交遊す一日此句を唱ふ衆人愕然として翁を上座に尊ふ幾程もなくして一派をなせりと「あか〳〵と日ハつれなくも秋の風」

或ハ傳ふ翁越に遊んて此句を得たり風の字を山に替て北枝に示す枝いわく未だ風の字の佳なるにハ如ず翁おどろいて曰く我たわむるゝのみ北地に子あり道もつて興るべし「白露に淋き味を忘るゝな」元祿中翁加州金澤に行脚の勞を休るの砌春亭にて一夜會合ありしに其饗應山海の珍味を設けたり終に臨んで諸人また後會を約せんとす翁のいはく今夜の饗應心づかひの程言語にのべがたし恨むらくハ風雅の鉆なし我ハ浮世をよるべ定めず或ハ野末に晝寐の夢を結び或ハ山中に一村雨を凌ぐ然るに斯る珍物滋味あに風流の本意ならんやと扨こそ其地に北枝暮柳舍等の名家を出せるも其教誨のまめやか成によつてなり「十六夜ハわづかに闇の始かな」既望の作古今此篇の右に出る者なしといふ「鹽鯛の齒莖も寒し魚の店」平穩中寓無限悲涼宜なるかな晉子が雄高を壓する事を殊に其眞所を得て後世人口に誦するハ「山路來て何やらゆかし菫草」「梅が香にのつと日の出る山路かな」「花ざかり山ハ日頃の朝ぼらけ」「稻妻にさとらぬ人の尊さよ」「道のべの木槿ハ馬にくわれけり」「盆すぎて宵闇くらし蟲の聲」「今日ばかり人も年よれ初時雨」これ其正變一ならず深く味わずんバ有べからず天風雅頌すでに亡し一變して離騷となり再變して西漢五言となり三變して歌行雜體となり四變して沈宋律詩となる蓋し花を實に改め實を花に和らげたるも本朝和哥の替りめといふべし又いにしへ俳諧の連哥といへバ「あしもて返る難波津の浪といへるに賴養朝臣「みだれ漢ハ相撲草にぞ似たりける」「廣き空にもすばる星かなトいへるに西行法師「ふかき海にかゞまる海老の有やらむ」斯一句二句をバ翫べり宗祇宗長掛河の城において灰書

の俳諧も發句臯句といふ事もなく只言捨なり宗鑑守武等犬筑波集飛梅千句を撰ぶといへども未だ一座の準繩も立さりけるを松永貞德ひとたひ　九重より御免許を蒙りてより其式大率定まる時に難波の宗因古風を感破し新體を發起して一時の晒落に人を絶倒せしむ是を檀林と稱す翁いまだ宗房たりし頃その風に遊んで上手の聞へ有しが聊か眼を開て次韻集を撰す　是ハ洛の信德が二百五十員に七百五十句を次で千句とす故に次員の名あり　稍檀林を離れんとする根ざし見ゆ遂に杜律の風骨を探り山家集の寂寥をたどり往々幽玄の體に人情の理屈を離るされバ正風爰に大成して天下後世こぞつて俳諧中興の太祖と稱譽せらるも宜なるかな　抑　この叟この道に深切なる譬バ佛祖の薪を伐り水を荷ひ千辛萬苦し大乘に入て衆生を濟度するに等とかやいはん眞に尊尚べし　支考が爲辨抄いさゝか子細あれバ據とせす云々

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ 芭蕉翁古趾 ト題シアルモ構圖ナシ〕

坐摩神社

南渡邊町ニあり延喜式神名帳云攝津國西成郡一座坐摩神社大月次新嘗云々

本社　祭神　五座　生井神福井神綱長井神この三井の神ニ竈神二座を加へ祭る神名ハ波比祇神阿須婆神これを併せて五座なり

攝社　田蓑神社　本社の前東南傍ニ有　兩皇太神を祭る

末社　事代主大國主二座相殿一社○六座一棟一社此餘本社の南傍ニ小祠數あり略之

營神社　田蓑の社の北ニ列す

大江神社　本社の傍ニあり　神功皇后を祭る

神樂殿　本社の前北の方ニ有

繪馬舍　神樂殿の西ニあり

神輿舍　繪馬舍の西ニ鄰る

當社の鎭座ハ神功皇后三韓より凱陣し給ふ時　神武天皇の吉例によつて御船を難波の岸浮見石の上によせて神璽を鎭めて齋ひ給ふ神社なり舊地ハ大江岸國府町にあり　今の御旅所の地をいふ當時石町とよべり天正年中淡路町壹丁目に移し其後又今の地に移すと云　三代實錄云貞觀元年正月從四位下を授く　同年九月八日攝津國難波大社神等遣使奉幣爲風雨祈之云々

延喜式云凡坐摩巫取都下國造氏童女七歲已上者充之及嫁時充替云云

古語拾遺云爰仰從皇天二祖之詔建樹神籬於坐摩巫所奉齋也　坐摩也云云

俗諺云　神功皇后異國を征し此津に著岸の時石上に安坐し給ひ御身を摩し憩ひ給ふ所難波人醬を獻ず秋の祭ハ此流例によるとなん

一說に當社祭神ハ神功皇后なり凱旋の日此所において飲食し給ふ也譽田天皇三年十一月百濟の辰斯王叛す紀角宿禰羽田矢代宿禰を遣してこれを伐しむ即日難波の沼中においてこれを祀る仍て住吉第一の攝神なりと云々田蓑神社難波大社等ハ攝社なりといふ

本社幣殿額　難波大社　伏見院勅筆

西鳥居額銘同上　坐摩神社　一條准后御筆

或云此額の銘を考ふるに難波大社の方ハ神功皇后を祭り坐摩神社とあるハ今の五座の神を祭りたらんかと覺ゆされハ其はじめハ神功皇后一はしらを祭らせ給ひしに近むかしの代となりて大内に祭らせ給ふ釜所神御井の神等をうつされて相殿となされしもあるべからず當社神寶の内ニ菅公の御筆にて大宮守護神靈と書て奉られしあり是ハ大内に鎭り玉ひし五座の神の御ことな

上難波宮夏祭
神輿渡御

御使人

神輿

神輿

張田馬

新箱提灯

夏祭提灯

梅堂太鼓

長柄提灯
二十箇

宮居御百台

人吉の
ひくてあまたの
宮ゐおうの
ふゆ
御詠

鳥居

御水

夏祭提灯

大鉾

杜鵑

大鼓
十張

神供垣

御書

宮庫

其二

御殿代御寄附
御殿代御寄附
神馬
神馬
御殿
御殿
天神
梅
子子
清水
四神社
巫女

弓箭
雲人
衣蓋
御殿
御殿
拵持
拵持
御手洗
御手洗

るべし又小野道風朝臣の異國降伏神と書て奉られしハ神功皇后の御事ならんか尙後醍醐天皇大塔宮をはじめ源頼朝卿などの殊にたつとみ祭られてくさ〳〵奉られたる書神寶として傳へられたりき又云此御井神三座釜所神二座ハ仁德帝の高津宮の臺盤所の庭中に祭り給ひし御神にして末の代までも今の御城のほとりに有しなり尤中むかし神功皇后をあわせ祭りたるゆへ難波大社といひ座摩の神社とならへ稱へしなるべしとぞ後人尙考ふべし今ハ本社ハ五座の神をまつりて神功皇后を別宮に祭りて大江の神社と稱す

例祭六月廿二日夏祓の神事神輿石町の御旅所に渡御あり神幸供奉の行粧すこぶる美觀なり九月廿二日秋祭と稱す十一月十五日鳥掛神事其餘攝社末社の神事ゑば〳〵あり殊更市中の神社なれば詣人常に閒斷なく境内ニハ軍書講釋むかし咄などの小屋ありて頗るにぎわし

〔編者曰ク原本此ノ所參丁插畫ノ豫定ニテふる心あらしかし波もなこしのみそぎしつれば　伊勢大輔　構圖ナシ〕

座摩前故衣鋪

座摩の前通本町より南へ博勞町迄凡七町許の開古手の小賣店軒をつらね日毎に買客羣をなし至つて賑わしすべて此邊ハ通行ゑげき所なるゆへ南御堂の土堰下ニハ傘下と號くる煮賣屋多く且貨食家ゑば〳〵ありてすこぶる繁昌なり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ屋の軒にちら〳〵する坐摩のまへ　眞萩　トノ書入レアルモ構圖ナシ〕

坐摩神社　坐摩社夏祓神事神輿渡御　ト題シ　後拾遺　みなかみもあらいくはくの溜息つきてなつ祓　嵐雪　トノ書入レアルモ

上難波仁德天皇宮

上難波町ニあり世俗博勞稻荷と稱するハ訛なりト云鳥居額仁德天皇宮

本社　鴟鴞聖帝　拜殿の額攝津惣社難波皇太神宮と書す社記云　聖ハ反正天皇元年冬十月勅によつて大江坂平野郷に鎭座住吉行幸に當社へ詣し給ふ其時ハ延久五年二月なり又將軍頼朝卿および足利將軍家社參ありて神領を寄附し給ふこれを上難波下難波といふなり又攝陽羣談云稻荷神社博勞町にあり祭神三座第一殿倉稻魂神第二素盞烏尊第三平野仁德天皇なり平野神ハ後三條院御宇延久三年當社相殿に勸請せり因て世俗仁德天皇平野大明神社なりと云々然れバ古くハ稻荷祇園の相殿に仁德天皇をまつりしを後世稻荷を別社に祭りて平野神一座を本社とせしなるべしいにしへより難波の生土神を牛頭天王となせバさも有べし

座あり後世天正年中　金城御造建の時神領地によつて此上難波に移すむかし舊社の時　後三條院の帝

八幡宮　本社の前北の傍ニあり八月十五日放生會神事あり

天照太神宮　八幡宮の西ニ鄰る

博勞稻荷神祠　太神宮ニ末社　稻荷となる

社の西傍ニあり　五座祭神略之

繪馬舍　社前の南傍ニあり

神樂殿　南側ニあり

春日神社　神樂殿の東傍ニあり

金毘羅社　春日社の向ふニあり

末社　金毘羅社の北傍ニあり　座祭神略之

觀音堂　南の鳥居の内ニあり本尊十一面尊ハ惠心僧都作大坂巡禮第三十二番札所なり

神輿藏　金毘羅社にとなる

例祭　六月廿一日　神輿橋通の御旅所に渡御あり祭禮嚴重にして供奉の行粧美觀なり尤此邊の市中および新町の廓中等生土にしてすこぶる賑わし又御旅所の邊の生土地より矢倉太鼓とて美をつくして飾りし太鼓をあまた出せり是當社の奇觀なり

流鏑馬　五月五日辰之剋　博勞町通に於て行る

九月廿一日　秋祭とて神馬の渡あり

此餘攝社末社の神事ゑば〳〵あり原來當社頭ハ浪花の市中なれバ詣人平日に閒斷なく且軍書講釋昔噺茶店料理屋等つらなりて頗る賑わし

攝津名所圖會大成　卷之十三下　一七

宇和嶋橋飾太鼓光景

上難波の祭にハ産地の町々より飾太鼓多く出て神輿わたりの先にすゝみて神をい
さむ別て長堀宇和嶋橋の上においてハ太鼓のわくを持て高くさし上或ハ車輪のこ
とくまわしなどしておの〳〵力の程をあらそひ見するを晴とす實や勢ひ猛にして
天地も轟くばかり是ハ陽勢をもつて陰氣の邪を消するならわしなるべし

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

筒井順慶第古趾

順慶町ニあり地所未詳和州添下郡筒井城主筒井陽舜房順慶旅館ありしゆへ今尚町名とすト云

和州諸將軍傳云　天正十一年癸未云々　六月中旬順慶大坂にいたり秀吉公に候す秀吉感悅ありて船場に於て宅地を與へり順慶大に修營して旅館とす今の順慶町是也云々

筒井氏傳云　夫筒井氏ハ天兒屋命の苗裔にして近衛家より出たり人皇四十八代稱德帝神護景雲二年戊申冬十一月九日に天兒屋命河内國枚岡平岡一ニ云より大和國添上郡三笠山本宮の頂に遷り給ふ時に相從ひ來る藤原姓四家あり其一人天兒屋根命に給仕して添下郡筒井の庄に住す故に世々氏とせり其名ハ筒井太夫藤原順武といふ是筒井氏の始祖なり四十二代の閒ハ勇武の名顯われず順武太夫より四十三代の嫡孫順永律師法印永一ニ作英ヲ以て武の一代とす人皇百一代後小松院應永六年己卯夏四月五日に筒井庄に生る父兵太夫順快ハ同十年癸未十月五日に卒し又家臣等守立て生長す領知ハ地方二千五百町當時の知行にして二萬五千餘石なり旗ハ白地の四半に春日大明神の五大墨字なり馬驗ハ金の分銅家の紋又同じ或ハ梅鉢をも用ゆ戰國の時に應じて最も勇武の譽れあり在治四十九年也云々　二代隆舜房光宣法印三代明舜房順盛法印四代良舜房順興法印五代榮舜房順照法印六代陽舜房法印順慶順昭法印の長子母ハ山田道安の妹也　人皇百六代後奈良院の御宇天文十八年己酉春三月三日辰の上刻和州添下郡筒井の城に誕生す小字を藤勝といふ天文二十年夏六月廿日父順昭二十八にして卒す藤勝三歳にし

て五歳まで三年餘の喪を勤む喪おわつて家督を繼ぐ山田慈明寺福須美飯田小田切五人の親族嶋松倉森の三家老政道を執行ひ藤勝成長の後政を皈せり在任三十四年の間なり代々武勇名譽の家にして且興福寺の衆徒職たり順慶其人と爲寛仁大度にして軍略智謀衆に超過し麾下を懷け商農を慈むが故に領地も先祖に越へ麾下日月に倍して大和國中大方皈服し世の唱へも殊に目出たし知行大和に於て六萬餘石の上天正五年の冬松永久秀亡びて後に其領十萬石共に領を合せて十六萬石餘なり又柴田勝家滅後秀吉より河州において二萬石加增あり天正十二年八月十一日三十六歳にして卒す云々

順慶町夜店

順慶町通東へ堺筋西へ新町橋まて凡十町許の間兩側尺地の透間もなく夕ぐれより店をつらね萬燈をてらし萬のくさ〴〵を飾りて商ふ

當所の夕市へ浪花の一奇觀にして四時ともに絶ることなく黄昏時より内店出鋪萬燈をてらし已が種々に品を飾りてこれを商ふさる程に需むる客羣をなし其好ミに隨ふて店々に稟る呉服木綿屋家具調度雜物あり楊枝屋あり婦女子の髪の飾具或へ世帶の荒道具神棚宮屋のとなりにハ佛具屋あり陶器金物打物屋蓑笠合羽傘屋下駄草履煎賣燒賣の魚店鮓店野菜菓子饅頭餅煎餅に板行店いふとも盡ぬ種々ハ實頂門より趾甲先まで用ゆる品のあらざることなく其繁昌なること比類なし殊更橋より西にいたれバ新町の花街なれバ夜更るまでも賑しくもばしも往來の閒斷(な)し又西の濱より一條内の十字街に井あり俗に井辻といふ常に蓋を覆ひて汲事なし浪華の一奇と

順慶町夜店

心齋橋北順慶街　夜市迎人松竹梅
別有珍奇福壽草　携兒時買一盆來
順慶街衢夜市開　闤闠雜苦信求來
骨董鋪邊人絡繹　歷觀蹂躪起紅塵

源華城
荒井鳴門

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

す　當町を淨國寺町といへりいにしへ淨國寺といふ寺院ありしゆへなり後世淨國寺を下寺町に移して皆人家となれり傳へて云
彼寺院の井なりと然れども寺院の井なりしを何の故ありて後世に殘し置しや信がたし按するに此所も二ツ井戸にひとしく
いにしへ家毎に井のなかりし時こゝにあつまり汲し用水にして所謂市井といふ
べきものなるべし必らず井ある處にハ市あり　辰の市賣閒の清水も是に同じ

飛埃映燭夜成霞　隔水新街是妓家　廣瀨謙
凡卉常蔬空具列　渡橋人買玉簪花
狂哥　順慶町これも日和を見合して出す夜店に人の山崎　柳亭翠鶯

油懸地藏

安堂寺町壹丁目十字街の傍ニあり石佛にして祈願の者油をそゝぐ故に此名あり往古安曇寺の石像なりといふ

緣起云　抑〻此油掛地藏菩薩の來由を尋ね奉るに元和年中地中より出現し給ひ背面の銘に天平十一年造安曇寺と幽に見えたり安曇寺といへるハ往古難波にありし靈場にて孝德天皇御幸の事日本紀に委し此安堂寺町といへるも卽ち安曇寺の古名なるよし夫だに世々の星霜を重ねて事跡たしかならず爾有に今亦ふしぎにも此街に出現して諸〻の苦をぬき樂をあたへ迷を導き給ふべき慈悲の本願あらたなれバ諸人結緣して歩ミを運び香華常に絶る事なしこゝに萱野何某か一子やまふに臥醫料すでに盡き悲しミの餘り此尊像に油をそゝぎ繩をもて警し
め其痛苦を助け給わらんことをせつに祈りけるに實や菩薩の誓ひ虛しからず病惱たちまちに平愈しけれバ其人

人歡喜踊躍して益々仰きたうとみ奉りける其事世に廣く聞え是より願ひある人ハ先繩にて卷油をかけ其ゑるしあらん事を祈るにぞいつしか世に油掛地藏尊と稱名し奉りけらし其後猶靈驗多くましますといへども本より現世所求皆令滿足の悲願なれバ今更ためて言べくもあらず唯油掛の由來安曇寺の古跡世に知る人稀なれハ古老の傳へしまゝを爰に記しいさゝか報恩に備へ奉るものならし云々

攝津志云　安曇廢寺　大坂安堂寺町地藏石像倘存日本紀曰孝德天皇五年七月旻法師臥病於阿曇寺於是天皇幸而問之卽此　續日本紀曰天平十六年帝幸安曇江遊覽松林百濟王等奏百濟樂江家次第曰舊例三日有三所禊近代同日行之三津濱禊三津濱下方禊安曇口禊云々

行幸所遊恩可垂　一人有意萬人隨
韓音徵角畜君否　遙想天平巡守時　林羅山

扶桑鐘銘集云　攝州渡邊安曇寺鐘銘此鐘今在于山城國山科安祥寺

攝州渡邊安曇寺洪鐘　右爲驚覺三世諸佛濟度一切衆生以諸人之助成作
一口之洪鐘宜爲一寺之重寶永傳萬代之不朽而已
嘉元三年歲次丙午正月廿六日　勸進法橋上人位示昭
鑄師河州丹南治部入道淨佛

按するに往古此邊をも渡邊といひしと見へたり一説に南御堂そのはじめ道修町壹丁目に有し時渡邊の御堂といひしとぞ然れバ船場の東堀の近邊をも渡邊と號せしと覺ゆ又一説に上町谷町の邊より安曇寺の瓦を掘得しといへとも未詳ならず原來其邊ニハ安曇江などの有し地とも覺へず後人尚考ふべし

〔編者曰ク原本此ノ所半丁插畫ノ豫定ニテ油懸地藏ト題シアルモ構圖ナシ〕

難波藥師堂跡

鹽町心齋橋東へ入南側ニあり一説に古しへハ天台の佛院にして本尊藥師佛ハ弘法大師の作たり年久しく荒廢におよび本尊も民家に傳り後世こゝに草堂をいとなみ安置せしが近世又他にうつして跡ハのこらず人家となれり又此ところに池ありて往昔ハ蘆間の池と號しめぐりに片葉の蘆を生ず井池と稱するハこの池の名なるべしといひつたふ　難波名所蘆分船藥師堂の條下ニ云

御本尊瑠璃光如來弘法大師の御作なり此藥師むかしハ此所に池ありしが其嶋の上に安座し給ふと申傳へり實に靈驗あらたなる故に今に難波藥師とあがめ奉る又此池を蘆間が池と云人あり宜なるかな今に難波の蘆とて此あたりに有を見はべれバ片葉に生芽して誠に世に類ひあらざるもの也されば物の名も所によりて變るといへと同じ難波の内にてさへ斯るよしあしの違ひも侍るよと先哲のあとを慕ひいにしへより難波江の歌をつゞけ侍らバ蘆ハ見へずとも詠べしと云へるもかゝる名物たる故か

明玉　難波がた蘆間の池の水の色も淺緑にそ春ハみへける　伊勢

夫木集ニハ浦近きあしまの池の水の色ハとあり又蘆間の池ハ四天王寺東門の北なる毘沙門池のことなりといへり何れが是なる哉あらず

攝津志ニ蘆間池在福島村水涸名存古來貢蘆荻村有舊記

右三箇所に舊地ありて今何れとも未詳

石濱

長堀及び西横堀又ハ東堀にもあり

此石濱といふハ何れも石匠の濱にして諸國より運送の巖石をこゝに集む尤家宅の庭中にハ山海の名石をならべ林泉風觀の望に任す又寺社邸の普請の料にハ御影立山和泉小豆嶋豐島等の名產を積累ね其好に隨ひ敷石切石溝石壇石石鳥居石高麗犬燈爐玉垣淨水盤石橋井筒道標地藏觀音大日不動阿彌陀弘法役小角香爐花筒寶篋印塔五輪石塔水溜石爐石碾搗臼あらゆる器物を石にて造り需めに應じて遠近に運送すされバ役小角も葛城の岩橋を山神に造らしめんより此に來りて誂へなバ容易架果へく思ひぞせらる

三津八幡宮

嶋之内木綿橋筋にあり此近邊の生土神なり例祭六月十五日荒和大祓八月十五日放生會　九月十五日秋祭神事

三津八幡宮　年祭

節分の夜生土の神社に參詣し或い其年の惠方にあたる方の神社に詣ずるを年參り
といふされバ諸社ともに賑わしくして甲乙なしゑかれども當三津八幡宮い江南の
陽地なるがゆへに詣人も叉花やかにして且い田鼠を除く俵子の戯れなども他に
こえて一しほに賑わし今夜諸社ともに境内に彩どりし細工飴を商ふ店多く出る年
飴とて人ごとにこれを求む其縁故詳ならず

百萬燈光祠宇明　滿場神鼓已春聲
不看綵燕插頭上　兒女皆簪鶴羽行

橋本惟孝

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

本社　應神天皇　例年八月十五日の祭禮に夜陰に及び神輿渡御の儀式ありとぞ　天照太神宮猿田彦祠　蛭子祠　菅神祠　厄神祠　金毘羅大幸神祠　其餘末社許多あり略之

繪馬舍　社前ニあり　影向松　社前巽の隅ニあり　觀音堂　西傍ニあり三津觀音といふ十一面尊　行基作

社說云　當社ハ清和天皇の御宇貞觀元年八月豐前國宇佐神山城國男山に遷座の時始て至り給ふ洲中なり其舊蹟を祀ひ祭るところ也　傳云　浪花の三津の浦といへるハ此邊なりとぞ

續日本紀云　天平勝寶五年九月攝津國御津村潮水暴溢壞損廬舍百餘云々

即ち此地なりと攝津志に見へたり

大坂鑑云　當社ハ應神天皇なり此帝御在位の時難波に御幸ありて此邊に鳳輦をめぐらし給ふ所となり抑此帝神とあらわれ大菩薩とあがめ國々所々に跡を垂給ふことハ欽明天皇の御宇なり然るに此時難波に未だ八幡宮有ことを聞ず孝謙天皇の御宇天平勝寶元年此地に八幡宮を建立せらるゝと也其濫觴を尋ぬるに聖武天皇宇佐より八幡を勸請し給ふ時最初御在世の舊迹なるが故に難波の三津にうつらせ給ふ此時にあたりて神告て曰三津寺ハ是行基菩薩止住の所なり我此所に鎭座あるべしとの神勅にまかせ寺を以て宮とすされバ行基此所において蘆の葉のそよぐを聞給ひて

蘆そよぐちほせの浪のいつまでか浮世の中に浮ひ渡らん

歌舞妓役者　歳分嘉例

歌舞妓役者ハ多く道頓堀芝居町の近邊に住居す別て嶋の内の濱邊太左衛門橋條等に軒をつらぬ涙花役者の風として年毎に歳分を祝ふを嘉例とせり故に其日ハ互ひに祝儀の禮をなし弟子ハ師匠の家に至りて新暦の吉慶をのぶる或ハ贔屓の連中など來つて加年を壽ぶくありさる程に蓬萊の盤をかざり組重の肴をひらきて酒宴を催しこれを饗應し諷ふあり舞ありて甚賑わし市中の男女これを見んとて羣集ひ街に充滿して恰も潮のわくがごとし實に江南の一奇なり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

其後物かわり星移りて幾ばくの年序を經といへども今に至りて靈驗あらたなり云々

夫木　あふことハよをへだつなと玉垣の三津の湊に手向をぞする　光俊

ゆく人の手向も見へず玉垣の三津の湊の五月のころ　行家

按ずるに三津寺ハ其原より有て後に八幡宮の別當職などつとめし者ならんか今ハ東西にわかりたれどはじめハ一處にて有しものなるべし

伏見舊趾

攝津志ニ云　伏見已ニ廢ス　故伏見川在ニ大坂島内ニ見ニ三津八幡ノ社記ニ云々今の三津八幡の邊りにありといふ

夏山雜談云　難波の伏見ハ今の三津八幡の社の邊りなりとぞ平城の都の伏見ハ菅原の伏見なり平安城ハ今の伏見なり伏見ハ伏拜の略訓にして往古旅行の人遙に都の方を拜して通たる所なり所謂神社の遙拜所のごとし八幡の伏拜など古書に見へたるも山下を通る人遙拜して往返せしといへり　云々

按ずるに紀州熊野本宮にも一里許此方に伏拜と號する地あり右同意也

三津寺

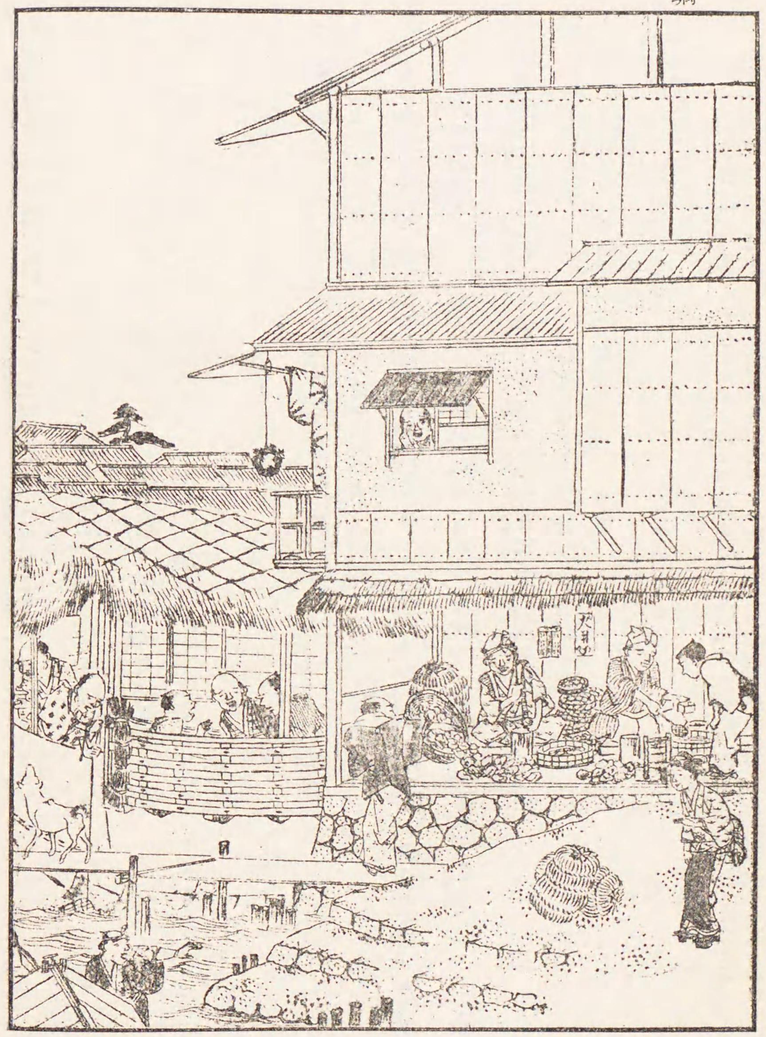
嶋之内三津寺町ニあり古義眞言宗大福院と號す

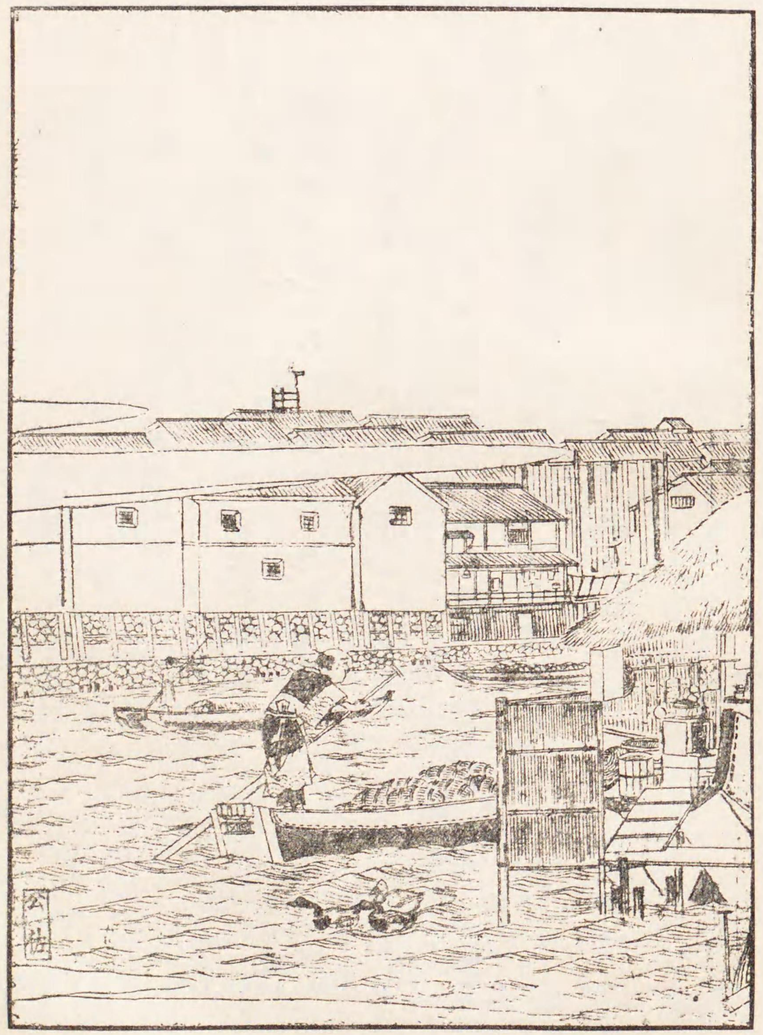
本尊　十一面觀世音　行基の作長五尺八寸寺説云行基菩薩開基し給ふ也ト先板名所圖會ニ見へたり

脇檀　左弘法大師　右藥師如來

地藏堂　本堂の前東傍ニあり延命尊を安す

牡蠣船





牡蠣船

（前々頁前頁參照）

介蟲肥美屬冬天　來繫廣陵牡蠣船　荒井鳴門

船主ノ割烹非是妙　誰尋泛宅向橋邊　其角

蠣むきや我にハ見へぬ水かゝみ

賦浪華冬景

上店蜜柑從紀州　風吹帽子冷江樓　筱崎武江

鼓鳴街上狡猊舞　燈點橋邊蠣蛤舟

蠣わりのくらい灯て見る柳かな　梅室

楠大樹

堂前ニあり近世火災のために技葉燒亡す今わづかに幹のこれり周り凡五尋餘と云燒のこりの幹の洞に如意輪觀世音地藏菩薩等を安置す當寺ハ浪花市中繁昌の地なるゆへ觀音めぐり第三十番の札所且大師めぐり廿一番の打どめなれバ詣人常に聞斷なく頗ぶる賑しき寺院なり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ三津寺御影供ト題シアルモ構圖ナシ〕

蠣船

浪花中此方彼方の橋下にあり藝州草津の浦より二十餘艘同仁保の嶋より十五艘例年十月中旬大坂に入津し年來馴染の濱々に船をつなぎ川岸に小屋をあつらひ此所にて蠣を割て商ふ凡十月廿日の頃を賣初とす且近來船中にて蠣一式を調味し汁も鱠も蠣の料理にて客を饗應なすこと流行せり所謂浪華の一奇なり

蠣船の姿や舟の旅こゝろも　獅々堂

八百橋頭繫蠣船　蓬窓引客各開筵　大熊龜陰

西遊記得廿年事　落日寒烟過海田

寒燈剝殼夜沈々　和醋調羹幽味深　鈴木茶溪

温軟遠勝西施乳　孤蓬一夕直千金

牡蠣ハ播州紀州泉州等に出するものハ大にして自然生なり味佳ならず武州參州尾州より出せり浪花にて商ふものハ藝州廣島の產にして皆三年の作牡蠣なるゆへ其味ひ美なるうへ味に過不及の論なし例年十月中旬に來り正月

瑞龍禪寺　川施餓鬼

瑞龍寺の川施餓鬼ハ島之内久左衞門町の濱において例年七月十三日の夜行わる水燈流れにかゝやき讀經の聲妙にして實や三界無緣の萬靈も一時に成佛すべく思ひせられて殊勝なり黃檗山においてハ宇治川において水燈施餓鬼あり其例に準する所にして尤浪花市中において川施餓鬼行わるゝ始原なりといふ

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

新築地

金毘羅祠

心してけふハあふかむ神の德　英風
風さためとか人のいへれハ
髻をしも切て捧る金毘羅ハ　方雅
かみなし月そまつりなりける

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

昆布鋪

浪花市中所々にあり就中心齋橋通に多し　抑荒昆布山出しをはじめ調味昆布菓子昆布求肥昆布青こんぶとろゝ平がき揚こんぶはつ霜刻うすざくら結ひこんぶ焙爐昆布花あげ水引さま〳〵に手をゝ盡せし細工昆布擧てかぞふるに遑あらず斯數多く製法なし軒をあらそひ商ふことゝ他邦にゝ類ひを聞ず實に浪花の一奇といふべし　昆布ゝ東海に生ず蝦夷松前および奥州の海底石に附生ず蝦夷島に龜田と號くる地あり凡三十餘里の海中寸地も亦有すといふことなし尤味はなゝだ美なり又津輕南部よりも出す味ひこれに次といふ

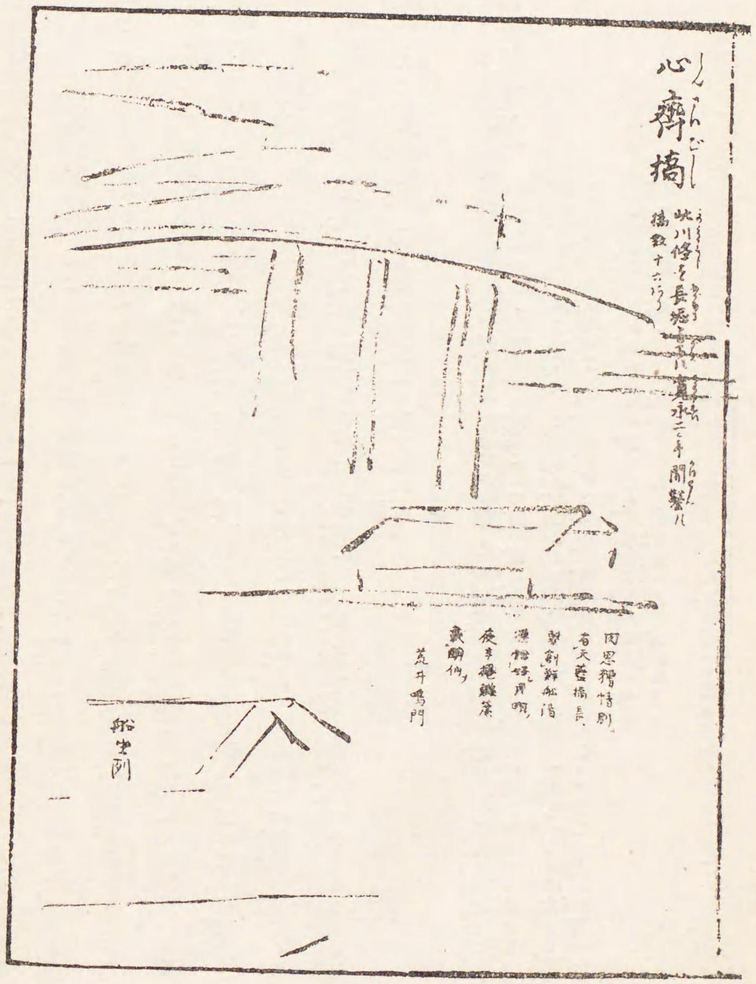
〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ右ノ通リノ書入レアルモ構圖ナシ〕

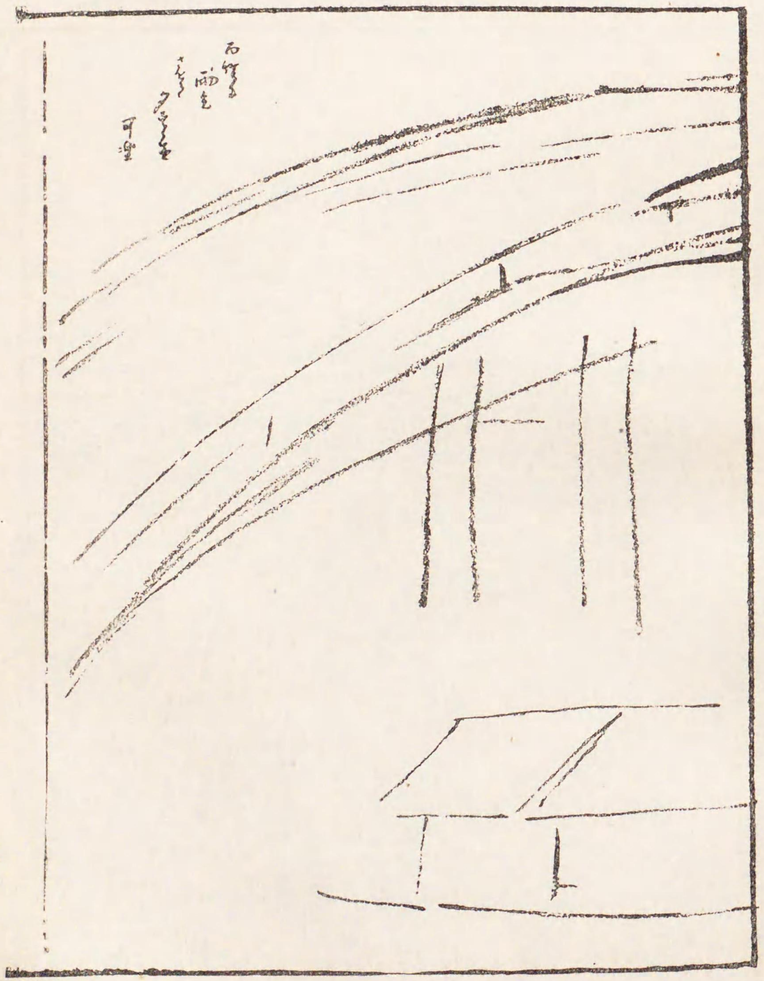
下旬に至つて歸帆す廣島にて畜養ところ各城下より一里あるひゝ三里ばかりも沖に及べり干潮の時潟の砂上に大竹を以て垣を結ひ列ぬること凡一里ばかり號けて「ヒヾ」といふ高一丈餘長一町ばかりを一口と定め分限に任せて其數幾口も畜へり垣の形への字の如く作り三尺餘の隙を所々に明て魚其間に聚るを捕るなり「ヒヾ」ハ潮の來る毎に小牡蠣つきて殘るを二月より十月までの間ハ時々是を備中鍬にて搔落し又五間或ハ十間四方ばかり高一丈許の同く竹垣にて結廻したる籠の如き物の内の砂中一尺許堀り埋ミ畜ふ事三年にして成熟とす凡蛤蚌の屬皆胎生卵生なり牡蠣のミ惟化生の自然物にして石につきて動くことなけれバ雌雄の道なく皆雄なりとするが故に牡蠣といふ蠣とハ其貝の粗大なるを云とぞ礒に有て石に付て多く重り山のごとくなるを蠔山といふ離れて小なるを梅花蠣といふ則ち廣島より出すもの是なり

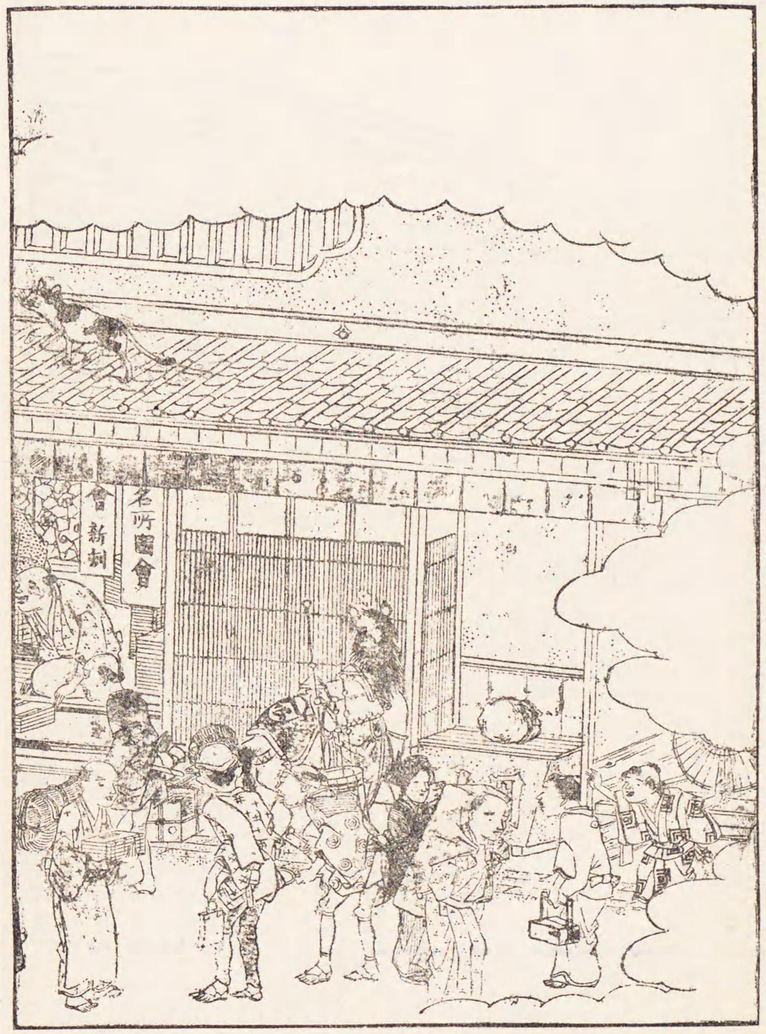
心齋橋條夜鋪

心齋ばし南詰より戎橋まて凡七丁許の間兩側毎夜内店出店すき間なくつらなり萬燈をてらし其賑ひいふばかりなし原來當地ハ繁花にして晝の間の昌んなることゝ東雲の頃よりして黄昏に至るまで往來さ〳〵劣らず入相時より二更の頃まで男女の羣集あたかも潮のわくがごとし或人の滑稽の句に心さいの齒をひくがごとし然るに近來夜市はじまり次第にさかんになりて古しへより在來りし順慶町にばし日和になると金がふりト言ひしも實所理と聲ゆ松屋の吳服店ハ清水町の角にありて頗るにぎわしく所謂江南の富商なり

〔編者曰ク原本此ノ所壹丁插畫ノ豫定ニテ心齋橋通夜店　大丸吳服店ト題シアルモ構圖ナシ〕


心齊橋
此川修を長堀と共に寛永三年開鑿ス
船場門




名所圖會
新刻

本
本
公佐

心齋橋通　鬻書

（前々頁前頁參照）

武編文帙利堪鋤　戸戸乘晴驅白魚　源　華城

肆上老商私語我　昨朝交易得珍書

書林櫛比心齋橋　二酉五車卷帙饒　荒井鳴門

可知海外同文運　四庫珍編波及遙

架上清風走蠹魚　牙籤萬卷每家儲

孰爲陳起孰毛晉　近日書林亦讀書　廣瀨旭莊

心齋橋通書肆

船場より嶋の内にいたり當橋すじに數多あり尤浪花中において書林數百家此方彼方に店を開けり就中此所に軒をつらねて繁昌なり

當橋條といふハ南ハ道頓堀戎橋にして浪花第一の繁花なれバ晝夜を分たず往來街に充滿せり原來兩側の商賈雅俗貴賤打混じ何にまれ需むるに乏しからず頗る辨理の街なり就中巨商の書肆多く鋪前にハ新古の諸書をならべ棚箱にハ數萬の卷册を詰たりされバ朝より注文を羅章奴かまびすしく刷印匠藏に入こめバ摺本背負て出る部面屋あり表にハ諸國へ送る本櫃の荷つくり内にハ注文の紙づゝみ帳合する管家紙撰する新隸客を迎へる甲幹或ハ古寫本さがす好事客あれバ滑稽本を買ふ粹客あり經史を見る儒者佛書ねぎる出家其餘神書歌書俳書詩文隨筆物語醫書軍談繡像小說字引節用百人一首女用文章諸禮式兒童教訓石刻法帖唐樣和樣の手本物まで需に應じて鬻ぐが故に終日店の閒暇なく書の林の繁れるハ文運文華の開くるまゝ書を讀人の多なるにこそ是ひとへに昇平の御恩澤仰ぐべし尊ぶべし且黃昏よりして故書の市ありて數多の書賈市屋に集ひ交易最賑しゝ

忠孝庶民

當津ハ萬國廻船の水門なれバ諸州の人物貴となく賤となく善となく兇となく入ましるの地なり往昔ハいざあらず近頃忠孝の者市中にありて公の上聞に達し台命あつて御褒美として悉く銀若干を賜ふ則先板攝津名所圖會に見へたり再びこゝに出す

元祿七年の頃

北新町鐵屋が家に土賣七兵衞本町三丁目平兵衞傳兵衞の兄弟

元文四年

堀江橘通いち十六歳まき十四歳とく八歳初五郎六歳長太郎養子年不知此父太良兵衞羽州秋田通船の居船頭

なり犯罪ことありて既に刑に行わるべきに定まりしを五人の孝子父の命に代らんと願ひ出しニより遂に父の命を助くこれを元文の五孝子と賞す

寛政二年

南問屋町燈心賣娘かう十五歳養母ニ至孝なり又天滿壹丁目播磨屋源兵衛三十歳妹梅廿九歳同弟大吉廿六歳同妹とめ廿四歳同源藏廿二歳同妹かね廿歳兄弟六人のもの孝貞にして母を撫育し家むつましく業を出精すること他に異なり

同四年

天滿南木幡町常陸屋治右衛門か娘みよ九歳其母痟症にして双傷におよふを見つけて取とめ命をたすけ生涯孝心おこたらず　又天滿北森町山本屋儀兵衛か下人長兵衛主人へ忠心を盡す

天明五年

天滿岩井町籠細工屋熊次郎十四歳弟馬之助十歳至孝なり

同五年

西高津新地九丁目喜八廿二歳吉松十八歳の兄弟母につかふまつる事君のごとし又酒邊町の源兵衛廿三歳父母に孝を盡すこと際なし又立半町龜市十六歳みよ十一歳おとゝひとも親々に至孝を盡すこと拔羣なり

同七年

幸町五丁目勘平娘かね十五歳業に木綿ろぼりをして十一歳の時より晝夜寢す出精し孝養疎ならず平野町爐屋が下人善太郎四十歳三代の主人に忠勤し已が母に至孝なり又御池通伊勢屋佐兵衛主家を相續して忠貞おごそかなり屋が家に住しゆき廿二歳母へ孝をつくし幼き妹をそたてなりわひ怠らずとかや

同八年

南堀江鐵

以上先板に出す所其後凡六十年の間忠信孝悌の輩ちゝ〳〵有て　公より御褒美を賜わること擧て枚ふるに遑あらず故に就中其事の異なるを聊こゝに出す

○文政十年亥二月五日の夜道頓堀立慶町出火の時吉左衛門町筑後の芝居見物の老若男女驚き騒き周章大かたならず我一にと逃出すこと恰も鼎のにゆるが如く死亡怪我人些からず斯有し程に宗右衛門町紀伊國屋儀兵衛是を見及ひ此家に滞留せし泉州貝塚の渡海船の船頭庄七水主彌七利兵衛等に差圖をなし空船を乘出し川中に落入もの又ハ岸岐際に押重り危難に及ふを悉く右の船にのせて是を救ふ布袋町哥舞妓役者市川鰕十郎も下人季助を連小船に打乘川岸に

漕よせ泣さけび居る男女を助く九郎右衛門町小西屋又兵衛も所持の茶船を以て大勢を助くる事右にひとし鰻谷二丁目倉橋屋勘助西高津新地九丁目哥舞妓役者藤川友吉兩人ハ惣崩れと成て大道に押倒され必死となりし婦女子小兒を助け介抱に及ぶこと奇特の取はからひなりとて夫々に　御褒美を賜る

○天保十五年辰九月布袋町哥舞妓役者文七弟子中山文五郎師匠文七を大切ニ取扱ひ且文七困窮に及ぶを氣毒に思ひ其身の給金の内を減し師匠へ分遣し手元を取續かせ尚買がゝりの滯を償ふことも數なりとぞ又其身芝居へ抱られし節ハ成丈師匠を同芝居へ抱こミ貰ひ文七藝中にも老體にて進退危ふく見ゆる時ハ見物人の氣請も宜しからずと種々に心を配り目立ざる樣傍に附て力を添萬端誠實を竭し師匠を大切にいたす段かゝる爲業の者にハ別て神妙奇特なりとて　御褒美を賜りける

○弘化四年未九月御前町哥舞妓役者中村芝翫去る寅年以來歌舞妓役者等の取締方追々〳〵　公より仰渡し給ふの後專ら質素を守り衣服等も至つて麁服を用ひ其餘もすべて石に準じ兼て仰せ渡しの廉々堅く守り身分を愼ミ藝道を出精し弟子中の示し方迄も行屆きしにより奇特の儀と有て　御褒美を下されける

○嘉永元年申七月内久寶寺町紙松屋町條角賈布屋仁三郎妹とミ十歳一夜强盜三人押いり拔身を持て威す母ハおどろき後戸より遁れ鄰家にいたつて救ひを乞ふ仲兄市次郎ハ紙苞の中に匿る賊ハ白刃を振て兄仁三郎に迫りて金銀衣服の有所をとふ仁三郎こたへて我ハ小厮なれバ衣財の在所を更にしらずといふ賊重ねて曰汝小厮といへども

いかでか是を知らざることあらん哉言ハざれバ忽ち刺殺さんと甚も危ふく見へたる所に妹とミハ急にかけ寄兼て貰蓄へし粒銀二を貨包より取出し兄の袖を引て曰く兄公はやく是をわたして免れ給へといふ賊ハこれを聞よりして偖ハ己ハ兄なるを小厮なりと僞るこそ甚惡し此上ハ速に衣財の在所を告なバよし爾なくバ直に殺害すべしといふ妹富ハ右に幼少の弟吉藏を扶けかゝへ左に賊の裾をとらへて曰先待てたべ兄公を今殺されなバ翌よりして誰あつて母をやしなひ家をたてんや希わくハ此身を以て兄に代ゆるし給へとくれ〴〵も涙ながらに侘るにぞ賊徒幾感嘆し類ひまれなる女子にこそとて終に只の一品をも奪ずして稍て打連此家を出ける斯て後賊等こと〴〵く召捕れ一五一十を白狀なすにいたりて官府より此とミを始め家内をのこらず召給ひこれを委く問わせ給ふに悉賊の言に違わざれバ大に嘆賞し給ひ當座の褒美として乾菓子一器これを綯紗帕にて覆ひ鰒鰒を副て下し給ふ後官命によつて御褒美を賜る其仰ニ曰　右之者儀盜賊三人押入拔身を持申威を不恐幼年女之身ニて兄を助度存幼稚之弟ニ怪我爲致閉敷與同人を乍抱兄を構ひ盜賊に立向我を殺兄を助ケ呉い様申聞惡黨共之强氣を取ひしぎ爲致感動ひ始末不及大人氣健之振舞ニ而幼年ニは稀成心底格段奇特ニ付爲褒美銀拾枚差遣ひ云々

其後賊ハ罪科きわまり浪花中を引渡し刑に處せらるゝの時此布屋の門を過て嘆息して曰是まで多くの家に押入て强盜をなすといへども未たかつて期る女子の如きを見ずとぞ聞もの感嘆せずといふことなし　實に浪花に於て近世の美談なり

長うた　美臣

あしがちる　浪花御里に　たらちねが　わく子三人を　枕べに
あとべにふせて　うまひして　有ける夜半に　ちらなみと　世の人皆の
かしこめる　きたなきやつこ　おふけなく　黄金白金　かすめむと
つるぎ拔もち　三人まて　たけび入來ぬ　母も子も　おぢをのゝきて
せんすべの　たときちらねば　みつ栗の　なかのめのこが　かしの實の
ひとりぬきでゝ　立むかひ　はゝのみことや　はしけやし　兄弟なしそ
その代に　我をバせよと　目かゝやく　劍にすがり　はなたねバ
その眞心に　くなたふれ　醜のちこをも　ちかすがに　めでやしにけん
物とらず　にげていにけり　その年の　とをにもたらぬ　うなゐ兒が
いそしきわざと　めでたまひ　いそしみまして　おほやけに　めさせ給ひて
ほめ給ふ　御ふみにそへて　白かねを　こゝた賜ひし　ことたふき

○